欲望の体制

現代文明の描像

小林　道憲

欲望の体制

―現代文明の描像―

小林　道憲

目　次

欲望の体制
1　欲望のモニュメント
2　欲望の氾濫
3　精神なき世界
4　現代文明の行方

自然の略奪
1　自然性の喪失
2　反自然的世界
3　自然復帰と自然の保護

根源性を喪失した人間
1　断片化した人間
2　群衆化した人間
3　反応人間

歴史の喪失
1　復帰と再生
2　過去からの断絶
3　現在の喪失と未来への逃避
4　過去への破壊的侵入

大衆の氾濫
1　大衆の原理
2　体制への甘え
3　大衆の満足と不満
4　大衆の偶像

5　大衆による消費
6　大衆と価値の低落

欲望の機関としての国家
1　欲望の調整機関と統制機関
2　欲望の自由、欲望の平等

膨張する体制
1　膨張の諸相
2　膨張の限界

量の支配
1　量の科学
2　量の政治
3　量の社会
4　量の経済と統計

現代文明の諸相
1　近代化
2　組織化
3　平均化
4　有用性
5　均衡の喪失
6　生の謳歌
7　時間の喪失
8　不可知性
9　大地への帰還

欲望の体制

1　欲望のモニュメント

高層ビルと塔

今日、大都会では、おびただしい数の高層建築が、あたかも巨大な生きものででもあるかのように、互いに高さを競い合いながら林立しているのが目につく。しかも、それらは、無限に増大する現代の欲望に押し上げられてでもいるかのように、ますます高くひしめきあって伸びていく。それは、現代の欲望の限りない膨張の象徴なのである。

高層ビル、これは、現代という〈欲望の氾濫の時代〉のモニュメントである。現代文明のもとで、現代人は、いわば欲望の塊と化してしまった。そのような現代人が、自分達の精神なき記念碑として、あの巨大な高層ビルを建てたのである。もしも、そうでなかったなら、あのような奇怪なコンクリートの塊を積み上げつづけることはできなかったであろう。

なるほど、それは地上に建てられてはいるが、しかし、大地にしっかり根を下ろしているようには見えない。積み上げられた積み木のように、今にも崩れ落ちはしないかと思われるほど、それは不安定である。それは、また、広大な大空に向かって屹立してはいるが、しかし、天上に憧れて建てられているようには思われない。むしろ、それは、天上に向けて打ち立てられたミサイル基地のようである。高層ビル、この欲望のモニュメントは、天にも地にも馴染むことはない。それは、大地に背き、天を欺き、大自然に反逆する得体の知れない怪物のようである。現代人は、この巨大な現代のモニュメントの内や外に、白蟻のように群がり集まって、自分達の無限の欲望追求の生活を営んでいる。

確かに、かつての時代にも、人々は自分達のモニュメントを建ててきた。大寺院や神殿や墳墓、これらはかつての時代のモニュメントである。しかし、それらは、明らかに、現代のモニュメントとは異なっている。人々にそれらを建てさせたのは、永遠なる救済への願望や神々への畏敬の念、または死への畏怖や不死への希望の念であって、単なる欲望が建てさせたのではなかったであろう。それらは、どこまでも精神の生み出したものなのである。大寺院や神殿や墳墓、それらは〈精神の生きていた時代〉のモニュメントであり、したがって、永遠なるものの象徴なのである。

ところが、現代の高層ビル、この現代のモニュメントには、どれほどの精神の痕跡も認められない。そこには、永遠なものも根源的なものも宿ってはいない。人々にそれらを建てさせたのは、永遠なる救済への願望や神々への畏敬の念や死への畏怖の念なのではない。逆に、人々の欲望の無限充足への渇望が、そして、ただそれだけが、あの巨大な高層ビルを建てさせたのである。崇高な精神を見失ってしまった現代人は、コンクリートという欲望の塊のみ

を積み上げ、あの醜怪な欲望の塔を築き上げたかのようである。

人間、このいつも天を見上げるものは、昔から今日に至るまで、幾度もいや高き塔を建ててきた。しかし、かつての時代の塔は、天上の神々への尊崇を表現する精神のモニュメントであったのに対し、今日の時代の塔は、天上の神々を欺き、それに反逆しようとする欲望のモニュメントなのである。

かつて、バビロンの人々は、神に反抗するために、天にとどくまでの塔を建て、神の怒りに触れたと、ユダヤの民は言い伝えた。現代人は、現代のバベルの塔を建てたのである。かつてのバベルの塔には、それでもまだ神の怒り(いか)が降(くだ)されたが、現代のバベルの塔は、もはや神々も怒ることさえできないのではないかと思われるほどである。それは、天上の神々を沈黙させてしまうほどに増長したのである。

かつての大寺院の建築は、その様式や形式、塑像や装飾に至るまで、その全体が、まさに全体として、永遠の救済を希求する人々の深い信仰から生み出されたものであった。そこには、信仰に根差さないものは何ひとつとしてないように思われる。それは、精神のモニュメントだったのである。人々は、そのような精神のモニュメントを中心にして、様々な生活を営んでいたのである。そこには、精神の秩序があった。

それに反して、現代の巨大なコンクリートのビルディングには、もはや、そのような高貴な精神のひとかけらも見当たらない。そこに見出されるものは、ただ、人間の欲望追求の意志だけである。それは、その様式や形式の隅々にまで行き渡っている。

昔の寺院建築などは、有用性の観点だけから眺めれば、ある意味で余分のものばかりだったとも言える。しかし、この余分のものをもつということこそ、とりもなおさず、精神の本質に由来することなのである。これに対して、今日の近代建築は、ただ単に有用性の見地だけから造られ、この余分のものを捨象してしまった。現代の高層建築が徹底して機能性を追求しているのは、そのためである。有用性、これは現代を支配する価値基準である。過度な欲望は、どこまでも自己のためになるもののみを追求していくのでなければ、およそ満足することができなかったかのようである。

かつて遙かな遠い昔から、実に多くの文明が何度も興亡盛衰を繰り返してきた。現代文明もまたそのうちのひとつであろう。しかし、かつてのどの文明を取り出してきても、それが築き上げた大都市の中心やまわりには、必ずといってよいほど、大きな神殿や寺院が見出される。人々は、いつも、神々に寄り添いながら生きていたのである。

ところが、現代の大都市では、そのような大きな神殿や寺院らしきものは、現代における精神の地位を象徴するように、片隅に追いやられているか、追いやられていない場合でも、林立する高層ビルの影に、不釣り合いに肩をすぼめて隠れているだけである。それは、まるで、現代の喧騒からどうにかして身を護ろうとしてうずくまっている人影のようである。それは、なんら現代都市の中心になってはいない。それどころか、現代では、例えば大きな企業が一都市の中心になって、まるで昔の城下町のようなものをつくっているような有様なの

である。

高層ビルの森のような今日の大都会には、およそ秩序というものがない。ちょうど、現代人の精神状況を表現するかのように、雑多なものが混在しているだけである。このようなことは、いまだかつてなかったことであろう。今日の大都市の風景は、あたかも神々の見捨てた廃墟のようでさえある。

現代文明は、以前のどんな文明とも異なっている。それは、いまだかつてこの地上に現われたためしのない奇怪な文明なのである。それは、〈神なき文明〉とでも呼ぶべきであろうか。たとえ仮にまだ神々が生きていたとしても、少なくとも、これほどまでに神々のないがしろにされた文明はなかったであろう。

大都会と略奪

高層ビルだけではない。現代文明の生み出したもので、欲望の自己表現でないものはない。しかも、それらは、貪欲な盗人のように、周囲のあらゆるものを略奪し、破壊し、駆逐してやむことをしらない。

大都会から這い出ているコンクリートの高速道路は、奇怪な生きものの食指のように、山や川を引き裂いて伸び、おびただしい数の自動車が、まるで餌をみつけた蟻たちのように、忙しく出入りしている。列車も、自然攻撃の突撃隊のように、大都会から進撃し、戦果を上げて帰って来る。また、中生代の怪鳥にも似た飛行機の群は、さながら、自然という外敵を寄せつけまいとして飛び立っていく戦闘部隊のようである。さらに、海を割って出入りする巨大な船舶の汽笛は、海をも支配下に収めた現代文明の鬨の声のようにさえ聞こえる。さらに、また、山々をまたたくまに掘り崩してしまうブルドーザーは、現代文明という欲望の怪物の手足のようである。これら、現代の限りなき欲望を表現するものどもは、外部のあらゆるものを略奪破壊してやむことをしらない。

大都会の内部には、もうすでに略奪され尽くした自然の残骸しか残っていない。ここでは、人間達は、自然のうちで自然に寄り添うように集まっているのではない。逆に、人間達は、自然を略奪しようと、絶えず虎視眈々として待っている盗賊の群のようである。そして、この欲望の集積地のような大都会は、ちょうど癌細胞が周囲の正常な細胞を駆逐してどこまでも自己増殖していくのと同じように、まわりの山や田畑を蚕食して、ますます郊外へと自らの支配権を拡げて大きくなっていく。自然が人間の欲望によって侵蝕され、拉致されたのである。しかも、この大都会の影響は、ちょうど癌細胞がまたたくまによその器官に転移していくように、あらゆる地方都市に拡がり、これを都会化して、画一的なものにしてやまない。それは、現代の欲望の限りない増長の表現なのである。

もしも、まだ、現代人が本当に自然心を保持しているのなら、これほどまでに、自然が人間によって駆逐されるというようなことはなかったであろう。精神は自然根源的なものから

生い立ってき、自然根源的なものによって育まれてきた。だから、人間精神は自らの故郷を忘れず、絶えず根源的自然への帰還を希求してきたし、いつも自然との調和を念願してきた。人々がいつも自然の神秘性への畏敬の念をもちつづけてきたのは、そのためである。ところが、永遠根源的なものへの憧憬の念を忘却してしまった現代文明は、それとは反対に、自然を欲望のもとに支配し征服できるものと考えたのである。原水爆の奇怪なきのこ雲は、そのような現代文明の無限の欲望の極限を象徴しているかのようである。

2　欲望の氾濫

欲望の体制

現代人は、いまだかつてなかったような途方もなく巨大な体制を築き上げた。他ならぬ〈欲望の体制〉を築き上げたのである。これが、現代文明といわれるものの正体である。

ここでは、人間の欲望が中核をなし、人々は、これのみを支点にして動いている。しかも、この欲望が、人々の内部から越え出て、絶えず外部の世界へと果てしなく拡がっていく。経済や技術のとめどない膨張は、その最も顕著な表現である。秩序ある精神の規制を失った欲望が、まるでひとつの生きもののように、かつての精神の残骸をも餌食にしながら限りなく自己増大し、世界に氾濫したのである。宗教や文化のかわりに、経済が重視され、社会体制までもが経済概念によって規定されるようになったのは、そのためであろう。

十九世紀以来、世界史の大きな潮流となってきた〈近代化〉の流れは、この欲望の巨大な体制を地球的規模において築き上げようとしてきた現代人の飽くなき営みであった。現代人は、産業革命によって、それまでの有機的な構造を打ちこわし、物資の大量生産と大量消費を可能にする機構をつくりあげ、そのために政治制度を変革し、人民主権による中央集権機構を築き、自由・平等のイデオロギーのもと、社会を平均化し、こうして、それまでの有機的秩序を機械的組織に変革してきた。これら〈近代化〉を特徴づける様々な変革は、〈欲望の体制〉をつくりあげていくための手段だったのである。

十九世紀以後の人間は、この〈近代化〉のために多くのものを犠牲にしてきた。なかでも大きかったのは、伝統文化、とりわけ宗教が犠牲にされたことである。我が国でも、西洋の近代文明の受容というしかたで始まった明治維新以来の近代化のために、伝統的精神がどれほど破壊されてきたことか、量り知れないものがある。西洋でも、東洋でも、巨大な〈欲望の体制〉をつくりあげるために、価値ある文化を犠牲にしてきたのである。

それだけでなく、現代人は、この現代文明をつくるために、世界観そのものさえも逆転してきた。ヨーロッパ近代で起きた神中心から人間中心の世界観への逆転は、それを最もよく代表するものである。自然観においても、自然への畏敬の念に根差した旧来の自然観から、自然は人間のための手段にすぎないと考える近代の自然観へと転換してきた。

ここ二百年ほどの間に現代人が築き上げてきたこの巨大な現代文明は、世界的な一様化に向かって、今日もなお膨張しつづけている。確かに、今日のこの巨大な機構は、まるでどこ

までも大きくなっていく飢えた怪物のように、膨張に膨張を重ねている。かつてまだ精神の生きていた時代には、様々のものがひとつの中心に向かって求心的に秩序づけられていたのだが、今日ではそのような求心力が失われ、あらゆるものが絶えず遠心的に拡大膨張していく。しかも、量的にのみ膨張していく。

物資の大量生産と大量消費を可能にする近代の経済機構が、産業革命以来、堰を切った怒濤のように地球規模において膨張しつづけているのは、その最も端的な表現である。経済ばかりでなく、現代の世界では、社会機構にしても、政治機構にしても、何もかもがひとつの有機的な秩序の中に収まることを拒否して、限りなく膨張していくという傾向を示す。しかも、現代の体制は、癌細胞のように、絶えず膨張していかねば生きていけないという構造をもっている。そして、癌細胞があらゆる細胞を駆逐して自ら破滅するまでは膨張をやめないように、今日の膨張の体制も、自らの原理によって自らが破局を迎えるまでは、ほとんど運命的に果てしなく膨張していく。近代が〈進歩〉と言い慣わしてきたことは、この無限膨張のことに他ならなかったのである。無際限な量的膨張、これは規制を失った欲望の本質に由来するものであり、欲望の無限氾濫によって成立する現代文明の最大の特徴である。

大衆の氾濫

限りない欲望がとめどなく氾濫して、あらゆる領域を蚕食しながら、内的世界も外的世界も占拠し、途方もなく巨大な〈欲望の体制〉を形づくったということ、これがとりもなおさず現代文明の本質である。

大衆の氾濫は、この欲望の氾濫の社会的表現である。大地から離反し根無し草のようになってしまった今日の大衆は、世俗的な幸福と利益という尺度を唯一の価値基準にして、あらゆる場所に氾濫し、そこを占拠した。そのために、本来は精神の支配する高貴な領域であったものが大衆の原理によって侵食され、その結果、それは、大衆と同じ世俗的レベルに引き下げられてしまったのである。現代の大衆は、真なるもの、善美なものがあっても、それに自らを従わせ、それに向かって努力しなければならないという感覚を持ち合わせてはいない。逆に、大衆的心情をもったままで、そこに侵入し、それを自分達の福利に供していく。〈欲望の体制〉は、そういう大衆をほとんど機械的に大量生産し、この体制のあらゆる部分に進出させ、介入させ、支配させたのである。

〈欲望の体制〉は、そのようにして、大衆に実に多くのものを用意し、約束し、ありあまるほどのものを何不自由なくふんだんに供給した。そのために、それに慣れきってしまった大衆は、今度は、自分達の欲求が少しでも満たされなかったりすると、あたかも自分達の当然の権利ででもあるかのように、国家や社会に対して無限の要求を一団となって主張するようになる。現代社会は、そのように、全体に対しては責任をもたず、分配にだけは与ろうとする大衆によって出来上がっているのだから、そのような社会が欲望の過度に肥大化した途方もない社会になるのも、不思議なことではない。

現代の世界では、〈欲望の体制〉に参与するかぎりにおいてのみ、生存が保証されるにす

ぎない。個人の生においても、これに参与しない部分、例えば自然の神秘性への感受性などは、現代の世界に適合しないために生かされることがなく、どれほどの価値も名誉も与えられない。一輪の野の百合への感動も、そばを通り過ぎて行く自動車の騒音によって掻き消されていってしまうようなところに、どうしてすぐれた詩が生まれ生かされる場がありうるだろうか。

現代を支配しているものは神でもなく、人間でさえもない。途方もない現代の怪物、〈欲望の体制〉が世界を支配しているのである。ここでは、人間は、この怪物の単なる細胞にすぎず、その手となり足となり、胃袋となり頭脳となって、これに隷属している。というより、隷属するかぎりにおいてのみ生きることができるのである。現代社会は有機性を失った機械的な組織社会であって、この組織の歯車に組み込まれなければ、人々は生きていくことができない。

現代人は、〈欲望の体制〉に奉仕する奴隷のようである。近代社会は、人間が人間を超えるものを否定し、人間が人間の手で歴史も社会も新しく構築していくことができると考える観念によって成立した。しかし、その結果、今日では、逆に、人間はその主人の座を追われ、人間はすでに自分のつくったものによって支配されてしまっている。

この〈欲望の体制〉から逃れることはできない。それはあまりにも巨大になりすぎたから、単なる個人の力では、もはやとどめることも引き返させることも、どうすることもできない。それは一種の運命であって、この巨大な運命は、人が同意すれば彼を運び、人が同意しなければ彼を強制する。われわれは、ここでは、運命という車につながれて否応なしに引きずられていく犬達のようである。それでいて、この運命は自分でもどこへ進んで行くのかも知らずに、ただやみくもに逃走していくだけである。

3　精神なき世界

非世界という世界

現代の世界では、大地にしっかり根を下ろし、悠久な自然の恵みに感謝し、天上地下の神々に崇敬の念を払う、そのような精神がすでに忘れられている。逆に、現代人は、大地から離反し、自然を略奪し、神々をないがしろにしながら、限りない欲望追求の生活を送っている。さらに、現代の世界では、そのようなことを助長する外的世界が、すでに動かしえない現実となって存在するに至っている。〈欲望の体制〉のもとでは、精神が散乱してしまったばかりでなく、逆に、精神なきものが無限に氾濫し、ひとつの〈精神なき世界〉が出来上がってしまっているのである。永遠根源的なものへの憧憬に根差す有機的精神が崩壊し、逆に、永遠ならざるもの、非根源的なもののみを追い求める組織的世界がつくりあげられてしまっているのである。

なるほど、いつの時代でも、人々は欲望追求の生活を営んできた。しかし、かつてまだ精神の生きていた世界では、それを超える確固とした精神の世界が、宗教や倫理という形で歴

然として存在していた。しかも、どんな放蕩息子でも父親によって迎え入れられたように、どんな堕落も、この世界のうちに所を得て秩序づけられていた。

ところが、現代の世界、この〈精神なき世界〉では、もはや、そのような〈精神なき世界〉に先立つべき確固とした〈精神の世界〉が存在しない。それどころか、逆に、人々の精神に先立って、それを抑圧する〈精神なき世界〉が歴然として存在するに至っているのである。そして、精神あるものが、外部の組織化された〈精神なき世界〉によって排除されるといった有様なのである。〈欲望の体制〉が精神の秩序に取って替ったのである。

この世界にあっては、人々は様々の快楽に目を向けており、これら永遠ならざるもの、非根源的なもののみを支点にして動いている。しかも、それが、ここでは〈世界〉によって保証されている。宗教や文化や倫理が相互に連関することによって世界の枠組みが秩序づけられ、そのうちで様々なものが有機的に作動する、そのような〈世界〉が、今日の世界ではすでに崩壊してしまって、人々を囲む場は、むしろ一個の〈非世界〉となってしまっている。そればかりか、現代は、この〈非世界〉が〈世界〉化したのである。〈欲望の体制〉とは、そのような〈非世界という世界〉なのである。

ここでは、〈精神なき世界〉が個人に先立って存在するから、われわれは、初めから、そのような〈精神なき世界〉に動かされて、それが当たり前だと言わんばかりに、人生を営んでいく。われわれは、最初から、何の疑問も懐くことなく、この精神なき場に生かされて生きている。

ここでは、人々の魂の城砦を欲望の大群が占拠し、人々は、まるでコンクリート文明の寄生虫のような生活を送っていく。人々を取り巻く外的世界も、人々のうちなる内的世界も、すでに希薄化してしまっているから、そこに、様々の刹那的なものが押し寄せてきても不思議ではない。現代はなにごとにつけ刹那的な時代であって、それは、持続というものを知らない欲望の本質に由来することなのであろう。高層ビルの谷間を蟻のようにあちこち忙しく行き交っている現代人に、一体それ以上の何ものがあると言えるであろうか。現代人は、あたかも非真理の暗い洞窟の中に縛られて、しかも満足しきっている囚人達のようにさえ見える。

持続なき時代

現代、この〈精神なき世界〉では、人々は真善美への感覚を衰弱させてしまっているから、かつてのようなすぐれた創造性は失われる。十九世紀以来、現代人は、坂道をころげ落ちるように頽落してきた。二百年前の人々と比較するとき、今日の人々は、どれほど精神を麻痺させてしまっていることであろう。芸術にしても、哲学にしても、十九世紀から二十世紀は、まだしも危機意識の上に立つというしかたで創造的なものが生み出されたが、それに対して、現代の創造性の欠如は目を覆うばかりである。現代人は、確かに加速度的に没落してきたのである。

現代は文化的頽落の時代であって、ここでは、ただ断片的な言葉が大量生産され、大量消

費されるだけである。今日、創造活動らしきものがあったとしても、それは単に量的な生産活動にすぎず、永遠根源的なものに根差したものではない。それどころか、むしろ、ここでは、永遠なものから遠ざかり離脱することが創造性と見間違えられるといった有様である。欠如態から生まれ、すぐに欠如態のうちに消えゆくものが、創造と履きえられるのである。

このようにすべてが消費されるために生産され、永続するもののない持続なき時代にあっては、宗教や哲学は本来のしかたでは不可能になる。宗教や哲学は、本来、生成消滅を繰り返す現実世界を超えて永遠不滅の実在を求め、それでもって、人間存在の根本基盤を希求しようとする精神に根差していた。しかし、現代の世界には、そのような永遠根源的なものを可能にする持続ある精神的場所がない。したがって、今日の世界では、本来の宗教や哲学がそれにふさわしい地位を与えられず、世界の有機的な一部ともなりえない。なるほど、今日でも宗教や哲学は存在する。しかし、それも、正統なものであれば、現代世界に適合しないために、時代から取り残されてしまっているし、時代とひとつに共鳴し合っているものがあれば、それ自身、現代の頽落を描いているにすぎない。確かに、今でもなお、かつての伝統的な精神に則って、それを保持している者もいるであろう。しかし、今日の世界には、それを生かす秩序がないから、それは、かえって時代遅れの骨董化したものとしてしか映らない。

高貴な精神

現代の世界、この〈精神なき世界〉では、高いものと低いものの秩序が水平化され、すべてが混沌の中に一様化され平均化されてしまっている。だから、このような平均化された世界からは、偉大な精神など生まれてはこないであろう。

確かに、このようなところでも、高貴な精神は存在する。しかし、ここには、もはや高貴な精神を生かす秩序ある有機的な場がない。例えば、今仮に深遠を窮めたひとりの修行者がいたとしても、現代の世界には、修行をして解脱の世界に参ずることが世界の有機的な一部であるような、そのような世界がすでにない。むしろ、その精神が純粋であればあるほど、それは、現代の世界からは切り離されてしまう。偉大なものを生み出すために高貴な精神が時熟しうる時間も空間も、現代の世界にはないのである。

かつてまだ精神の生きていた世界では、永遠なるものと無常なもの、善きものと悪しきもの、聖なるものと俗なるもの、偉大なものと凡庸なもの、高貴なものと低俗なものとは、明確な対照をなして存在していた。そこには、確固とした精神の秩序があった。だから、偉大なものや高貴なものは、この有機的な秩序のうちに、それにふさわしい所を得て存在しえた。高貴な精神は、秩序ある世界によって意味づけられ、生かされていたのである。

ところが、現代では、高貴な精神は、すでに〈精神なき世界〉によって阻止されてしまっている。だから、ここでは、高貴な精神は、自己のうちにあったはずのすぐれたものを、陽の目を見ずに死んでいく胎児のように流産してしまう。例えば、どんなにみずみずしい感受

性をもった詩人がいたとしても、否、そうであればなおのこと、彼は現代の精神的散乱によって包囲され、自己の内なるすぐれた創造性を失っていく。それは、さながら、高貴な精神に対して加えられる〈欲望の体制〉からの圧政のようである。高貴な精神は、この凡庸なものの専制支配に抑圧され、まわりの〈精神なき世界〉との絶えざる緊張の中で窒息させられてしまう。

こうして、高貴な精神の声は、もはやまわりの世界によって受けとめられることはなく、砂漠に水を撒くように、空しく闇の中に消え失せていく。何を語ってもすでに空しく、すべてが空無化されてしまっている。高貴な精神は、かつては、そこからあらゆる創造の生まれる〈充実した無〉の前に立っていたのだが、ここでは、むしろ、そこにすべてが消失していく〈欠如の無〉に面している。〈欲望の体制〉は、永遠なものも無常なものも、偉大なものも凡庸なものも、高貴なものも低劣なものも、何もかもを一様に呑み込み消費してしまう空無な世界なのである。

どんな天才でも、単に個人の能力だけで生まれてくるわけではない。天才は、むしろ、時代の力が生み出す。時代の場に生かされて、はじめて、天才はその能力を発揮することができる。ところが、現代では、天才は、低い方への平均化の流れに巻き込まれて抹殺されてしまう。ここで支配しているのは平均的大衆であって、しかも、彼らは自らの価値基準を振り回してやむことを知らないから、ここには、もはや優れたものと劣ったものという価値の秩序がない。だから、天才は、それにふさわしい所を得て生かされるということがない。それどころか、ここでは、逆に、低いものが高いものと見間違われたりするから、単に時代の振幅に共振しているにすぎない者が、かえって天才と見間違えられたりする。

高貴な精神は孤独である。高貴な精神は、現代というこの精神の強制収容所のような場で、あたかも砂漠を行くさすらい人のように、生かされる場を失って、ほとんど運命的に世界から孤絶する。しかも、意味なき孤独のうちに強制的に逼塞させられる。高貴な精神は一個の〈単独者〉とならざるをえない。

確かに、現代では、この精神の砂漠の中で世界から孤絶した単独者のみが、かつてまだ精神の生きていた時代の真理を背負っている。ちょうど、空襲の中で子供をしっかりと抱きしめて守ろうとしている母親のように、単独者は、この現代という〈非世界〉にあって、なおもその高貴な精神を護ろうとしている。現代の巨大な精神なき体制では、精神は自己の場を失って、ただ極く少数の単独者の魂のうちに隠れ家を求めて避難したかのようである。

しかし、単独者にとって、真理はすでに重荷である。単独者は、この真理の重荷に耐えかねて、時に悲嘆にも似た精神の怒りの炎を発する。そして、自らの怒りの炎に焼き尽くされ、今にも打ち斃れそうにさえみえる。単独者は、かつて生きていた永遠なものの影を抱いて、精神なき闇のうちに喘ぎながら消え失せていくかのようである。今日の世界も、また、神々に背いた罪を贖うために、人身御供を捧げているのであろうか。今まで、どれほど多くの高貴な精神が、自らの破滅をも犠牲にして、この生贄となったことであろう。

単独者は絶対の矛盾に面している。単独者は、自ら語ろうとすることを理解する者がもは

やいないということを前提にして、自ら語らねばならないのである。理解する者がいるのなら、かえって語る必要はない。それは、時代をあまりにも明確に自覚してしまった単独者の悲劇である。

単独者は、こうして永遠に沈黙する。〈沈黙〉、それは単独者にとって最後に残された〈言葉〉である。単独者の沈黙は、精神なき時代の捨て去ったものがいかに大きなものであったかを、その沈黙によって語っている。同時に、また、それは、精神を犠牲にしてつくりあげられた今日の途方もなく巨大な体制、〈欲望の体制〉の行き着く場所をも指し示しているようにさえ思われる。

4　現代文明の行方

文明の消滅点から

現代文明は、精神を犠牲にして、巨大な〈欲望の体制〉を築き上げてきた。一体、現代文明はどこへ行こうとしているのであろうか。

現代文明は、古代ローマ文明に似ているとよく言われる。確かに、水道や浴場や競技場が完備し、区画整理の行き届いた古代ローマ都市の遺蹟を見てみると、古代ローマ文明は、現代文明と同じように、一種の産業技術文明であったようにも思われる。とすれば、古代ローマ文明が、この産業技術文明のもたらす精神的頽廃によって滅んでいったように、現代の文明も、これと同じ運命を辿ることもありえないわけではない。そして、現代人が廃墟と化した古代ローマの遺蹟を見るのと同じように、後々の人々も、また、現代文明の廃墟を眺めるときがくるのかもしれない。現代人が古代ローマの凱旋門を眺めるように、後々の人々が、現代の高層ビル、あの〈欲望のモニュメント〉を眺めるときがくるかもしれない。そして、現代の考古学者がそうするように、この現代文明の遺蹟を発掘してみようとするような人々が、再び地上に現われることもあるかもしれない。

しかし、そのとき、果たして、彼らはこの現代文明のありようを正確に理解することができるであろうか。むやみに入り組んだ道があり、まるで迷路のような地下街があり、途方もなく高い塔や高層ビルがある。そして、どこにも神殿らしきものが見当たらない。後の時代の人々は、このほとんど錯乱したとしか思えない文明を一体理解できるのであろうか。もしかしたら、その人々は、再びバベルの塔の物語を語り出すかもしれない。

どんな文明も永遠に続いたことはない。現代文明も、また、永遠に続くということはないであろう。実際、遠い昔から、様々な文明が栄え滅んできた。現代文明も、そのうちのひとつである。現代文明は、一体どのようなしかたで滅んでいくのであろうか。

文明の滅亡は、ただ単に気候の変動や外敵の侵入など、外的要因によってのみ起きるとは限らない。人々の精神的堕落というような内的要因によっても起きる。古代ローマ人達は、皆こぞって享楽主義に走り、社会に対する義務を忘却したために、結局は外敵の侵入を許すことになり、

滅んでいったと言われる。現代の文明も、おそらくは、そういう精神的堕落によって没落するかもしれない。

現代文明は欲望の無限氾濫によってつくりだされ、そのことによっておのずと生み出された欲望の肥大化は、文明に対する忘恩となっても現われてきた。全体に対しては責任をもたず、私的な欲求だけを主張してやむことを知らない略奪主義的な大衆を大量に生み出した。今日の文明は、ちょうど白蟻によって倒されていく大きな家屋のように、そのような寄生虫的人間によって、次第に衰退していくであろう。何ごとも、自らの原理によって滅ぶ。欲望の氾濫を原理としてきた現代文明も、欲望の氾濫それ自身によって滅ぶであろう。大洪水を待たずとも、現代文明は欲望の洪水によって滅ぶかもしれない。欲望の洪水は、危機意識からくる叫び声をも呑み込みながら、ひたすら没落の淵に向かっていく。

しかし、この没落は、決して嘆くべきことではない。今日の文明の滅亡なくしては、人間は再び永遠根源的なものに向かって立ち直ることはないからである。生きものに静かな夜の休息が必要なように、今日の文明にも静寂な休息の世界が必要なのである。

大地への帰還

現代文明は大地から離反してきた。しかし、大地から離反してきた現代文明も、かつての文明がそうであったように、同じ大地へと帰還していくことであろう。現代文明は、この地上に巨大なコンクリート文明の遺蹟を遺して、やがては地の底に埋もれ尽くしていくであろう。現代人の生み出したものすべてが、あたかも地平線に沈む夏の日の太陽のように、ことごとく力を失って、大地のもとで永遠の眠りに就くときが来る。ちょうど夕暮れ近く疲れた足を家路に運ぶ農夫のように、歴史もまた重荷を背負ってその生まれ故郷に急ぐ。歴史は生まれたように死し、始めたように終わる。人の一生が大地から生まれ大地に帰るように、現代文明もまた大地から出て大地に帰る。

しかも、大地は永遠に沈黙している。人間が大地に逆らって自らの営みを始めたとき、大地は黙して語らなかったように、人間が疲れ果ててその営みを終えるときも、大地は沈黙している。大地の永遠の沈黙の中では、歴史の生と死はひとつである。その沈黙は、さながら、あの孤独な単独者の沈黙から広がり出てきたかのようである。今までの人間の営みは、この沈黙の静けさの前では、水の上に書かれた一片の文字のように空しい。

しかし、大地はなお永遠である。どんなに愚かなことがこの地上で演じられようとも、大地はなお永遠である。

自然の略奪

1　自然性の喪失

自然の征服

〈欲望の体制〉はまわりの何ものをも略奪してやまない。現代は略奪の時代であって、自然ももちろんその例外ではない。〈欲望の体制〉は、まるで獲物を狙う猛獣のように自然のうちに侵入し、自然をつぎつぎと自分の餌食にしていく。大都会が、ちょうど蚕が桑の葉を食い尽していくように、緑の平野を切り裂いてとめどなく拡がっていく有様は、そのことを最もよく表現している。自然が、人間の欲望によって征服されたのである。

〈欲望の体制〉のもとでは、人間達は自然とともにあることをやめ、自然のうちに育まれてあることを忌避した。それどころか、人間達は自然を略奪したのであって、少なくとも、人間達にとっては、自然はその威力を失ってしまっているかのようにみえる。現代では、自然は、もはや人間を超え包む偉大な力ではなくなっているのである。現代人が自然への畏敬の念を失ってしまっているのはそのことによる。

本来の世界では、自然は、人間にとって、時に父のごとく厳しく罰し、時に、母のごとく優しく恵み豊かであった。ところが、この現代の世界では、人間は、年老いた親を足蹴にする不出来な息子のように、もはや自然の罰を畏れることもなく、母のごとき恵みに感謝することもない。

さらに、現代世界では、人間は、自然から離脱したばかりでなく、今や自然を略奪することに執したために、逆に、自然の方でも、絶えず人間から立ち去って、逃げ出そうとしているかのようである。否、それどころか、自然は、すでに今日の人間のうちには宿っていないようにさえみえる。人間の内部から自然性が失われていったのである。

実際、自然な魂の発露が、現代の世界ではどれほどみられなくなったことであろう。現代の世界を支配しているものは、機械的な組織や形式的な法律であって、ここでは、みずみずしい感受性や自然なものの考え方が通用しない。すべてが人工的であり、作為的である。人間のうちなる自然性が疎外されてしまっているのである。人間が自然のうちにあることをやめたように、自然は人間のうちにあることをやめたのである。あたかも外的自然を略奪した対価として、人間は、己がうちなる内的自然を売り渡したかのようである。

人間が自分のうちの根源的自然性を喪失するとき、人間はまた、外なる自然のうちにも神秘性をみることができなくなる。そして、大自然への驚異の感情も、みずみずしい感動も、こまやかな感受性も喪失してしまう。現に、自動車や飛行機で忙しく飛び回り、テレビやコンピュータに釘付けになっている現代人は、一輪の野の百合を見ても、どれほどの感動ももちえなくなっている。自然に対してこまやかな感受性をもっていた日本人でさえ

そうである。現代の〈略奪の体制〉によって、日本の心までが略奪されてしまったかのようである。

自然と人間の宥和

もちろん、かつての時代でも、人間はいつも自然と一体であったとは限らない。いつの時代でも、人間は自然と対立していたというのが本当であろう。人間は、長い間、自然と戦いながら自分達の生活を営んできた。確かに、そうではあったであろう。しかし、それはどこまでも対立であって、略奪ではなかった。自然がことごとく人間を略奪したり、逆に、人間が自然を略奪し尽そうとはしなかった。だから、かつての人々は、もっぱら自然に対してどのように適応するかを工夫し、偉大な自然の力をどのように慰めるかを考えてきたのである。そのようにして、人間は自然と宥和してきた。そこには、戦いとともに和解があったのである。

ところが、現代では、人間は自然を征服し略奪し尽した。少なくとも、征服し略奪しうると考えるようになった。今日の人間達は、どのように和解するかを考えて自然に対しているのではなく、初めから、征服さるべきもの、略奪さるべきものとして自然に対している。だから、ここでは、奇妙なことに、自然と人間の対立さえもない。だからまた、そこには、自然と人間の宥和もない。

現代の世界では、自然は、人間の略奪宣言の前に、まるで死人のように沈黙してしまったかのようにみえる。だが、そのかわり、死者がもはや生者に対して何も語らなくなるように、自然はもはや人間に対して何も語らなくなった。同時に、人間もまた、自然に対して語りかけようとはしなくなったのである。ここでは、人間と自然の間に、戦いもなく、和解もない。現代の人間と人間の関係がそうであるように、両者の間には、ただ殺伐とした虚無の霧がかかり、虚ろな深淵のみが残されているだけである。

2　反自然的世界

自然からの離反

確かに、昔から、人間は必ずしも自然と一体であったわけではない。むしろ、人間が人間として、火をもって大地の上に立ち上がったとき、そのときから、すでに、人間は自然から離反し出した。それは、人間の一種の宿命だったとも言えよう。だが、人間は、このとき同時に、自分達が大自然に背反したことを自覚した。そして、それ以来、人間は、自らがそこから生れ出でたものに背いたことを意識し、反省しつづけてきた。だからこそ、逆に、人間は自然の力を畏敬し、自然を尊び、自然の恵みに感謝し、さらに、自然のうちに自らの故郷を見出し、自然への帰還と一体化を希求してきたのである。遙か遠い昔から、人間達は、このことを、自然への信仰に表現し、神話に語り、詩歌に詠じ、あるいは、宗教において深く自覚してきた。人間精神の創造性は、そのようなしかたでも発揮されてき

たのである。

ところが、現代の人間は、太古の人々が最初に懐き、その後ずっと引き継がれてきたそのような感情を持ち合わせていない。人間は、その故郷である根源的自然から離反してきたというあの嘆きに近い感情を忘れてしまったのである。それどころか、現代人は、むしろ、逆に、自らの欲望のために自然を略奪することが、自然に対する人間の勝利だとして礼讃さえしてきた。そのような現代人に、どうして自然に対する畏敬の念が起こりえよう。

現代人は、自然を場所として存在しているのではなく、反自然的な機械仕掛の世界を住み家として存在している。このようなところでは、自然から離反したという反省の念はもちろん、自然根源的なものへの帰還を希求する精神もすでに希薄になってしまっている。だから、ここからは、素朴な自然への信仰も、優れた詩歌も生れてはこない。ここで巾を効かすものは、自然を人間の欲望のためにいかに利用するかという技術的思考だけである。そこには、精神のもっていたあの余剰のものがない。自然に対するこまやかな感受性を詩歌に詠ずるのに長じていた日本人でさえ、今日では、どれほどそのような詩心を失ってしまったことであろう。

なるほど、いつの時代にも反自然的なものはありはした。人間的な技術、人間のつくる国家や政治の抗争、華美な社交など、人為的世俗的な人間の営みは、大自然の理法からみれば、どれほど卑小なものにすぎなかったことであろう。しかし、また、宗教や哲学や芸術が、今まで、どれほど大自然との根源的帰一を求めつづけてもきたことでもあろう。そこには、なお、大自然を基盤にして反自然的なものをも包み込むような秩序ある有機的な世界があったのである。

ところが、現代では、大自然の秩序にも模すべきそのような有機的世界がない。なるほど、今日でも、宗教はまだ自然根源的なものへの復帰を説いているようにはみえる。しかし、この宗教の教説も、現代人によっては受け入れられることはないであろう。たとえ受け入れられたとしても、そのような精神を可能にする場所が現実になくなってしまっている。山深い幽谷に人目を避けてひっそりと建てられていた寺院仏閣にも、観光開発という破壊の大波が押し寄せている今日、どうしてそれが可能であることがありえよう。自然復帰の教説も、現代の世界ではすでに空虚に聞こえる。否、それどころか、今日では、他ならず宗教自身が反自然的なものになっているというのが実状である。例えば、現代の新しい宗教なども、自然根源的なものを喪失した現代人の麻酔剤のような役割しか果たしていないようにみえる。

反自然的な思想と芸術

さらに、どれほど多くの現代の思想が、自然根源的なものを人間のうちから奪い去っていったことでもあろう。

例えば、フロイト以来の精神分析学は、人間のうちなる自然根源的なものを無視し、人間、つまり精神を、単なる機械仕掛のからくりのようにしかみない。人間精神は、究極的

には自然の根源と根をひとつにしているにもかかわらず、精神分析学者達はそのことを忘却し、精神をまるで修理可能な機械のようにしか扱わない。実験的心理学の影響下にあった教育科学が、子供を生きた生命として捉えなかったのも、これと同根だと言うべきであろう。しかし、それによって、子供の魂の中核をなしている根源的自然性が、どれほど抑圧され、破壊されてきたことでもあろう。さらに危険なことは、そのような心理学的なものの見方が普及すると、一般の人々までが心理学の用語を口にして、人間をそのような心理学的機械装置としてしかみなくなり、自らの自然根源性を二重三重に喪失していくということである。

他方、突然変異と自然選択と適者生存を原理とするダーウィニズムも、むしろ、自然を失った現代人の機械的生命観を表現するものであった。十九世紀以来、特にヨーロッパを中心として、人々は、生命を大自然の秩序のうちに統一的に把握することができなくなり、すべての生きとし生けるものをばらばらのものとしてしか認識しえなくなった。そのために、ダーウィン以来の進化論は、このばらばらになった生命を、〈進化〉という概念装置のからくりで数珠つなぎにして説明する。そして、この進化という線路上を走る生物の列車の最先端に人間を置いて、ようやく人間を理解したつもりになっている。なんという人間の傲慢さであろう。そのようなものとして理解された現代人が、その故郷である根源的自然を見失い、自然を畏敬することを忘れてしまうのも、また、当然のことと言わねばならない。

一般に、近代ヨーロッパの生み出した自然科学の思想は、自然のうちに根源的生命をみようとはしなかった。特に、一九世紀以来の科学主義は、自然を機械的物質として扱い、それを、ちょうど技術者が機械を解体するようなしかたで際限もなく分析し、細分し、アトム化してきた。また、現代の医学が、人間の生体をまるで機械仕掛のロボットのように扱い、あたかも機械を修理するかのようにして治療しようとするのも、この科学主義に由来するものである。これは、自然を人間にとっての資源としてのみみる現代の科学技術を可能にするものでもあった。

同じく、十九世紀ヨーロッパの生み出した産業主義やマルクス主義の思想も、自然を単なる経済的生産の源泉としてしかみないという点では、共通したものをもっていた。今日、資本主義国でも、共産主義国でも、近代化という名のもとに、自然の開発が休むことなく行われているのは、そういう思想的背景をもってのことである。一般に、近代思想は、自然を〈人間のための存在〉としてのみみるという共通した性格があるが、これこそ、人間の自然への破壊的侵入を正当化するのに役立ってきたものであった。本来は自然と人間の究極的根源を求めるべきであった哲学や思想が、逆に、自然からの人間の離反を助長してきたのである。

近代ヨーロッパが生み出し、後に世界中に拡がったこれら様々の反自然的思想は、自然根源的なものへの帰一の願いを人間のうちからどれほど奪い去ってきたことか量り知れないものがある。というより、むしろ、近代以後の人間達が自然根源的なものへの畏敬の念

を失ったからこそ、逆に、そのような反自然的思想が流布し、現代人の精神構造を支配してきたと言うべきかもしれない。これら数多くの反自然的思想は、現代の自然性喪失の構造を思想の面で表現しているものなのである。

自然根源的なものを喪失し、逆に自然を略奪し去ろうとした現代人は、また、芸術においても救われるということはないであろう。かつてまだこれほど自然が破壊されていなかったころは、どんな種類の芸術作品であっても、それを包む大きな世界には、いつも大自然とそれへの信頼があった。ところが、現代の生み出す芸術には、そういう〈世界〉がない。それどころか、現代では、芸術それ自身が自然性の破壊の表現でしかないことが多い。現代の芸術、例えばキュービズムやダダイズム、シュール・リアリズムや反芸術などにみられるように、現代芸術の表現しようとしているものは、対象の破壊と再構成、あるいは変形に他ならない。今日では、芸術作品を包み超える大きな世界がないどころか、むしろ、その破壊を巧みに表現したものが優れた作品だとされる。現代人にとって、芸術もまた、宗教や哲学と同じく、自然性回復の救済たりえない。

現代人は、ただ、大自然の前での沈黙によってのみ、自然の神秘性への畏敬の念をわずかに思い出しうるようにみえる。しかし、これとても、現代の巨大な体制の中に轟く機械の騒音によってすぐに掻き消されていってしまう方がむしろ早いであろう。このような世界では、沈黙を説いてみてもすでに空しい。

現代のこのような世界では、自然根源的なものへ帰入しようと努力している求道者も、自然と人間の根源的な一体性を追求しようとしている哲学者も、自然の根底から湧き出てくるような鋭い感性をもった詩人も、彼らが純粋であればあるほどなおのこと、まわりの反自然的な環境に包囲されて、世界から孤絶してしまう。彼らは、あたかも、現代という反自然的な世界が大自然に対して捧げた生贄ででもあるかのようである。

3　自然復帰と自然の保護

自然の資源化

欲望の無限に氾濫する現代の世界にあっては、自然は、人間の欲望充足のための資源にすぎない。山は木材資源となり、川は水資源と化し、海は水産資源や海洋資源とみなされ、美しい風景も今では観光資源として利用され、ある種の動物は蛋白資源として大量生産されるに至っている。大地も、すでに諸産業の鉱物資源にすぎない。なんという凄まじい欲望の氾濫であろう。欲望によって自然が拉致されてしまったのである。

事実、今日の世界では、ちょうど様々の原料が工場の中でひとつに混合されるように、山や川、草や木、水や土が、同じひとつの欲望の坩堝の中に投げ込まれてしまっているようにさえみえる。様々の自然物に生きた個性があり、それでいて同時にまたひとつの自然であるような、いわば多様の中の統一がここにはないかのようである。もしもあるとすれば、それは、欲望の坩堝の中にすべてが吸合されてしまっているというひとつの統一性、

否、無差別な混合性だけのように思われる。少なくとも、現代人の眼底には、自然はそのようにしか映ってはいない。新幹線の列車や高速道路の自動車の中から自然をみている現代人の目には、すでに自然な生気がない。そのような目に映る空間は命なき空間としか言うことができないであろう。

現代では、もはや季節さえ定かでないようにみえる。春と夏、夏と秋、秋と冬、そして冬と春の間に区別がなく、まるで一年の四季が灰色一色で塗り潰された絵のようでさえある。現に、大都会では、百貨店の飾りつけの変化が、ようやく四季の移り変りを人々に告げ知らせている。これが現代の季節なのである。つくられた季節感なのである。今日では、天候さえ人工的である。少なくとも、現代人は、肉眼で見る天候よりも、テレビやラジオの天気予報の方がその日の天候を教えてくれるような錯覚に陥っていることがしばしばある。現代人にとっては、天候さえも、あたかも予報という技術によって制御されているかのようである。確かに、このような状態を、現代人たりとも、時として嘆くことはあるが、しかし、それは、現代人が自然を略奪することに払った代償なのであろう。

自然復帰の叫び

なるほど、現代人は、このようにして、自らの内にも外にも自然を喪失してしまったことにすでに気づいてはいる。事実、また、現代人は皆、こぞって「自然に帰れ」と叫んでもいる。だが、奇妙なことに、現代人がそのように叫んでいるのは、あの自然への反逆のシンボルである高層ビルの中においてなのである。あるいは、あの人工的なテレビの映像の中においてなのである。なんと奇妙な風景であろう。

なるほど、現代人は、「自然に帰ろう」という合言葉で、山や海にリュックをかついで大挙して出かける。そこでは、確かに、現代人たりとも、大自然からある種の慰撫を受けるようにはみえる。そして、自然が人間にとっていかに大切なものであるかということを知るようにはみえる。だが、疲れた顔をして彼らが帰ってくるところは、同じまた、反自然的な都会の雑踏の中である。

現代人の自然復帰への指向、それは一時的なレクリエーションにすぎない。自ら築き上げた巨大な機構に圧し潰されそうになった現代人のつかのまの気晴しにすぎない。そこには、かつて人間が自然とともにあったときのあの持続的な再生というものがない。たとえあったとしても、それは、現代では、この巨大な体制、他ならぬ〈欲望の体制〉に復帰するための活力補給にすぎない。

もともと、復帰ということ自身が喪失の表現にすぎないが、現代人の自然復帰指向は、あまりにも反自然的なものに増長してしまったこの体制からの単なる逃避でしかない。「自然に帰ろう」、これは、あまりにも空しい叫びでしかないように思われる。それは、高層ビルという難破船から助けを求めている現代人の虚ろな叫びにすぎないかのようである。自然と人間とが宥和して不動のままであったあの世界はもはやなく、そこに復帰することも、それを回復することも、実際には不可能であろう。

東洋の伝統的思想によれば、自然は人間を超える偉大なものであって、人間も、自然の一部として自然とひとつであると考えられてきた。そして、今日、人々はよく、自然と人間が一体と考えられていたそのような東洋の自然観に帰るべきだと言うのをしばしば耳にする。しかし、現代、このような自然観に帰るということは、この飽くなき自然の略奪の渦の中では無力であろう。「東洋の自然観に帰れ」とブルドーザーの前で叫んでみたところで、その声は、けたたましいシャベルの音に掻き消されていくだけである。西洋近代の物質文明の限りなき膨張の波は、近代化という名のもとに、東洋の自然も人間も呑み尽してきたのであって、その結果行き詰まったからといって、今さら、汽車でも乗り替えるように、急に東洋の自然観に飛び移れるものでもない。たとえ飛び移れたとしても、現実はどうにもならないであろう。否、それどころか、思想というものが、まるでテレビのチャンネルを切り換えるように、簡単に切り換えることができると考えること自身、現代人が切り換え可能な人間になってしまっていることを、最もよく表わしている。ここ百年ほどの近代化の流れの中で、東洋の精神的支柱も、西洋近代思想の大暴風雨によってすでに倒壊してしまっている。没落したのは、西洋ばかりではなかったのである。

現代人は、自然復帰の叫びの正当化のために、ルソーや芭蕉や、時に禅の思想などを持ち出してきたりする。だが、以前の自然復帰の思想と今日のそれは似て非なるものであって、両者の間には程遠い違いがある。以前の自然復帰の思想にあっては、自然に帰ることが、同時に人間の根源的な真理、他でもない自然と人間とが奥深いところでひとつになるような根源的真理のうちに帰入することであった。そして、かつての「自然に帰れ」は、帰ることによって、逆に、人間の世界のただ中に生きていく基盤を見出してもいたのである。

ところが、現代人の自然復帰は、一方に反自然的世界があり、他方にはそれと断絶した自然の世界があり、人は、ただ、まるで枝から枝へ飛び移るうつり気な鳥のように、一方から他方へ時折飛び移ってみるというにすぎない。かつての場合は、むしろ人間の根源を体得するために、人間の世界から自然の根源に帰ったのに対し、今日のそれは、機械仕掛の世界から、それとは真反対の自然の世界へとむしろ駆け込むと言った方がよいであろう。だから、また、彼らが大挙して出かける自然の世界は、すぐに人間的世界、自然公園とかキャンプ場とか、スキー場とかゴルフ場とか、管理された世界にさえ変えられてしまう。ここには、何ひとつ根源的なものへの自覚はない。自らのうちなる自然性を喪失してしまった現代人にとっては、真の自然復帰も自然回復も不可能であるようにみえる。

それどころか、現代人の自然復帰は、自然を逆に破壊することにさえなる。人々は大挙して国立公園へ出かける。すでに人間によって管理された自然、観光資源化された自然へと、バスや自動車で列をなして出かける。その有様は、まるで失ったものを取り戻そうと焦っている盗人の群のようでさえある。森や高原に分け入るハイカーの塊、満員の列車にところ狭しと陣取っているスキーヤー達、車を連ねて出かける海水浴の客達、彼らは、自然の略奪の象徴であるブルドーザーと変るところがない。富士山の登山者の列も、あたか

も、土の山の獲物に向かって行列している蟻達の大群のようではないか。

今日の自然復帰の有様はこのようなのである。それは、まわりの自然をどこまでも蚕食して膨張していく大都会の構造と同じなのである。現代人は、また、そのようなしかたでも自然を略奪しようとしている。どうして、それが自然への復帰などでありえようか。

自然の保護

現代人は自然を破壊してきた、地球環境を破壊し汚染してきたと、他ならぬ現代人は批判している。だが、当然のことではないか。欲望の塊になってしまった現代人が、自然をないがしろにしていって何の不思議があろう。現代人は、自然に対する畏怖の念を失い、自然を略奪することが罪であるという感覚もなくしてしまったのである。また、現代の技術文明は、自然を利用すべきもの、征服すべきもの、征服して自らに供すべきものとしてきたのだから、現代の産業が環境破壊をもたらすということも、むしろ当然の結果であった。人々は、環境破壊の責任を企業にあるとして、これを告発してやまない。自らその恩恵をあますところなく吸い尽して後、まるで自分達には責任がなかったかのように叫んでやまない。そして、この〈企業〉という、現代人が生み出して、しかも、誰が生み出したのかも分からなくなっている得体の知れない欲望の構築物を、まるで千年来の敵でもあったかのように、責任追求をしていく。その有様は、現代人の魂から内なる自然性が失われてしまっていることを表わしてもいる。現代人の心の中にこそ〈環境破壊〉が住み込んでいることを、現代人は知ろうとしないのである。

現代人は、また、自然の保護を叫ぶ。だが、これは〈自然の略奪〉の裏返しにすぎない。自然の保護という名目で、現代人はまた、自然を人間の支配下に置こうとしているのである。高層ビルの屋上やテレビの映像の中で、現代人は「自然を保護しよう」と叫んでいる。なんという傲慢さであろう。人間が自然を保護しようというのである。本来の世界では、むしろ、自然によって人間が保護されていたのに、現代では、それが逆転してしまっている。自然保護論も現代の病なのであって、そのようにして保護された自然は、また、人工的に管理された自然となることを免れないであろう。

しかしながら、自然は、果たして本当に破壊されてしまったのであろうか。現代人の生み出したこの小賢しい文明によって、本当に破壊されてしまったのであろうか。そうではない。大自然は少しも破壊されてはいない。たとえ破壊されたとしても、ほんの少しかすり傷を負ったにすぎない巨象のように、大自然はほとんど問題にしないであろう。破壊されたのは自然ではない。

破壊されたのは人間なのである。人間は、自然を略奪しようとして、かえって自らの故郷を失った。現代の人間は、自ら離反し、征服し、略奪しようとしたものによって、我と我が身で復讐を受けているのである。大自然は、人間があまりにも増長し、あまりにも反抗的になるとき、人間を懲らしめ、人間を罰する。だが、それは、もしかしたら、自然を略奪し尽そうとした人間への大自然からの警告であるのかもしれない。まえもって警告を

発するほど、大自然はまだ恵み深いのであろうか。多分そのことは、この大自然に反逆した現代文明が大自然のふところに帰って永遠の眠りについたとき、はじめて明らかになることであろう。

根源性を喪失した人間

1　断片化した人間

大地からの離反

現代の人間において、誰も否定できない現象として通常最も目につくことは、人々が絶えず慌しく動き回っているということである。実際、今日、人々は、まるで気ぜわしい蜂の一団のように、あちこち忙しく飛び回っている。これほど、人間が互いに入り乱れて生存するようになったことは、いまだかつてなかったことであろう。前世紀以来、人類は汽車や自動車や飛行機を発明し、そのため、人間はことのほか動きやすい存在となった。確かに、このように人間が可動的存在となったのは、あのイギリスの産業革命において蒸気機関車が発明され、人々や物資が大都市に大量に流入するようになってからのことであろう。

かつてまだ精神の生きていた時代にあっては、人間は大地にしっかりと根を下ろして、天上地下の神々を崇敬しながら、有機的な共同体の中に生きていた。ところが、現代にあっては、人間は大地から浮足立ち、根無し草のような存在になってしまったのである。高層ビルを上り下りしている人々や、新幹線の窓から顔を見せている人々を見ると、いかに現代の人間が大地から離反し、根源性を喪失してしまったかが分かる。現代人はいつも不安な生き方をしていると言われるが、これも、現代の人間がその拠って立つ根源的場を失ったことからくることでもあった。

大地から離反した現代の人間達は、この巨大な〈欲望の体制〉のもとで、あるいは寄り集まりあるいは反撥しあって動いている原子の群のようである。人間は、かつては、まだ共同体の生きていた有機的世界の中で互いに寄り添いながら生きていたのだが、今日では、人間は、そのような世界から離反してしまったために、それぞれがこの巨大な体制の中に投げ出され、かくて、人間は切れ切れの断片と化してしまった。人間は、共同体における人と人との有機的な関係によって、はじめて人間でありうる。しかし、現代では、この共同体の絆が崩壊してしまっているから、この人と人との関係が、まるで物と物の関係のようになり、人間関係が、有機的なものから機械的なものになってしまったのである。

ここでは、男も女も、老人も夫婦も、若者も子供も、皆それらしくあることをやめて、皆が同じように、まるでコンクリート文明の落し子のように生きている。大都会の繁華街を小忙しく無表情な顔つきで行き交っている人々の群はまさにそういうものではないか。これほど人間が動きやすい断片と化したことは、いまだかつてなかった光景である。現代の世界は、そのようなばらばらの断片と化した人間の集積によって成り立っている。

人間存在の機械化

このように、人間が断片化してしまったところでは、人間は、現代の巨大な機械仕掛の世界の中でただ単に動かされているだけの歯車のようになってしまう。本来全的であった人間存在が抽象化されて、機械化されてしまうのである。なるほど、このような機械仕掛の世界であるがゆえに、今こそ人間性を回復しなければならないという叫びはよく聞かれる。しかし、これも、人間性が失われたからこそ、失われた当のものが叫ばれているにすぎない。

人間は、人間を超える永遠根源的なものを拠り処にして、はじめて人間でありえた。ところが、現代では、この人間性の根拠が失われてしまったから、人間は、そのようなものとの連関性から切り離された一個の断片となってしまった。近代は、人間が人間を超えるものとの連関から離れて、自分自身があらゆるものの中心であろうとするところから出発したのだが、その結果は、現代の人間にみられるように、逆に、中心的存在からの没落であった。今日叫ばれている〈人間性の回復〉の〈人間性〉の意味がいつも内容空であり、本来の人間性の意味、つまり〈人間を超えるものとの関係のうちにあること〉からは程遠いものになってしまっているのも、現代人がそういう本来の人間性を失っていることからくると言うべきであろう。

あらゆるものが機械的になる現代においては、例えば、人間の生と死も機械仕掛のものとなる。人間は断片化しているから、その生と死も、単なる断片の生成消滅にすぎなくなる。今日多くみられる交通事故や飛行機事故に象徴されるように、現代は、人々が簡単にセットで死んでいく時代なのである。ここには、かつて死というものがもっていた厳粛さがない。

かつて、死は生にとって深い意味をもっていた。人々は、死への畏怖の念をもっていたからこそ、死を超えて永遠の生を求め、よりよき生を希求した。ところが、現代においては、死は、生にとってそれほど深い意味をもってはいない。そのため、人々は、現在の単なる生を超えて永遠の生を求めることを忘れ、その分極度に心貧しくなってしまったのである。これほど、生と死が、その豊かな意味を失った時代もなかったであろう。

一般に、現代では、誕生、結婚、死、これら人間にとって最も大切なものが断片化して、その豊かな意味を失う。恋愛も同様である。現代の人々は、近代以前の枠組を打破してより大きな世界に踊り出たから、男も女も、かつての習俗から離れて、実に動きやすい存在となった。だが、そのために、男も女も、それほど強い社会関係なしに、いとも容易に出会うことができ、ぶつかり合いやすくなった。そして、まるで偶然ぶつかった陽子と電子が引き合うように引き合う。ここでは、恋愛がかつてもっていたそれ以上の余剰の意味が希薄になってしまっているのである。あらゆるものが断片化し流動化する現代の世界では、恋愛の前にそれを枠づける客観的な社会関係が衰弱してしまったのである。

現代では、恋愛と同じく、結婚もまた、それ以上の余剰の意味が希薄になる。かつてまだ共同体の生きていた世界では、結婚以前に共同社会の強い紐帯が存在したから、男と女

は、まずその世界に入ることによって結婚しえた。しかし、今日では、一組の男女の結びつき、つまり結婚の方が先行し、社会関係の方はむしろあとからついてくる。従って、その社会関係は一組の男女を守るだけの強い力をもたない。

結婚ばかりでなく、現代では、家族もまた、断片化した個人の単なる集合にすぎなくなる。核家族化が象徴しているように、ここでは、老人から夫婦へ、夫婦から子供への継続関係が弱くなり、各々がただ単にばらばらに結びつけられているというにすぎない。この機械仕掛の体制は、家族をも機械化したかのようである。

世代の交代においても、現代では、老人が、この現代の巨大な機構に間に合わなくなった断片として廃棄され、そのかわりに、青年という新しい断片が補充されるというにすぎないかのようである。ここには、老人から青年へと受け継がれていくべきそれ以上のものがない。

2　群集化した人間

共同体の崩壊

断片化しばらばらになってしまった現代の人間は、やがて原子と原子が集合するように、寄り集まって群集化する。事実、今日、大都会にしても、観光地にしても、人々がひしめきあって、得体の知れない群集と化している。

かつてまだ精神の生きていた時代には、人々はひとつの有機的な共同体の中に寄り集まり、しかも、ここには宗教や倫理によって構成される精神の秩序が存在していたから、人々は、強い精神的紐帯で結ばれていた。だからまた、今日のように、人々が断片化することも、群集化することもなかった。

ところが、今日では、大都会にみられるように、すでにそのような有機的共同体は崩壊し、人と人とを結ぶ精神的紐帯は極めて弱いものになってしまった。そのため、人間はばらばらになり、孤独になった。かくて、その孤独に耐えられないとでもいうかのように、人々は群をなすに至ったのである。様々の集会が催され、おびただしい数のサークルや団体が結成される。そして、組合や政党や新興宗教が断片化した人間を吸収していく。

デモ、これは、現代における人間の群集化のひとつの象徴である。断片化し根無し草のようになった人々は、ゼッケンとプラカードという同一の単純な徴表のもとに集結する。彼らは、一人の自己を背負うのに耐えられなくなったから、そのひ弱な自己を隠匿するために、ひとつの徴表のもとに集結したかのようである。現代世界では、このようにして、断片化した人間が集団化し、ひとつの巨大な塊となる。

断片化した人間達は集合する。目的は何でもよい、要するに、そこに集まりうる何らかの標識があればよいのである。人々は、ただ自分達が皆同じだということを確認して安心するために集まるにすぎないようにみえる。〈人間的なふれあいの場を求めて〉というようなスローガンは、散り散りになった人間達が寄り集まるときの単なる標識である。むしろ、

そのようにして人工的に場をつくらなければ寄り集まることができなくなったこと自身、有機的な共同体が崩壊してしまったことを表現していると言うべきであろう。

盲動する人間と個性の喪失

現代世界では、人間は大地から離れ、断片化し、そして群集化したから、人々は、始終あちらに寄り集まったかと思えば、こちらに寄り集まり、妄動する。確かに、現代ほど、人々が付和雷同して一定方向に動き、次にはまた反対方向に動く時代もなかったであろう。

このようなところでは、服装から社会運動に至るまで、〈流行〉と〈模倣〉が人々の主な行動規準になる。人々は確固とした精神的基盤をもってはいないから、ただ流行のみを追って生きていこうとする。なるほど、いつの時代にも流行はあった。しかし、今日ほど様々のものが瞬時のうちに全世界に広がり、かくて、世界中の人々が皆同じような画一化した行動様式を取るようになった時代もなかったであろう。現代人は、自己を得体の知れない流行に預けて、絶えず身軽に動こうとする。

大衆操作が可能になったのも、人間がこのように群集化し妄動するようになったからである。新聞の世論操作にしても、共産主義の宣伝工作にしても、資本主義の商業広告にしても、大衆操作はどれもこのことを前提にしている。

例えば、新聞やテレビは、それ自身が現代という大衆化時代の象徴的存在であるが、それらは国民のオピニオンリーダーと称して、自分達の都合のよい方向に大衆を引っぱっていく。大衆の方は大衆の方で、同じ新聞やテレビが時代とともに正反対のことを言っていても、新聞やテレビの言うことをオウム返しに叫んで動いていく。それほど、人間が動かしやすい存在になったのである。

共産主義は、この大衆操作を国家的規模で行う体制である。この体制は、旧体制から大衆を暴力的に根こそぎ抜きとって一挙に断片化したから、今度はこれを国家的規模で統制するために、新聞、放送、その他様々の手段を国家に帰属させ、これを通して大衆を思い通りに動かしていく。

大衆操作は、現代においては容易である。かつての民衆は大地にしっかりと根を下ろしていたから容易には動かなかったが、今日の大衆は、イデオロギーにしても、スローガンにしても、ひとつの単純な標識さえあれば容易に動く。デマゴーグによる大衆煽動が容易になるのも、このような時代においてである。ナチズムなども、この現象の最も巧妙な表現のひとつだったと言える。

群集化し妄動する人間に個性はない。皆が同じひとつのところに蟻のように寄り集まり、画一的な動き方をしているようなところに、どうして個性や主体性がありえようか。実際、デモに参加している人々の顔、大都会のラッシュアワーにどっと出てきた人々の顔に代表されるように、現代人は皆同じのっぺらぼうの顔をしている。人々がまだ大地に根を下ろして生きていたころには、百姓は百姓らしい顔をし、狩人は狩人らしい顔をしていたが、大地から離反した現代人の顔には、もはやそれらしい顔がない。近代は、個を重んじ個性

を尊重する個人主義から出発したはずであったが、それは、結局、共同体を破壊して個人をばらばらにするのに役立っただけで、その末路は、かえって個性を喪失した得体の知れない群集のみを残しただけであった。

かくて、このようなところでは、ただ無名的なもののみが支配権をもつようになる。例えば、新聞の思潮などはその典型であり、いざとなると誰ひとりとして責任をもたない無名的オピニオンが〈世論〉を形成し、これまた不特定多数という無名的なものを動かしていく。そればかりか、一般に現代の体制のもとでは、人間そのものが無名的なものとなる。断片化して群集化した不特定多数の人間集団にあっては、それまでの共同体のあり方とは違って、人は、互いに名を知ることもなく同一場で同一行動をとっていることがしばしばある。ここでは、皆がいわば匿名で参加することができる。当然、個の責任は溶解してしまう。

3　反応人間

精神の散乱

現代においては、人間は単に外的に断片化しているだけでなく、同時にまた、内的にも断片化してしまっている。現代人の精神は散乱し、その散乱した精神のうちに、また散乱したものが関連なしに押し寄せてくるというのが、今日の人々の精神状況である。かくて、現代人の頭の中はばらばらの情報で埋まり、そこに何の統一性もなくなる。そのため、現代人の精神の中には、互いに矛盾したものでも同時に同居しうるほどである。

このことはまた、現代の人間においては、本来の〈自己〉が失われてしまっているということでもある。自己が自己といわれるためには、少なくとも一貫した持続性がなければならないが、現代人の〈自己〉にはそれがない。〈個人〉とは、それ以上分割することのできない個体性を言ったのだが、今日の〈個人〉は、すでにこなごなの破片に分割されてしまっている。

確かに、現代人の精神構造において、散乱状態はむしろ常態である。実際、現代人は、絶えず連関のないものに追いまわされ、それにいちいち適応していくという安らぎのない多忙な生活を送っている。こうして、現代の人間は、その都度その都度やってくる外界の散乱した事象にただ反応しているだけの人間と化してしまう。

現代人は、ちょうど交通信号に絶えず目をやりながら動いているドライバーのように、ただ条件反射的に外的なものに反応して動いているようにさえみえる。それどころか、人々は、まるで機関銃から玉が発射されるように打ち込まれてくるおびただしい数の情報をつぎつぎに受け留め、同時に、それをつぎつぎと忘却していく。というより、むしろ、忘却が強制されている。われわれ現代人は、連続性を断ち切り、内的に断片化することが強制されているのである。現代人は、自己を切りきざむことによって、散乱した外界に対応していっているのである。

ここでは、散乱した状態にうまく適合できるものを正常といい、適合できないものを異常というようになる。そのため、人は否応なく持続を分断し、散乱状態に慣れるよう強いられる。こうして、現代の人間、つまり反応人間は、持続から遠く離れ、思考力や判断力さえ衰弱させていく。現に、現代人は、相矛盾した知識でもなんでも受け取り、ただ押し寄せてくる多くの情報に押し流されて生きている。

つぎつぎと断片的なものがこまぎれに映像化されて出てくるテレビの構造は、そのような現代人の精神構造に一致しており、従って、それは、ものを考えない反応人間の大量生産に寄与している。ここでは、人は、ただ与えられた断片的映像にひとつひとつ反応しているだけでよく、そのため、人間は映像の単なる録画装置になってしまう。このようなところでは、人は、思考力や判断力や批判力ばかりでなく、想像力や言語による表現力まで衰弱させてしまうであろう。

このようにして、反応人間が大量生産されてくると、彼らは、今度は逆に、外界のものを、ただテレビの映像を見るかのように、何の実在感ももたずに眺めるようになる。実際、現代人の目には、外部の空間はひとつの虚無的空間であって、もはや実在性をもってはいない。何度も繰り返されるコマーシャルの叫び声や全体主義の洗脳政策がいとも容易に入り込んでくるのは、このような実在感を喪失した現代人の精神構造に依拠している。

いわゆる視聴覚教育は、そのように、まるで映像を見るようにしか外部のものを見ない〈映像人間〉に、子供を育ててしまう危険性を含んでいる。子供の魂は、ものそのものを全身全霊でじかに受け取る包容力をもっているものなのだが、視聴覚教育は、このような子供の魂の中に、瞬間ごとに映像の断片を打ち込む。かくて、子供は映像の方を実在と思い、実在を映像のように見るようになる。子供は、事物に対して常に新鮮な驚異の感情をもっているが、映像人間化した子供は、そのような驚異の感情さえ失う。しかも、このようなことは、子供にだけでなく、今日では、現代人一般にみられることである。

切り替え可能な人間

散乱した事象にただ反応しているだけの現代の人間は、ひとつの断片からまた別の断片へと簡単に転身していくことができる。例えば、昨日まで過激な革命戦士だった者が、一変して、今日は大企業の優秀社員になっていたり、昨日まで進歩主義的なことを言っていた知識人が、掌を返すように、今日は保守主義的なことを言っていたりする。この無節操の構造は、多分、現代人がそのように切り替え可能な人間になってしまっているということと深く連関しているのであろう。確かに、いつの時代にも、無節操とか変節とか転向というものはあった。しかし、現代のように、それが時代の構造になってしまったようなことは、いまだかつてなかったことである。現代では、人間はいわばひとつの変数にすぎず、そこへは時と場合によって何を代入してもよい。だからこそ、人は何のうしろめたさも感じることなく、どんなものにでも平気で変っていくことができるのである。

〈自己〉とは、本来連続性と統一性をもった存在でなければならなかったのに、現代人

の〈自己〉にはそれがない。現代の人間は、自己自身の過去になんら責任をもつということなしに、まるでテレビのチャンネルを切り替えるように、自分自身の思想や行動を切り替えていき、その場その場を感覚的に動いていく。

このように、人間が根源性を喪失し、内的にも外的にも断片化してしまったところで、なお真正な人間であろうとすることは並大抵のことではない。一貫性と統一性を持続し、ものごとに対する批判能力を失わず、節操を守っていくことは、ほとんど不可能に近いくらい困難である。それでもなお真正な人間であろうとする者がいるとすれば、彼は、現代の人間の崩落現象に面して、あらゆるものから孤絶する。しかし、その孤絶は、現代の人間が大地から離反し根源性を喪失してしまったことがいかに重大なことであったかを、その孤絶自身によってなお語っていると言うべきであろう。

歴史の喪失

1　復帰と再生

歴史のダイナミズム

歴史は、本来、そのうちでいつも〈復帰と再生〉という螺旋状の円環を描きながら、その生きた動きを展開してきたように思われる。

例えば、十四世紀から十五世紀にかけてのヨーロッパは、人々が新しい生き方を模索していた時代であった。十五・十六世紀のルネサンスは、この新しい生き方とその知恵を、ヨーロッパがヨーロッパとして成立した原点、つまり、ギリシア・ローマの文化とキリスト教の本来の精神へもう一度立ち戻ることによって獲得しようと努力した歴史的な運動であった。だが、このような動きは、ルネサンスにとどまらず、ヨーロッパ世界が成立したときから十九世紀に至るまで、いつの時代でも試みられてきたことである。その意味では、少なくとも十九世紀までは、ヨーロッパの歴史は、絶えざるルネサンスの繰り返しだったとも言える。それは、ヨーロッパがヨーロッパの自己同一性を保持していくための不可欠な歴史の要件だったのである。実際、そのことによって、ヨーロッパは、不断に再生していくと同時に、自らの骨格を長い間持続しえた。

これと同じことは、ヨーロッパに限らず、我が国の歴史についても言える。例えば、平安末期から鎌倉にかけての歴史の動きは、古代世界の崩壊という未曽有の混迷期を、我が国として自立した精神のひとつ、仏教の原点にもう一度立ち帰ることによって乗り越え、新しい生き方とその知恵を獲得した時代であった。しかも、これに類した動きは、平安末期から鎌倉にかけてだけでなく、いつの時代にもみられることである。我が国の人々は、その時代その時代の生き方を、自らの原点、つまり神道や儒教や仏教の本来の精神に立ち戻ることによって見出していったのである。日本人は、そのことによって新しい時代を開き、甦るとともに、また、我が国の変らぬ同一性をよく保持していった。

一般に、歴史は、絶えず自らの過去に帰り、帰ることによって新しく再生し、同時に、遠い過去から受け継がれてきた永遠なもの、不変なものを持続していくものであった。歴史は、いつも、そういうダイナミズムによって成り立っていたように思われる。ちょうど、最初は一粒の種にすぎなかった一輪の花が、秋の終りとともに枯れしぼんでいっても、そこにはまた同じ種が残され、長い冬の眠りの後には、それはまたふたたび芽吹き、花を咲かせ、そして自らの永遠に変らぬ生命を持続するように、歴史も、また、やむことのない復帰と再生によって、その歴史的生命を持続するものであった。

ところが、それに対して、現代の世界には、そのような〈復帰と再生〉という歴史の生きたダイナミズムがない。復古がそのまま革新であるような緊迫した歴史的時間がここに

はない。〈復帰と再生〉の円環を描くバネもここではぷっつりと切れてしまい、歴史的時間はすっかりまのびしてしまっている。だから、現代の世界では、切れてしまったバネがただ一直線にのびるしかないように、歴史は絶えざる直線運動のみということになる。今日では、歴史は、いつも過去を振り捨て、弾丸のようにひたすら前に突進していくだけである。ひとつの過去が否定され、そして、ひとつの現在が登場する。しかし、この現在も、また、つぎにはひとつの過去として否定され、歴史は、つぎつぎと急行列車のように前進していくだけである。

進歩の観念

確かに、現代は絶えず過去を否定してきたし、また、現在にとどまることもできなかった。だから、現代は、絶えず得体の知れない未来に向かってひたすら迷走していく。事実、過去を振り捨て、現在をすべり落ち、未来にのめり込むという生き方が、現代人特有の生き方なのである。しかも、現代人は、このことを〈進歩〉と称してきた。それは、歴史が直線的にしか進行しなくなったことのひとつの表現と言えるであろう。

現代人は、過去を拒否し、現在を否定して、つぎつぎと未来の〈新しきもの〉を追い求めてやむことを知らない。今日ほど、〈古きもの〉が捨てられ、〈新しきもの〉がつぎつぎと登場させられる時代もない。現代人は、まるで飢えた者が手当り次第に食物を求めていくように、つぎつぎと未来の新しいものを求めてやまない。ひとつの新しいものを得る。これこそ新しいものと、人は言う。だが、現代人は、この新しいものにも飽きて、これを捨て去り、また次の新しいものを求めてとどまることを知らない。

しかし、真に新しいものとは、鎌倉新仏教のように再生することであって、しかも、そのためには、そこに再生してしかるべき持続性がなければならない。ところが、現代では、新しいものが現われたかと思えば、すぐにまた古くなって消え、消え失せたかと思えば、また現われるだけである。何ものかが現われる。それは、現われたときには、斬新ですばらしいもののようにみえる。しかし、それはまた、すぐに消え去っていく。

現代は、人間の欲望が無限に氾濫して、ひとつの巨大な機械仕掛の機構をつくりあげた時代であった。ここでは、復帰も再生も持続もない欲望の巨大な体制が支配権を握っている。そこでは、衰弱した体に強心剤が必要なように、絶えず、新しいもの、極端なもの、変ったものが、週刊誌の記事のように登場させられるが、それもまた、空無へと消失する。現代においては、歴史は、その持続ある生命力を失っているのである。

なるほど、現代にも継続や発展はある。しかし、これは、自動車や飛行機の発達に象徴されるように、欲望の巨大な堆積が量的に膨張していっているにすぎない。今日の人々は、この単なる量の歴史にすぎぬものを、歴史だと思い込んでいる。現代人はやむことなく新しいものを追い求め、それを歴史の進歩だと思っているが、それは、実際には、そのような欲望の巨大な体制の膨張にすぎないのである。

確かに、いつの時代でも、歴史は無常なものであった。だが、この世の無常なものが無

常なものとして理解されるのは、神や自然など永遠なものとの対比においてである。歴史が永遠なものの中に包まれているとき、歴史の中の無常なものは、はじめて無常なものとして理解されうる。しかも、そのことによって、無常なものは、かえって、永遠なもののうちに帰り休らうこともできたのである。いわば、国破れても悠久な山河があり、人滅んもで神はなお生きていた。無常なものは、永遠なるものとの関係のうちで絶えず変転しえたのである。その意味では、歴史とは、いつも無常なものと永遠なものとの関係であった。

ところが、現代の世界では、そのような無常なものを包む永遠なものがない。巨大な〈欲望の体制〉によって、それは、その地位を奪われてしまったのである。ここでは、運命とか摂理とか、歴史を超え包む不変なものが滅んでしまっているから、この世の無常なものは、もはや永遠なものを支点にして変転することができない。現代における〈進歩〉という概念は、そういう永遠との連関性を失ってしまったものを、あたかも連続性があるかのように見せるための概念装置である。その支点になっている〈未来〉という観念は、〈永遠なるもの〉の代用品にすぎない。

2　過去からの断絶

継承と持続の喪失

永遠を喪失し、〈復帰と再生〉のダイナミズムを失った現代の世界では，過去はつぎつぎと忘れ去られ、現在もすぐさま忘れ去られるべき過去になってしまう。現代の歴史的時間の急行列車は、過去の駅も現在の駅も猛スピードで通り過ぎて行ってしまう。

歴史は、また、過去から現在への、現在から未来への変らぬものの継承であった。もちろん、いつの時代でも、変化、変転というものはある。しかし、それは、遠い過去から継承されてきた不変のものを支点にしている。現に、我が国の歴史でも、ヨーロッパの歴史でも、そのうちには、どれほど多くの有為転変があったか量り知れない。しかし、そうでありながら、それを支える仏教やキリスト教の世界は、永遠不変のものとして持続されていた。

ここでは、現在のうちに過去が生きており、同時にすでに未来が孕まれていた。現に在るとは、過去―現在―未来を貫いて、ひとつの永遠なものとの交渉のうちに在ることである。それは、ちょうど、一輪の花が、そのうちにまだ若い芽であった記憶を蔵しており、同時に、すでにいく粒かの種になって、ふたたび次の世代に自らの変らぬ生命を継承していこうとしているのに似ている。継承と持続のある世界では、歴史はおよそそのようなものである。

ところが、現代の世界、この巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、過去から現在への、現在から未来への変らぬものの継承・持続が希薄になっている。今日の世界では、現在は過去から断絶しており、未来もまた現在から途絶してしまっている。現代の巨大な体制は、そのようなしかたで、過去のしがらみを振りほどき、膨張に膨張を重ねていくのである。

確かに、現代は、まるで列車が後部の貨車を切り捨てるように、過去から断絶してきた。氾濫する欲望が過去の規制を嫌い、それを破壊してきたのである。それは、近代の青年達が、父親のいうことを聞かずに、自分の欲求を無限に主張して、父親を踏み倒していったのに似ている。資本主義と共産主義は、過去という父親を踏み倒して、自分達の欲求を限りなく満たそうとしてきた仲の悪い兄弟である。

資本主義、あるいは産業主義は、産業の発展と経済の膨張を推し進め、過去の有機的な世界を駆逐してきた。この産業主義は、物質的発展にのみ着目して、「過去は悪かった。現在はよい。未来はもっとよくなるだろう」というオプティミズムを振り撒き、歴史に対する考えを逆転してきた。それは、歴史観に対して行われたひとつの革命であった。事実、このような進歩史観は、啓蒙主義によって提唱され、産業革命によって推進されたものである。これを境にして、資本主義社会は、過去から自分自身を切り離してきた。そして、それは、歴史は進歩するもの、進歩しなければならないもの、進歩発展させていかねばならないものとしてきたのである。そのようにして、それは、物質的な生活水準を上昇させる技術を、しかも、それだけをやみくもに追求してきた。しかし、この唯物主義によって、過去の偉大なもの、単なる生の充足以上の価値あるものが、どれほど無雑作に見捨てられてもきたことであろう。

この点では、共産主義も同じであって、これは唯物史観という名の進歩史観によって、資本主義以上に過去を否定してきた。それは、過去を、生産手段を所有した支配階級による抑圧の時代と断罪し、近代資本主義の矛盾の顕在化している現在を、その階級闘争の究極段階とみる。そして、今こそ革命によって資本家階級を倒し、労働者階級による共産社会をつくり、万人が必要に応じて分配を受ける新しい未来を建設しなければならないと言う。これは、近代人の嫉妬と権力欲の産み出した妄想にすぎないが、この妄想によって現実に革命は行われ、過去の共同社会は破壊された。これも、また、資本主義同様、否、資本主義以上に、過去から断絶し、過去から何ものも学ぶまいと決心した現代人の幻想の過度な噴出であった。

現代の巨大な体制は、そのようにして出来上がった。そして、人々は、伝統世界にあった価値の体系を失い、そのかわり機械的に組織づけられた世界を獲得した。ここでは、生の意味は、巨大な産業組織と機械的な社会機構に参与しているかぎりにおいてのみ見出されるだけで、それ以上の豊かな意味は見失われてしまっている。人々は、よりよき過去を喪失することによって、よりよき現在をも喪失した。過去との連続性において意味ある現在が、過去から切断されることによって、その豊かな意味を失ったのである。

考えてみれば、自由民主主義や社会主義、その他様々の近代主義は、過去を、支配と隷属のうごめく因習に囚われた暗い時代として思い描き、その桎梏からの解放を叫んできた。それらは、そのようにして、自らを過去から切り離し、断絶してきたのである。だが、このようにして気づいたときには、現代人の自己は、波に浮かぶ浮草のように、何の寄る辺もない空虚な自己になり果てて、よりよく生きるための価値を失ってしまっていた。かく

て、現代人は、まるで自らのうちなる空虚を埋め合わすかのように、無限の欲望追求に走ったのである。

実際、近代化が始まって以来、おびただしい数の人々が故郷を捨て、自由を求めて大都市に流入した。だが、その結果登場してきたのは、根無し草同然の大量の故郷喪失者達であった。彼らは、過去から断絶してしまったから、もはや未来に伝える価値を持ち合わせてはいない。人間は、過去からの規定があって現在しうるが、近代主義は、この過去からの規定を拒絶した。地にしっかり足のついていない大量の大衆が登場してきたのも、このことによる。

老人と子供

次のような情景を思い浮かべてみるとよい。

一本の菩提樹の木の下に、老人と子供が向かい合って坐っている。老人と子供は、沈黙したままで何も語ってはいない。だが、この沈黙の場では、この沈黙を通して、ひとつの永遠に変らないものが受け伝えられている。つまり、子供は、老人から、言わず語らずに、遠い祖先から受け継がれてきた過去を学ぶのであり、そして、自分自身が単なる切り離された個人ではなく、過去から永遠に持続してきた世界の一員であることを学ぶのである。一方、老人は、子供のうちに、自ら引き継いできた過去の行末を眺め、永遠に変らぬであろう世界を想像して、安らかに死に就きうることを知る。そして、死してもなお祖先の霊に連って、子供達の未来を見守りつづけるであろうことを確信して疑わない。過去—現在—未来の継承のある世界では、事情はおよそこのようである。老人という過去と、子供という未来が、現在において連続しているのである。

ところが、現代、この継承と持続を失った欲望の巨大な体制のもとでは、老人は、すでに現代には用のなくなった単なる過去の遺物にすぎず、この機械仕掛の現代世界では、まるで使い古されて間に合わなくなった歯車のようにしか扱われない。老人の魂のうちでは、すでに現在と未来への関係が断ち切られて、現代世界では何の名誉も役割も与えられない。今日の老人の孤独はここからくる。他方、子供の方は子供の方で、もはや老人から過去を学ぶということはなく、従って、過去から継承されてきた世界の一員となることもなく、ただ、ひたすら未来へと逃走していく。ここでは、老人という過去と、子供という未来が、現在において切り離されてしまっているのである。

一般に家族というものは、本来の世界にあっては、過去—現在—未来の継承の世界の雛形であった。祖父母は過去を、父母は現在を、子供は未来をそれぞれ代表し、遠い祖先から受け継がれてきた知恵や技術を、祖父母から父母へ、父母から子供へと、川の流れのように継承していくものであった。それが、本来の家族の中にあった生きた歴史だったのである。

ところが、今日の家族にあっては、夫婦は老人から離反し、子供は親から離反していく。そのようにして、現在は過去から逃げ出し、未来は現在を踏み倒していくのである。世代

は世代を蹴落して、人々はただひたすら新しいものへと向かい、もはや何ものも継承されるということがない。ここには、歴史というものが生きていない。今日よくいわれる〈核家族化〉という現象は、家族における継承の喪失を最もよく具現しているものと言える。これは、現代における〈歴史の喪失〉の世俗的表現なのである。

歴史の保存

現代の世界は、かつての有機的な世界が破壊されて、ひとつの巨大な欲望の体制が築き上げられた時代であった。なるほど、今日の世界にも、なお過去から受け継がれてきた多くの偉大なものが遺されてはいる。だが、それらは、時の埃をかむった博物館の陳列品のように、現在との連続性をもってはいない。博物館では鑑賞者と陳列品との間に厚いガラスが張られているように、現代人と過去との間にも触れることのできない断絶がある。人々は、ただ過去の偉大なものを、まるで自分とは縁のない異国の骨董品ででもあるかのように、もの珍しそうに眺め回るだけである。

かと思えば、根無し草のようになってしまった現代人は、今度は、逆に、「伝統に帰れ」「伝統を守れ」「今こそルネサンスが必要だ」などと、急に思い出したように言い出したりもする。しかし、これは、ちょうどコンクリートの高層ビルの中で「自然に帰れ」と叫んでいる現代人と同じように、単に、現代という難破船から救助を求めて悲鳴を上げているにすぎない。現代人によって破壊されてしまった過去は、それに対していかなる救いの手も差し延べはしないであろう。

確かに、テレビをはじめやマスコミは、我が国の伝統美を熱心に紹介したりもするし、政府は、文化政策の一環として、文化財の保存を推進したりもする。しかし、これも、また、〈自然の保護〉と同じであって、人間の力で逆に過去を保存しうると考える近代人の傲慢さからくるものである。保護された過去は現に生きてはこない。それがいつも博物館的なものになってしまうのは、そのためである。もはやルネサンスの可能な時代ではないのである。そこには真の過去への復帰も、そこからの再生もないからである。

伝統の回復は不可能である。なるほど、今日でもなお、伝統的な精神をもつて現代世界を生きている古典的な正統精神の持主はいる。しかし、それは、〈個人〉においては可能であっても、〈時代〉においては不可能である。このようなところでは、正統精神の継承者は、この全面的な精神の崩落の嵐に押し潰されて、むしろ、世界から孤絶してしまうであろう。

3　現在の喪失と未来への逃避

現在の喪失

現代人は、過去から断絶するとともに、それゆえにこそ、また、〈現在〉をも喪失する。その有様は、およそつぎのような情景にも譬えることができるであろう。

一本の松の大木が、海辺の岸壁にしっかりと根を張って立っている。それは、あたかも

過去から現在へ、現在から未来にかけて永劫に立っているかのように、不動のままで現にそこに在る。ところが、この大木の傍の岩づたいの高速道路を、おびただしい数の自動車が猛烈なスピードで通り過ぎて行く。その自動車の中からは、この大木は、不動のままで現に在るものとしては見えない。自動車は、まるで不動のままで現に在るものを恐れてでもいるかのように、そこから逃走していく。ここには、あの大木のように、自らのうちに過去を蔵し、未来をすでに内包しているような〈現在〉というものがない。〈現在〉はむしろ過去からすべり落ち、未来へとのめり込んでいく。永劫に変らないものを見据えて、不動のままでとどまるような〈現在〉が、ここでは失われてしまっているのである。

自動車の中にいる者、つまり現代人は、〈現在〉を喪失してしまったのである。だから、現代人にとっては、まわりの何ものも実在性をもっては目に映らない。現代人の目の前には、つぎつぎと驚くべき量の新しいものが驚くべき速さで現われてくるが、しかし、それらは、また、同じように驚くべき速さで消え失せても行く。現代人は、様々のものを通過するだけであって、それをしっかりと把握はしないのである。現代人にとって、歴史とは〈通り過ぎていく歴史〉である。ここには、過去―現在―未来の持続性がなく、あらゆる存在がその〈現在性〉を失っている。

例えば、中央であれ、地方であれ、現代の都市は、〈建設〉という名において、過去の古いものを打ち毀した上に構築されてきた。そこには、過去からの持続がなく、あるのは、ただ、やむことのない〈建設〉である。現代都市、この〈欲望の体制〉の縮図は、過去からの断絶ばかりでなく、現在性喪失の象徴でもある。このようなところに、どうして真の歴史があると言えようか。

未来予測

かくて、過去から断絶し、現在をも喪失した現代人は、それゆえに、今度は絶えず未来へと逃避していく。

未来予測は、この未来への逃避のための手段である。現代人ほど、未来の予測を必要としている人間はなかったであろう。国際情勢の予測、世界経済の予測、国内経済の予測、国内政治の予測、果ては天気予報に至るまで、現代世界はまるで予測の洪水のようである。過去に帰ることもできず、現在にとどまることもできなくなった現代人は、絶え間なく未来を予測することによって、本来はどうなるか分からない未来を略奪しながら生きていこうとしている。現代人は、いつも未来を先取りし、いわば未来を食い潰していかねば生きていけなくなったのである。彼らが、否、我々が、常に忙しく安らぎのない生活を送っているのは、おそらくそのためであろう。

現代人は、未来を予測し、その予測に添って未来の自己を設定し、それに向かって自分自身を駆り立てることによって、ようやく自己を取り戻そうとしているかのようである。現代人は、未来を予測することによって、現在を生きようとしているのである。現代人にとって、予測や予言が必要なのは、未来のためではなく、現在のためである。現代人は、

次の未来には、また、次の別の未来への予測によって生きるであろう。しかも、この未来の予測相互の間には、関連性は必ずしもなくてもよい。ただ、そこに何ものかが想定されれば、それでよい。現代人にとっては、ひとつの予測が未来において実現されようとされまいとどうでもよいのであって、ただそこに予測がありさえすれば、現代人はそこへと逃避していくことができるのである。多種多様な目標が、時に相互に矛盾していても構うことなく設定されつづけるのは、そのためであろう。

しかも、未来予測のためには、あらゆる手段が用いられる。自然科学も社会科学も、そのために動員される。例えば、未来学、これは、様々の手段を用いて途方もない未来像を提供することによって、この現代の巨大な体制の行き着く方向を差し示す。これは、未来の方へ、未来の方へとしか逃避する以外になくなった現代のひとつの末期的症状であろう。

現代人は、未来からしか現在の自己を規定しえなくなったのである。かつての人々は、現在の自己を過去から規定することによって生きようとしていたが、現代人は、未来から自己を規定して生きようとしている。なるほど、現代人は、そのような生き方によって、過去の足枷から解放され、多くの自由を得た。しかし、他方では、そのかわり、現代人は、未来の選択にいかに迷わねばならなかったことであろう。人間にとって、未来の自由は重荷なのである。

進歩史観と社会変革

近代思想は、一般に、未来への逃避の思想であった。例えば、産業主義の思想は、未来に対して〈豊かな社会〉というばら色の夢を描いてみせ、人々を休みなく未来へと駆り立てた。「過去は悪く、現在はよく、未来はもっとよくなるだろう」という素朴な進歩史観は、それとを反映する。人々は、ただ現在をすべり行くために、未来を信仰し、進歩を信仰したのである。

マルクスの唯物史観もまた同様であって、これは、未来に〈共産社会〉というばら色の世界を想定し、それに向かって人々を革命に駆り立てた。彼らは、神の国の代りに、未来の共産社会を信仰することにしたのである。過去を振り捨ててきた現代人の空虚な自己の中に革命信仰が入り込んでくるのは、それほど困難なことではなかったのである。

十八世紀ヨーロッパの啓蒙主義以来、ヘーゲルの精神史観やマルクスの唯物史観をはじめ、ミルの功利主義やスペンサーの社会進化論、コントの実証主義やデューイのプラグマティズムなど、近代思想といわれるものは、一般に進歩の歴史観を基盤にしていた。これらの近代思想が現代人に広く受け入れられたのは、現代人が、未来への逃避以外に生きる道を失ったためである。

近代は、〈進歩〉という観念が支配した時代であって、それは、現代人の思考の隅々にまで行き渡っている。〈人類の進歩と平和のために〉〈新しき社会の建設のために〉〈来たるべき豊かな社会を目指して〉などという高邁なスローガンから、〈豊かな生活設計のために〉〈老後の幸せのために〉〈力いっぱい生きて幸せをつかもう〉などという世俗的なモットー

に至るまで、現代を支配している未来信仰を表現している言葉には事欠かない。これら、お題目のように唱えられるおびただしい数の未来信仰は、現代人が過去から断絶し、従って、また、現在をも喪失してしまったことを表現している。

事実、現代人の家庭生活からして、ひとつの欲望から別の新しい欲望へと、とめどなく未来の〈幸せ〉を追い求めていくことによってのみ、わずかに成立しているほどである。現代人は、確かに、未来にしがみついて生きている。永遠なるものを失った現代人は、その代用品にすぎない〈未来〉を信仰する以外になくなったのである。〈未来への逃避〉、現代世界はこれによって成り立っている。

およそ現代ほど、実践の目標が個人の修養から離れて、社会改革や社会革命に向けられたことは、いまだかつてなかったことであろう。かつては、社会変革の基礎にも、徳の実践や信仰の実践、つまり、歴史の方向に垂直な方向の実践が重んじられてきた。社会をよくするためには、まず最初に個々人の修養や回心や発心がなければならないと考えられたのである。ところが、今日では事情は全く逆であって、社会の変革の方がむしろ実践と信仰の対象になってしまっている。あたかも、社会さえ改造すれば、個々人の資質もそろって飛躍的に向上するとでもいうかのようである。

しかし、そのように、〈社会〉という得体の知れないものを重視すればするほど、実際には個人の精神的向上は忘れ去られ、そのかわり、逆に、〈社会変革のために〉という理由のもとに、様々な権力欲がはびこることになる。今日、社会変革が叫ばれつづけているわりには、社会は一向によくならず、不満ばかり募る社会となるのはそのことによる。

本来、宗教とか哲学は、そのような歴史に水平な方向での思考ではなく、歴史の方向に垂直に、それを超えようとするところに見出された。宗教や哲学が、個人の精神的な完成を絶えず説きつづけてきたのはそのためである。例えば、ヨーロッパの中世末期や我が国の平安末期のように、たとえ危機の時代といわれるときでさえも、否、かえってそのようなときにこそ、宗教や哲学は、社会の改造よりも、個人の精神的転換に危機克服の力を求めたのである。

ところが、今日では、それが逆転し、様々の思想が社会改造を説き、それがかえって時代の危機的状況を増幅している。このような精神的状況のもとにあっては、本来の宗教や哲学は不可能である。実際、〈個人の修養〉などを説いてみても、今となっては何と古めかしく、時代錯誤的に聞こえることであろう。人は皆、歴史を横すべりするだけであって、もはやそれを超える方向ではものを考えられなくなってしまったのである。このようなところでは、本来の精神は、様々の未来への逃避の思想に追い立てられて、社会から孤絶した例外的な個人の魂のうちにのみ逃避する以外になくなるであろう。

永遠なものと不安

本来の世界では、未来とは、どうなるか分からない闇に包まれたものであった。だから、人々は、この未来の闇の前には沈黙し、ただ永遠なものの定めた運命に自己を任せた。そ

うすることによって、人々は、いわば未来と和解したのである。少なくとも、人々は、未来に対して、現代人ほど空しい叫び声を上げはしなかった。

ところが、欲望の無限に氾濫する現代の世界では、人々は、この永遠なるものへの信頼を失ったために、人間の手で未来をつかみとり、これを略奪することができると考えるようになった。人間の力で歴史を動かし、これを人間の支配下におくことができると考えるようになったのである。なんという現代人の傲慢さであろう。しかも、同時に、そこにはなんという現代人のひ弱さが隠されてもいることであろう。実際、現代人は、未来に向かって歴史を自由に改造していけると考えていると同時に、その自由ゆえに、未来に対して絶えざる不安を抱いてもいる。かつては、歴史は人間にとってひとつの運命であったが、現代人は、この運命への信頼を失ってしまったのである。

確かに、いつの時代でも、未来は不安の多い不可解なものではあった。しかし、永遠なものへの信頼のあるところでは、未来は、不確かなままで、同時に、すでに永遠なもののうちに包み込まれていた。だから、不安もまた、そのままで救われた。少なくとも、これほどまでに未来にしがみつくことはなかったのである。

それに対して、歴史を超える永遠なものを失ってしまった現代世界では、未来への不安はかえって不安を呼び、その不安ゆえに、現代人は、未来に何ものかをいつも設定しておかなければ耐えられなくなってしまった。しかし、もともと未来は無であるから、現代人が勝手に設定し切り取ってきた未来からは、本来の未来はいつも逃げていってしまう。今日でも、絶えず予想外の思わぬことが起き、それによって歴史が動いていくのはそのためである。それゆえに、また、かえって未来への不安は募り、そのため、人々はなおさら未来へのめり込んでいく。

頽落した終末論

現代の世界では、人々は、この巨大な体制に依存しきって生きているから、この現代の体制がわずかばかりでも順調に進んでいかなくなると、今度はとたんに人々の心は不安な終末論に占領される。それは、ちょうど、ちょっとした軋み音にも驚いて慌てふためく臆病な鼠の群にも似ている。人々は、信仰していた未来が少しでもあやふやなものになってくると、今度は逆に、「世界は滅ぶのではないか」「世界は終末に近づいている」と、暗い未来を確信するに至るのである。そして、多くの兆候を挙げて、しまいには、「人類は滅ぶのではないか」「地球が滅ぶのではないか」「宇宙は確かに滅びつつある」などと、また極端な妄想を懐く。人々の心は極端から極端に揺れ動き、不安な生き方をさらけだすのである。

だが、これは、この体制がいくらか順調に膨張していたときに人々が懐いていたあの進歩信仰の裏返しにすぎない。この〈頽落した終末論〉も、過去から断絶し、現在を喪失し、ただ未来に取りすがるしかなくなってしまった現代人のひとつの病的な現象であろう。それはなお形を変えた未来信仰であり、ひとつの屈折した未来への逃避の思想なのである。

人々は、逆に、予想される暗い未来を信仰することによっても、現在をわずかに生きようとしているのである。彼らは、そういう暗い予言を聞き戦慄を覚えることによって、衰弱した現在の自己に強心剤を打とうとしているかのようである。

現代の巨大な体制の進み具合によって、人々は、あるいは進歩を信仰し、あるいは退歩を信仰する。現代人は、この正と負の二つの未来信仰を繰り返すことによって、ますます未来のうちへとすべり込んでいく。

さらに、現代の体制は、一種の終末的な気分をも醸成する。この現代の巨大な体制は、人々にあらゆるものを約束し、ありあまるほどの欲求満足のための物量を分け与えたから、人々は、かえって、過保護に育った子供のように、それに飽きてしまい、そのために、ただ退屈と倦怠の気分のうちに惰性的にのみ生きようとする人間達が大量に生み出されてくる。現在を失い、従って自己を失ってしまった人間達は、そういうなんとはなしの不安の織り交ざった気分、一種の終末的気分のうちに、かえって心地よく生きようとする。この頽落した終末的気分を踊る人々は、まるで麻薬に侵された患者のように、ただ刹那的な享楽にのみ身を任せて、その日その日を暮らしていく。それは、まるで現代の大量供給の巨大な機構が生み出した堆積のようである。

このように何もかもが去勢されてしまった人間にとっては、もはやいかなる宗教も哲学も科学も無力であり、同時に不必要でさえあろう。そこには、ただ終末的気分という麻酔剤と、その気分にアクセントを与えるための、時折発せられる怒声さえあればよいのである。

このような状態を嘆いて、宗教家達は、時折、〈終末〉または〈末法〉を説く。しかし、これはもはや終末や末法でさえないであろう。かつての終末思想や末法思想には、現在の瞬間瞬間がまさに終末であり、末法であって、しかも、人々がその場で悔い改め発心するなら、その場でたちどころに救われると考えられるような時間間隔があった。ところが、現代の終末思想や末法思想には、そのような緊迫した時間感覚もなく、それを可能にする場もない。ここで語られる終末論や末法論は、「このままでは、やがて近い将来、あるいは遠い将来、世界は滅ぶであろう」という、まのびした時間感覚によって捉えられた弛緩した気分にすぎない。そこからは、何ものも生れはしないであろう。様々の未来信仰や終末的気分によってのみ現在を生きることができるほど、現代人の精神は貧しくなってしまったのである。

4　過去への破壊的侵入

観光と考古学

現代の巨大な体制、〈欲望の体制〉は、未来を略奪し、未来のうちに破壊的に侵入して、これを自らの支配下におこうとするだけでなく、過去をも略奪し、過去へも破壊的に侵入していこうとする。現代人は、過去を振り捨て、過去と断絶するにとどまらず、今度は、

逆に、過去を奪い返そうともする。

例えば、観光旅行、これは過去への破壊的侵入のひとつの表現である。今日、人々は、観光旅行と称して、隊列を組んで世界中の観光名所へ出かける。彼らは、まるで失った過去を奪い返そうと出動した突撃隊のようである。人々は、いにしえの名跡を尋ねても、過去に学ぼうとしているのではない。要するに、そこに奪いうる何かがあればよいのである。控え目な過去のモニュメント達は、今日、自分達自身の喪に服しているとでもいうかのように、自分達を離脱していった現代から身を隠すようにひっそりと沈黙している。ところが、現代人は、そうすることさえも許そうとせず、カメラや弁当を携え、自動車に乗ってやってくる。彼らは、およそ信仰のために名所を訪れるのではなく、ただ、そこに何かもの珍しいものがあるというような目付でそれを眺め、そしてカメラに収めて、そそくさと帰る。しかも、現代では、このようなせわしい観光旅行が、旅行会社という〈観光産業〉によって組織的に用意され、企画され、人々を動かしている。従って、ここでは、過去のモニュメント達も、単なる観光資源としてしか扱われない。そのようなしかたで、それらは、現代の欲望の体制のうちに呑み込まれてしまっているのである。それは、ちょうど、現代人が、自然復帰と称して海や山に大挙して出かけ、そのような形で逆に自然を略奪しようとしているのと同じである。

考古学の流行、これもまた過去の歴史への破壊的侵入のひとつである。すでに遠い時代に滅び去ったものは、地の底に埋没し、大地のもとに帰ることによって、深くやすらかな眠りについているのに、現代の考古学は、それにもかかわらず、これを無理やり掘り起こして、暴き出そうとする。現代人の欲望は、死人の墓をも暴く盗賊のように、過ぎ去った過去の人々の営みの中に侵入し、それを奪い返し、ふたたびこの喧噪の世界に呼び戻さねば気がすまないとでもいうかのようである。現代の体制は、あたかも何ものをも自分自身の生贄に供しなければ満足しない鬼神のようではないか。その恐怖のもとでは、もはや、墓を暴く者への呪いの言葉さえも通じそうもないかのようである。

かつて、人々は、遠い昔に滅び去ったものの前に立ったとき、それは沈黙の静けさのうちに佇んでいたから、その沈黙に応えるかのように、彼らもまた沈黙した。ちょうど未来に対して沈黙したように、過去に対しても、沈黙によって応えたのである。それでありながら、その沈黙と沈黙の間には、歴史の奥底を流れる生命の持続が脈打っていた。ところが、現代人は、この沈黙しているものをそっとしておきさえせず、あたかも沈黙しているものを恐れるかのように、すでに滅び去った過去まで破壊して、それを自らの所有に帰さねば安心しない。

歴史学

考古学ばかりではない。現代では、歴史学そのものが、歴史への破壊的侵入以外の何ものでもない。現代の歴史学は、現代の目でのみ過去を眺め、過去を解体し、過去を略奪する。歴史学とは、本来いかなる先入観も振り捨てて、純粋に過去の実相に観入し、そして、

その生きた有様を生き生きとしたしかたで叙述し、その全体像を明らかにするのでなければならなかった。ところが、現代の歴史学には、そのような生き生きした歴史叙述はなく、まして、過去の歴史を鑑とするというような精神もない。現代の歴史学は、ただ〈因果関係〉という機械的世界の刃物によって過去のうちに切り込み、過去を裁断し、過去を、この現代という機械的世界の一部に組み込んでしまう。ちょうど、ブルドーザーがまたたくまに山々を破壊していくように、機械仕掛の世界の住人は、有機的世界の生きた構造のうちにも、その非情なメスを入れて、そのメスにかかりうるもののみを切り取ってくる。現代の歴史学が、一般に無味乾燥で機械的な叙述となってしまい、本来は生き生きしていたはずの過去をないがしろにしてしまっているのは、そのためである。現代の実証史学は、おおむねそのような弊害に陥っている。

さらに、もっと極端なのはマルクス主義の歴史観であって、これは、〈妬み〉という現代人の欲望の方から過去を解体してしまおうとする非科学的な歴史学を生み出した。それは、ヨーロッパの十九世紀後半という極く特殊な状況の中で生まれた極端な発想を、人類の全歴史に及ぼして考えてしまう。つまり、「自分達は虐げられてきた、今こそ世の中を覆して自分達だけが絶対の権力を独占することのできる世界をつくらねばならない」という卑屈な権力欲をうちに秘めた思想から、〈階級闘争〉という概念をつくり出してくる。そして、これをすべての過去の歴史に当てはめ、「歴史はすべて階級闘争によって成り立ってきた」と独断し、それに都合のよい事例のみを取り出してくる。これは、一種の歴史の捏造であって、現在や未来だけでなく、過去をも革命の犠牲に供しようとするための歪んだ歴史解釈である。マルクス主義の歴史観、つまり唯物史観も、そのような〈革命信仰〉によって、過去の中に破壊的に侵入し、過去を略奪していく。

この歴史観は、歴史の基底には生産力があり、下部構造が上部構造を規定するのであって、その逆ではなく、歴史を動かすのは結局経済であるとする経済史観を前提にしている。〈経済〉という欲望の直接形態が重要視され、社会や文化にまで大きな影響を及ぼすようになるのは十九世紀以後になってからである。唯物史観は、この十九世紀以後の特殊な状況を、そうではなかった過去にまで及ぼして考えてしまう。それは、単に経済主導時代の反映にすぎず、いつの時代にも成り立つ歴史観ではない。しかし、これによって、過去の高貴なものが放逐されてしまったことを思えば、その破壊力はいかに大きなものであったかが分かるであろう。

実際、我が国で飽きもせず教育されてきた内外の歴史は、主に、そのようなマルクス主義の概念によって導かれていた。だが、それによって、日本や世界の古きよき時代の生の様式がどれほどないがしろにされてきたことか、さらに、そういう歴史教育を受けてきたほとんどの世代が、どれほど歴史に対する感覚を麻痺させてきたことか、量り知れないものがある。彼らは、過去の伝統への尊敬の念をもつどころか、逆に、始めから終りまで過去に対する憎悪と反感を抱きつづけている。

現代の巨大な体制、〈欲望の体制〉は、未来のうちへも、過去のうちへも、破壊的に侵入

して、その膨張をやめようとしない。それは、まるで未来や過去をも略奪して自分の餌食にしようとする貪欲な怪物のようである。

歴史的時代の区別さえなくしてしまう現代のこの飽くことのない略奪の体制を動かしているものは、一体何なのであろう。それは、何か得体の知れない見えざる手、〈盲目の意志〉とでもいうべきものによって、動かされているようにみえる。この得体の知れない何ものかが、人間の欲望を、自然のうちへも、歴史のうちへも、あらゆる場所に破壊的に侵入させ、略奪させていっているようにみえる。少なくとも、自ら破滅して地の底に埋もれ尽すまでは、この体制はその略奪の手を伸ばしつづけるであろう。

大衆の氾濫

1　大衆の原理

それ以上のものの忘却

現代世界では、大地から離反し根無し草のようになってしまった大衆があらゆる場所に氾濫し、あらゆる場所を占拠する。大衆という得体の知れない大量の粒子が、まるで原子核の分裂のように、従来の共同体の枠組を破って、現代世界にところかまわず充満する。現代は、人間の欲望が無限に氾濫して、ひとつの巨大な体制を築き上げるに至った時代であった。大衆の氾濫は、この欲望の氾濫の社会的な表現である。

今日の大衆は、自分達だけの世俗的な福利のみを行為の第一原理にして動いている。今日の大衆は、この世俗的な価値を、しかもそれだけを信じ、それに向かって自ら努力しなければならない崇高な価値のあることを忘れてしまっているようにみえる。

なるほど、今日の大衆たりとも、この大衆の原理以上の価値を目指して動いているようにみえるときもないわけではない。しかし、そのような場合でも、今日の大衆は、自らの尺度を唯一の価値規準にして、それを利用するにすぎない。例えば、知識を得ること、これは世俗的な福利を超えたひとつの高貴な価値であった。しかし、今日の大衆が知識を得ようと努力するのは、真理への憧憬からではなく、知識を獲得することが自分の福利に必要だからにすぎない。つまるところ、自らの幸福と利益を得るための手段にすぎない。だから、そこには、ひとつの知識を得たことに対する喜びもなければ、偉大な先人の真理への情熱に対する畏敬の念もない。まして、ひとつの知識が、事柄に対する純粋な驚きから、無償の努力によって得られたものであって、その発見がどれほど素晴しいものであり、どれほど深い感動をもって受けとめられたかということに対しては、今日の大衆はほとんど理解しない。

今日の大衆の知識獲得の態度は、ちょうど実用書に対する態度と同じであって、どんなに偉大な真理に対しても、そのような態度で臨む。したがって、実用向きでないものは、理解しても、すぐに排泄してしまう。現代の大衆の一見旺盛にみえる知識欲は、そのように、知識を、その真の価値ゆえにではなく、むしろ、その経済価値に目をつけて略奪していくにすぎない。今日の大衆は、確かに、より高度な知識を得ようとして高等教育を受けに来るが、しかし、それも、まるで知識という餌に群がる蟻のようにしかみえない。こうして、知識は、大衆が介入することによって世俗的段階に引き下ろされ、いつのまにか実利に還元されてしまう。あらゆるものの手段化ということは現代のひとつの特徴であるが、欲望の氾濫によってもたらされた現代文明は、確かに、知識を実用主義的なものにしてしまった。

現代の大衆は、どんなものでも、そのような原理からのみ眺め、すべてはそれに利するものでなければならないと思っている。彼らは、自らの規準を超えた高貴なもの、真なるもの、善美なるものに自らを従わせねばならないという感覚を持ち合わせてはいないのである。

なるほど、かつての時代の民衆も、自分達だけの世俗的福利を求めて生きてきた。しかし、それにもかかわらず、かつての民衆は、なお自らを超える〈それ以上のもの〉のあることを、宗教や倫理や習俗を通して知っていた。だから、この〈それ以上のもの〉に面したとき、人々は、自己の限界を知って、謙虚にそれを受け入れたのである。かつて、人々がこぞって高貴なもの、偉大なものを尊崇し、神々と大地を畏敬したのはこのことによる。つまり、以前には、民衆の原理の上に〈精神〉があったのである。人々はこの〈それ以上の価値〉を支点にし、それを場所にして生きていた。そのために、かえって、彼らの単なる福利という民衆の原理そのものにさえも、それ以上の余剰の意味が与えられもしたのである。

ひとりの人間にあっても、精神によって欲望が指導されるとき、はじめて健全な人間でありうる。それと同じように、ひとつの社会にあっても、高貴なものと卑俗なものとの秩序があって、はじめて健全な社会ということができる。そこには、人と人との間に人間を超える共通の価値が存在し、それを支点にして、人々は動いていくことができるからである。

ところが、現代世界にあっては、人間の生の支点であったこの上位の価値が取り払われ、そのかわり、その座を欲望の原理が占拠した。かくて、精神の指導をもたなくなった大衆は、今度はこの原理を振りかざして、様々の場所に氾濫したのである。ここでは、人々は、もはや自分達を超える上位の価値に従属しようとはせずに、自分達だけの原理に居すわっている。そして、自己の限界を知ることもなく、逆に凡庸の権利を主張し、単なる生の無限充足を要求してやまない。現代の体制は、そのようなおびただしい量の大衆をほとんど機械的に大量生産し、この体制のあらゆる部分に進出させ、介入させ、支配させたのである。ここでは、当然のことながら、高貴な価値に自らを従わせようとする精神は不可能になり、生きる場所を失う。

疑似精神

今日の人々は、様々の欲求のベクトルをもって、あるいはあちらに、あるいはこちらにと、この現代の巨大な機構の中を動き回っている。人々は、毎朝どこからともなくどっと押し寄せてきて、地下鉄から地下鉄へと乗り継いでビル街へと消えていく。そして、一日中ビルからビルへと忙しく行き来して、夕方には、また大群をなして地下街を押し合いへしあいして、どこともなく消え失せ散らばっていく。これが、現代の平均的人間の有様である。それは、なお、欲望の無限に氾濫する現代の巨大な体制の一単位、〈欲望のアトム〉にすぎないようにみえる。そこに、どうして個性などというものが見出されえようか。

もちろん、現代の大衆たりとも〈精神〉を欲していないわけではない。否、現に、彼らはそれを欲してもいる。自分がそれに従属したいと思っている全体的な何ものかを欲している。欲しているばかりか、今日では、むしろ、それは、ありあまるほど提供されているとも言える。どれほど毎日、〈自由〉や〈平等〉、〈平和〉や〈民主主義〉が叫ばれていることであろう。

だが、これらありあまるほどの〈精神〉は、また、どれも、本来の高貴さを失ってどれほど卑俗化され、格下げされてもいることであろう。これら現代において叫ばれつづけている〈精神〉は、本来の〈精神〉ではない。それは、むしろ〈擬似精神〉、あるいは〈精神の代用品〉にすぎない。現代の大衆はこの疑似精神に自らの欲望を最大限もぐり込ませているのであって、自己自身を超えるものとして、それに対しているのではない。確固不動の永遠なるもの、根源的なものを失ってしまった現代人は、そのような多くの擬似精神に取りすがって、それを支点にして動いている。現代のイデオロギーは、そのような擬似精神にすぎない。それらは、人々の無制御な欲求を抑制するどころか、それをむしろ増大させ、促進させる。

かくて、人々の欲望は、この現代の体制の中で無限に膨張し、この欲望の巨大な体制を動かすに至る。確かに、大衆の一人一人は、単なる欲望の小さなアトムにすぎないかもしれない。しかし、それはひとつの巨大な塊となって、巨大な力をもつ。しかも、今日では、この巨大な欲望の怪物は、いつも社会の許容範囲を越えて肥大化していくために、例えば地球環境問題などに象徴されるように、奇妙なことに、人間自身の生をも圧迫するまでに成長してしまったかのようにみえる。ところが、自分達の欲望があまりにも増大しすぎたために生じたこのような現象を、人々は、自分達の責任だとは思わない。人々は、それが自らの責任だと思うどころか、逆に、他に責任を転嫁し、不平不満を鳴らす。かくて、欲望の欲望に対する戦いが生じる。しかし、それにもかかわらず、この〈欲望の体制〉という巨大な怪物は、そのような大衆の欲望の充満する中で、ますます増大し膨張していく。少なくとも、自ら破滅するまでは、無限に膨張していく。

2　体制への甘え

限りない要求

現代文明、この巨大な〈欲望の体制〉は、大衆に対してあらゆるものを用意し約束したために、大衆にとって、少なくとも〈単に生きる〉ということに関しては容易なものとなった。それどころか、この欲望の巨大な体制は、大衆の限りない要求をつぎつぎに満たし、限りない欲望を無制限に刺激しさえする。そのため、大衆は、この限りない欲望を満たしてくれる文明を、まるで空気のように最初から自分達のために用意されたもののように思い、それを随意に利用することだけに関心をもつに至った。こうして、この体制の中に住み込んだ大衆は、自分に約束されていないものはないと思い込み、しかも、それが、自分

で努力しなくても自然に与えられるものでなければならないと考えるようになったのである。

そのため、彼らは、逆に自分達の要求が少しでも満たされなかったりすると、ちょうど、甘やかされた子供が少しばかり欲しいものが与えられないとだだをこねてねだるように、国家や社会に対して、際限のない要求を、あたかも自分達の当然の権利ででもあるかのように主張する。大衆は、自分達を育ててくれたこの現代文明全体を見渡すことができないのである。ちょうど、甘やかされた子供が父母の努力や家計全体のことを知ろうともしないように、大衆は、ひとつの共同社会が個人個人の努力によって成立しえているのだということを分かろうとしない。だからこそ、彼らは、全体に甘え、ひと塊になって様々の要求を掲げ、それを押し通そうとする。

というよりも、むしろ現代の世界は、個人の自己規制の必要な共同体を破壊し、そこから個人を解放したから、自分達の無限の欲求をどこまでも主張してもよいということになったのだと言うべきかもしれない。その方がかえって、この欲望の巨大な体制は膨張していくことができ、実際に、その欲求を満たしていくこともできる。こうして出来上がったのが、この欲望の充満する現代の世界だったのである。

体制への寄生と無節操

現代の大衆は、この体制に甘え、それに依存して生きているから、この体制が少しばかり危うくなっただけでも危機感を感じて、自分自身の思想さえも掌を返すように、簡単に変えてしまうことがしばしばある。知的大衆をはじめ、現代の大衆の無節操はこのようにして起きる。毎日帽子を替えて出歩くようなつもりで、大衆が、自分自身の考えをめまぐるしく変えて生きていくのはそのためである。

昨日まで戦争讃美を行なっていた大衆が、体制が変ったとみるや、すばやく反戦論者になってしまったり、あるいは、昨日まで平和主義を唱えていた者が、ちょっとした国難の訪れとともに、今日はもう主戦論者になっていたりする。そこには、もはや、戦争によって守り、平和によって創造すべきより高い一貫した価値というものがないから、彼らにとって残るのは、自分達一個の保身のみということになってしまう。こうして、彼らは、まるで移り気な鳥が木から木へと飛び移るように、平気で思想を変えていく。もともと、現代人は、持続する自己というものをもたないから、あたかもテレビのチャンネルを切り換えるように、何の苦痛もなしに、どのような思想にも跳びつきうるのである。

現代の体制、この欲望の巨大な機構は、このように、体制に甘える大衆を大量に生み出した。彼らは、この〈欲望の体制〉という巨大な怪物の体内に寄生して、その栄養を吸い尽していく。多かれ少なかれ、現代人は、この体制に依存せずに自立していこうと考えるよりも、この体制にできるだけ寄生していこうという心理の方を多分にもっている。現代では、大人が子供化しており、ここでは、人々は幼稚であることをひとつの権利としている。現代では、様々の欲求を権利として大きく叫ぶのが善とされる。現代社会が人々の幼

稚な要求で充満し、一種の小児病の症状を呈しているのはそのためである。

かくて、何から何まで用意してくれるこの現代文明の中に寄生した大衆は、文明が与えてくれるものに対して、どのように適応していけば有利であり、どのように反応したら不利かだけを考えて生きていくようになる。大衆は、文明をただ消化し吸収し利用するだけであって、もはや、自分で何ものかを創出していこうとする気概はもたない。こうして、大衆は、風になびくすすきのように、体制の流れのままに身を任せて生きていくようになる。

3　大衆の満足と不満

大衆の満足

現代の巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、大衆は、少なくとも自己自身に対しては、満足しきったような顔つきをしている。

確かに、かつての時代でも、民衆は、自己自身に対しては満足しきったような顔つきをしていた。しかし、それは、何よりも、ひとつの有機的な世界のうちに自己が育まれているということへの一種の安心感、あるいは、永遠なるものの定めた宿命に無力な自己自身を委ねているという一種の諦観からくる満足であった。かつて人々を取り囲んでいた世界は、諸々のものが人間の力を超えたものであったから、何ごとも、絶えざる努力がなければなしえなかった。だから、かつての民衆は、最初から、生きるということは努力すること、辛いことと悟っていた。それゆえにこそ、彼らは神々を信じ、神々に身を委ねてその加護を願い、この世と来世の平安を祈ったのである。かつての民衆の満足は、そのような自己を任せうる世界を自己のうちにもっており、同時に、そういう世界のうちに自己が住んでいるということへの信頼であったように思われる。

ところが、現代の大衆の満足しきった様子はそれとは違う。大衆に対してほとんどすべてのものを用意した現代の体制下にあっては、大衆にとって、すでに〈単に生きる〉ということはたやすいものとなっているから、今日の大衆は、もはや生きることが辛いことであり、努力することに他ならないとはほとんど思わなくなってしまった。かくて、彼らは、自分自身については満足してしまったのである。

高貴な精神は、自己のうちに自己を超える価値を見出しており、それに向かって絶えず努力していかねばならないと考えている。ところが、そのような価値をもたなくなった現代の大衆は自分の限界内で満足し、すでに、自己自身を完成するということがどういうことかも忘れてしまったのである。

大衆の不満

一方、自己自身に満足してしまった大衆は、自己自身の外のものに対しては不満をもつ。実際、彼らは、国家や社会に対して尽きることのない不満を並べてやまない。自分で努力

して獲得しなければならない価値を自己自身のうちにもたなくなった大衆は、少しばかりの不如意でも、責任は社会にあり、政治にありと思うようになったからである。ひとつの共同社会は、本当は一人一人の責任の上に成り立つのだが、今日の大衆にとっては、自己の責任などというものには思い当たらない。しかも、今日の大方の知識人や新聞人達は、この責任の解除と責任転嫁をいかにももっともなしかたで理由づける役割を演じてくれる。

社会は、全体に対する責任から自己を律する少数者と、自己の個人的欲求の方から出発する多数の大衆とから成り立つ。前者が責任ある位置に立ち、後者がそれに指導されるとき、わずかに社会は秩序を保ちうる。しかし、現代という時代は、むしろ後者の方が、本来の秩序を破って様々の場所を占拠するに至った時代である。様々のエゴイズムが氾濫し、それらが相衝突する今日の社会は、このようにして出来上がった。限りない要求を主張することを自己の使命と心得ている職業的な組織活動家などが登場したりするのは、このようなところにおいてである。民主主義や社会主義の原理は、そういう大衆の進出を可能にするものであった。

このようなところでは、全体に対する責任の方から自己を律する資質を備えている人々は、自己自身の存立基盤を失って、ほとんど望みを失ってしまう。そのようにして、本来なら秩序ある社会の指導者であるべきであった者がここでは隠れてしまい、本来なら指導さるべき立場にある大衆が、ここでは逆に支配者となる。現代社会、この大衆の社会は、そういう転倒した社会なのである。

現代の世界、この精神なき世界では、自己を超えて全体的なものに従属する精神が希薄になっているから、現代人は一種の欲望の塊のようなものになってしまう。そして、さらに、そのような人々の集合によって出来上がった現代社会も、欲望の肥大化した巨大な集合体のようなものになってしまう。巨大な企業群、政治そのものさえも動かす様々の圧力団体や官僚組織、その他諸々の経済社会の巨大組織はその表現である。

自己自身の内的世界のうちに崇高な価値を見出すことができなくなった現代人の自己には、ただ、なんとはなしの空虚感だけが残されているだけである。そして、現代人は、この内的空虚に耐えられなくなったとでもいうかのように、これをコンクリートの塊によって充填してしまったかのようである。だが、現代人のこの内的空虚は何によっても埋め合わせのできるようなものではないから、現代人は、また、まるで喉の渇いた者のように、さらに多くの欲望によってこれを充填しようとする。不満だけが充満し、欲望だけがほとんど無限に氾濫していく現代社会の現象は、多分、そのような現代人の内的構造に由来するものなのであろう。

4　大衆の偶像

つくりあげられる英雄

大衆の氾濫する現代の世界では、大衆によって大衆の英雄が選び出され、それが〈大衆

の偶像〉として崇拝される。確かに、いつの時代にも英雄はいた。だが、かつての時代の民衆は、自己を超える価値が何であるかを知っていたから、すぐれて徳ある者、非凡な者を偉大な英雄として崇敬し、人間の理想像として、長く歴史に語り継いでいった。ところが、現代の大衆は自己を超える価値を知らないから、逆に、自分達の欲求や衝動や感情を無限に約束し刺激してくれそうな者を、あたかも英雄ででもあるかのように祭り上げ、それを〈大衆の偶像〉として崇拝する。大衆性が、偶像のうちで、いわば増幅されて表現されるのである。

現代人は、内部の空虚と不安と退屈を紛らわすために、そのような英雄を押し立て、その英雄のまわりに寄り集り、ようやく自分達がまだ孤独ではないことを確認しようとしているかのようである。だから、この大衆の偶像は、映画スターでも、スポーツ選手でも、タレントでも、何でもよく、ただ寄り集れるものでありさえすればよいのである。

政治の分野でも事情は同じであって、まるでスターを選ぶようなしかたで、〈大衆の偶像〉が選び出される。しかも、大衆は、彼らのうちに自分よりすぐれたものをみるというより、単に、彼らのうちに、自分の大衆的願望の幻想をみるからにすぎない。大衆は、自分達の欲望や衝動を満たしてくれ、不満や憎悪を解決してくれそうな者を、自分達の代表者として祭り上げる。だから、この英雄達は、おおむね大衆の幻想を掻き立てる者である。彼らは、文字通り〈大衆の代表者〉なのである。政治的理念も技術も何もない芸能人やスポーツ選手、作家や学者が、ただ有名だというだけで大量の票を集めて、政治家に選ばれたりするような大衆民主主義の現象は、その最もよい例である。根無し草になってしまった大衆に向かって、あらゆるものを度はずれに約束して、大衆の人気を一手にさらっていったあのヒトラーなども、そのような大衆民主主義の生み出す〈大衆の偶像〉の典型であった。

現代の大衆は、政治家がどのようなものでなければならないかを知らないのである。本来、政治家にふさわしい者は、全体に対して責任をもちうる者でなければならないのだが、その同じ場所に、大衆は、ただ大衆と一緒に共鳴しているだけの凡庸者を押し上げてくる。週刊誌的人間が週刊誌的偶像をつくりあげるのである。大衆が大衆を導く盲目な国家が出来るのは、このようにしてである。

独裁者の登場

独裁者は、このような大衆の氾濫の世界の最も際立った偶像である。なるほど、彼らは圧政を行なって大衆を苦しめたと、人は言うかもしれない。確かに、ヒトラーやスターリンは、かつてのいかなる専制君主もなしえなかったほどの圧政を行ない、かつてのいかなる権力者もなしえなかったほどの残虐な殺戮や粛清も辞さなかった。しかし、独裁者の圧政は、大衆の大衆による圧迫でもある。大衆は、自分達の過度な欲望や衝動や感情を、独裁者というひとつのシンボルマークに託す。独裁者は、初めのうちは、そういう大衆のあらゆる欲求の集積点として登場する。しかし、大衆の欲求はいつも度がすぎるから、独裁者たりとも、それを満たしていくことができなくなる。そのため、やがて独裁者は、自己

の権力が弱くなるのを恐れて、他国を敵にまわして戦争を始めたり、自国の内部に敵をつくってそれを弾圧したりして、大衆の不満をそらそうとする。こうして、大衆が大衆に圧迫されるということになるのである。

かつてまだ精神の生きていた時代には、共同体がしっかりと生きていたから、権力者たりとも、それを容易には破壊することができず、従ってまた、そのような共同体に護られた民衆をそれほど容易に弾圧することはできなかった。確かに、かつての時代にも、独裁者や暴君が登場し、民衆を苦しめ抑圧した。しかし、民衆は大地にしっかりと根を下ろしていたから、近代の大衆のように、〈大衆の偶像〉を押し立てて脱兎のように動き、そのためにかえって自ら圧迫されるというようなことはなかった。だから、いかなる権力者たりとも、近代以後の独裁者ほどには圧政を行なうことはできなかったのである。

かつての権力者はすべて民衆を搾取し民衆を圧迫した者だと考えて、過去をことごとく否定するのは間違いである。むしろ、極度な圧政の行なわれ出したのは、民衆が共同体を離れて大地から浮足立ち、〈大衆の偶像〉を崇拝し出してからのことである。もともと、権力者の横暴を押さえ排除しようとして出てきた近代の自由民主主義や社会主義が、逆に、ヒトラーやスターリンなどの全体主義を生み出したのは、そのような大衆の時代の構造に由来することなのである。

しかし、この幾多の〈大衆の偶像〉達も、また同じ大衆によって絶えず消費され、消え去ってもいく。大衆から限りない賞讃を受け崇拝された者でも、おもちゃが子供によって飽きられるように、同じ大衆によって捨て去られていく。かくて、多くの偶像が消えては現われ、現われては消える。もともと、彼らは、現代の大衆の一種の空無性から生れ出てきたのだから、彼らがまたもとの空無へ消滅していっても不思議なことではないであろう。

5　大衆による消費

消費される思想

現代の世界、この巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、どんなに偉大なものであっても、大衆的原理によって消費され、無意味にされていく。

例えば、今日まで東西の長い歴史を通して持続的に生み出されつづけてきた偉大な思想も、現代では、大衆によってつぎつぎと消費されていく。確かに、現代人は、それらの思想を、かつてのいかなる人々よりも多く所有している。事実、今日、それらは、現代の大量生産のシステムに乗って、かつてのいかなる時代よりも盛んに研究され、解釈され、教育され、宣伝され、出版され、解説されている。しかし、実のところ、これは、一般大衆に向かって宣伝されるということによって、消費されているにすぎない。それらは、現代に生かされるということはなく、現代という時代の中に生きたしかたで意味づけられもせず、実際の生活に生かされもしない。なるほど、現代では、それらは過去の遺産として称揚されたりもするが、しかし、現代の大衆は、実際には、これを食い潰しているにすぎな

いのである。現代人は、いかに高貴で偉大なものでも、それを断片化してしまい、空無のうちへ消費していく。

もっとも、そのように過去のものが解体され消費されてしまっても、現代にはなお現代の思想があり、これだけはなお堅固に生きつづけると思われるかもしれない。自由・平等の思想に根差す民主主義や社会主義の思想など、現代の思潮は、過去の思想からは明確に峻別され、過去への勝利を誇らかに謳っているからである。しかし、それらは、現代では、大衆の原理を称揚するかぎりにおいて認められているにすぎないのだから、それらも、いつのまにか大衆的原理によって消費されていってしまう。そして、それらは、砂漠に水を撒くように、いつのまにかどこかへ吸い込まれていってしまう。

現代では、あらゆるものが、大衆の限りない欲望という得体の知れない巨大な塊の中に呑み込まれていく。現代の知識人は、思想でもなんでも、これを飲み込みやすいように解説するという役割を演じている。確かに、このようなところでも、この現代の苦悩を背負って、深い絶望の中から出てきた高貴な精神の思想もあるにはあろう。しかし、これらもまたいつのまにか骨抜きにされ、大衆の次元に格下げされていくというのが、現代という時代の避け難い構造なのである。現代の大衆は、およそ深さに対する感覚というものを持ち合わせてはいないから、どんなに深淵な思想でも、皆で寄ってたかってないがしろにしてしまう。このようなところでは、当然のことながら、本来の哲学は不可能になる。

現代のイデオロギーさえも、今日では、大衆によって無力化されていく。ひとつのイデオロギーが声高に叫ばれても、それが大衆のレベルに浸透していくと変質し、得体の知れないものに解体されて、最後には見向きもされなくなってしまう。一種の欠如態から生れ出てきた大衆は、諸思想をまたもとの欠如態へと返し、その意味を剥奪してしまうのである。

消費される芸術

現代の世界、この巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、文学も、思想と同様、単なる消費のための材料と化す。確かに、今日の世界にも、過去の偉大な文学作品が数多く残されてはいる。しかし、現代では、そのような偉大な作品も、この欲望の巨大な体制の中に組み込まれると、たちまちにして、その他の大衆文学と同じように、現代の大衆によって消費され、空無化されていく。現代では、過去の偉大な文学も、それが生かされていた世界から切り離されて、大衆による大量消費のシステムの中に組み入れられてしまうのである。

確かに、現代では、たちまちベストセラーになるようなよく読まれるものも、数多く出現しはする。しかし、これは、むしろ、最初から消費されるためにのみ生産されるものだと言うべきである。ベストセラーというものが、よく売れる代りに、すぐに忘れ去られていくのはそのためである。ここでは、何ひとつ持続するものがなく、多くのものが空無のうちへと消え去っていく。このようなところでは、当然、偉大な文学など登場しえないであろう。

かつてまだ精神の生きていた時代には、永遠根源的なもののうちに人々が生きており、人々のうちに永遠根源的なものが生きているような〈世界〉が厳然と存在していた。そして、一人の芸術家が自らの住むそのような大きな世界を映し出して、それが絵画や音楽となった。しかも、それが奉納されたり献上されたりする寺院や宮殿や神殿があり、人々はそこに集り、そのような作品を通して、自分達の住んでいる世界の至高なものを見た。このように、ひとつの世界のうちに、芸術家と作品と公開される場所と人々とが所を得て存在し、そのことによって同時に世界も生かされてくるのである。そのようなところから、偉大な芸術作品は生れ出てきた。そこでは、作る者も見る者も単なる個人ではなく、世界の場所に生かされており、同時に、世界を生かす者でもあった。かつての時代には、このようにして、世界が偉大な芸術作品を生み出し、それを支え、受け継ぎ、保存した。だから、芸術は永遠だったのである。

ところが、現代の芸術にはそういう〈世界〉がない。一人の芸術家が、孤独なアトリエや書斎で作品を作る。それが、展覧会や音楽会という〈世界〉から切り離された一種の博物館めいた場所、そのためにのみしつらえられた特別の場所で公開される。すべてが技術化され、人工化されてしまっているのである。否、今日ではさらに、そういう人工的にしつらえられた場所さえ省略され、絵画や音楽が大量の複製品となって、どこからともなく吐き出され、大衆のために供給される。確かに、そういう形で絵画や音楽は広範な大衆に普及しはするが、しかし、それとともに、それらは大衆によって消費され、使い捨てられていく。それは、ちょうど、どこか知らない工場から物資が生産され、それが得体の知れない販売機構を通して消費者大衆の手に渡るあの今日の巨大な経済構造と同じなのである。このようにして生産され消費されていく芸術には、当然のことながら、作る者と見る者とが共通なものを通して呼応し合うような世界がない。現代が生み出した印刷術や複製技術や情報技術の発達は、芸術の世界をも破壊し、これをも大量生産と大量消費の機構の中に組み込んでしまった。〈欲望の体制〉というこの得体の知れない機械的組織は、芸術をも呑み込んで、これを単なる消費物資にしてしまったのである。

消費される科学

つい最近まで、現代は科学の時代だといわれ、科学が、時代を動かす大きな力として認められてきた。実際、現代では科学的思考が尊重され、また、科学的発見がひとつの時代的な意味をもって迎え入れられてもきた。

しかし、現代では、この科学さえも、大衆によって消費されていく。つまり、どんなに偉大な科学者が宇宙の真理を生命がけで探究したとしても、大衆は、それを生活の便宜のために利用していくだけである。科学が技術と結合して、科学技術として発展を遂げたのはそのためである。科学的精神は、本来は、自然の諸現象のうちに自然法則という理念を見出していこうとするアイデアリズムに根差している。それに対して、技術の方は、何ごとも何かのために利用していこうとする功利主義に根差している。現代、この欲望の巨大

な体制のもとでは、技術の功利主義が支配し、そのため、科学の成果もすぐさま技術に応用されていく。科学に対する大衆の賞讃も、主にこの技術文明の発展の基礎としてであって、そのアイデアリズムに基づく真理への憧憬によるのではない。だから、技術文明に利用されえない場合は、科学は単なる骨董学と化す。

そればかりか、現代では技術的思考があまりにも大きいから、単に技術が科学の成果を利用し尽すというにとどまらず、今日では、科学的探究そのものの中に巨大技術が入り込んでくる。事実、今日の科学者は、極く限られた専門分野を巨大な実験装置を使って研究する技術者のようでさえある。

さらに、今日では、すでに、科学的精神そのものが大衆から理解されなくなってしまっている。現代の大衆に、どうして、経験と実験を基礎に冷静な判断力と論理的推理力をもってひとつの法則を発見する喜びなど理解されえようか。そのような理解の前に、現代の大衆は、〈科学的〉を標榜する似非科学や、文字通り非科学的な魔術的な予言などの方を信じる方が早いであろう。現代の大衆は、本来の科学的精神とは思惑の違ったところで動いているのである。

科学は現代文明をつくりあげた大きな力であったが、しかし、現代では、この科学さえも力を失ってしまう。どんなに普遍性を誇る科学でも、時代の力に支えられてはじめて発展しうるものである。科学も、巨大技術と連携しないかぎり、やがて、時代から取り残されたその他の学問と同じように、その発展をやめて化石化していくであろう。

消費されるマスコミと文明

新聞やテレビなど、いわゆるマスコミは、現代の大衆を動かす大きな力であるが、しかし、これは、もともと大衆によって消費されるためにのみ登場してきたものにすぎない。確かに、それらは、ありあまる情報をつぎつぎと大衆に提供するが、しかし、大衆は、実際は過剰な情報をすぐに忘れ、不消化のまま排泄していくだけである。彼らは、ただ退屈しのぎにそれらを見て、時間を費しているにすぎない。そして、実際、新聞やテレビの報じる世界の情勢など、大衆にとっては実のところどうでもよいのであって、彼らは、ただ、毎日目先の生活に埋没しているだけである。大衆は、相変らず自分と自分の目のまわりのものにしか興味を示しはしない。しかも、社会の大部分をそういう大衆が占めているために、新聞やテレビも、ますます大衆の目先的興味に迎合していくようになる。このようにして、それらも消費されていくのである。

現代の巨大な物質文明、これとても、過去二百年間の先人の長い努力の積み重ねによって出来上がってきたものである。ところが、この文明が自動的に生み出した大量の大衆は、それに対して、この文明を、初めから与えられたものとして、いわば第二の自然として育ってきた。そのため、彼らは、すでにつくりあげられたこの文明の恩恵をただ利用していくことに夢中になるだけである。現代の大衆は、ちょうど子供がおもちゃを扱うように、現代の文明の利器を使いこなすだけである。かくて、この現代の物質文明も、あたかも放

蕩息子に食い潰されていく遺産のように、次第に消費され、やがてその創造力を失っていく。そして、ちょうど古代ローマ文明がそうであったように、現代の文明も、このように絶えず使い尽されていくことによって、大地の底に埋もれ、滅び去っていくのかもしれない。現代の文明は限りない欲望の氾濫によって出来上がってきたのだが、それは、また、それが生み出した同じ原理によって、つまり大衆の原理によって滅び去ってもいくのかもしれない。

6　大衆と価値の低落

教育の低落

欲望の氾濫する現代の世界では、大衆があらゆる場所に侵入し、その価値を引き下げる。本来は彼ら自身にはふさわしくないところへ、現代の大衆はいつも破壊的に介入してきて、そこを占拠してしまう。

例えば、大学の大衆化という現象は、この無資格者の侵入による低俗化現象のひとつの現われである。事実、現今では、誰もが競って、自分達の資質を顧みることなく、一様に大学にやってくる。しかも、彼らは、大学に何かを求めて入学してくるわけではなく、ただ皆が行くから行くという平均人特有の考え方で入学してくる。確かに、彼らには、これといった目的はなく、ただ他人と同じだという安心感を得るためだけのようにみえる。今日の大学が、まるで目的喪失の愚者の天国のような様相さえ呈しているのは、ひとつにはそのためでもある。

かくて、このように、本来は資格を欠いている者が大量に大学に進出してくる結果、次第に教育や研究の水準が低下し、大学一般の質が低下していく。それどころか、ここでは、無資格者が場所がらも心得ず押しかけ、凡庸の勝利を謳歌しているのである。大衆の自己はひとつの欠如態であって、しかも、欠如を欠如とも意識していないから、もはや充実を求めることがない。真理への憧憬の念を喪失した大衆が、まるでローマ時代の蛮族のように真理の場に押し寄せてきているというのが、今日の大学の現状である。そして、そのようにして、凡庸者がひとかたまりになって、学問や教育の高貴さを引き下ろし、低い方に平均化していく。今日の文化的水準が低下し、均一化されてきたのは、およそこのようにしてであった。

このような現象は、単に大学だけにかぎらず、現代世界では、政治でも、社会でも、教育でも文化でも、様々の分野に見られる。場所がらもわきまえずに、大衆が様々の場所に大挙して踊り出てきて、ちょうど悪貨が良貨を駆逐するように、それぞれの場所の精神的秩序を破壊し、これをないがしろにしてしまう。現代では、本来秩序ある精神の支配する領域が、大衆の原理によって侵蝕され、支配されてしまう。そして、国家や社会や文化が、およそ謙虚さというものを失った大衆の専制の下に置かれてしまうのである。氾濫する欲望によるあらゆる場所の支配は、実際には、このようなしかたで行なわれる。〈大衆の原理〉

が〈世界の原理〉になってしまったのである。

精神なきエリート

このような世界では、エリートも大衆化する。例えば、現代のオピニオンリーダーと称する新聞人などが、何ごとも国家や政治の責任にして、自分達自身の責任を問わないのはその例である。

かつては、人を指導すべき立場にある者、真のエリートは、全体のあるべき姿の方から自己を律するのでなければならないと考えられていた。そして、指導さるべき立場にある民衆の方でも、自分達の上に立つ者に対して、それ相応の権威と名誉を認め、尊敬もしていた。ところが、現代では、このような秩序がない。今日では、真のエリートはそれにふさわしい指導すべき地位を追われ、そのかわり、本来なら指導さるべき立場にある者が逆に指導的立場に就き、大衆社会のエリートとなっている。エリートと大衆の区別が不明確になり、適材が適所にいなくなったのである。

例えば、今日の政治家は大概大衆の支持によって選ばれているから、彼らは大衆の代弁者にすぎず、必ずしも、国家全体の立場から国家を治めようとはしない。さらに、知識人も、ただ自己の専門にのみ閉じ籠って社会全体のことには無知な一種の知的技術者か、そうでない場合は、逆に、時代への迎合を事とする阿世の徒に堕してしまっている。確かに、官僚にしても、医者にしても、教師にしても、かつては社会の指導的立場にあり、それゆえに、それだけの義務と責任を背負っていた者達が、今日では自己や組織の利益のことだけしか考えていないようにみえる。労働者の味方だと称して労働組合の頂上に立ち優雅な生活をしている労働貴族なども、現代の精神なきエリートの典型であろう。

現代の世界、この欲望の巨大な機構のもとでは、このような人々があらゆる場所に侵入し、ひとつの巨大な塊となって出現してきた。そして、本当の意味で指導的立場に立つ資格のある者を圧殺してしまった。かつてまだ精神の生きていた時代にはあった指導する者と指導される者との〈秩序〉が逆転してしまったのである。

文化の低落

十九世紀以来、いわゆる近代化が始まってからというもの、普通教育の普及と印刷術の発達とともに、文化の世俗化とその水準の低落は加速度的に進行してきた。しかも、それは、凡庸な大衆が凡庸のままでより高度な文化の場に侵入し、それに介入してくることを可能にした。実際、普通教育の普及は誰もが読み書きができるようにし、印刷術の発達はどんなものでもすばやく手に取って読めるようにしたが、しかし、このことは、大衆をより賢明にすることにはならず、むしろ、断片的な知識を詰め込んだ大衆を大量に生産することにもなった。そして、それは、大衆がより上位の文化の場に進出することを可能にし、その結果、文化の低俗化をもたらしたのである。大衆が高貴化するどころか、逆に、高貴なものが大衆のレベルに合わせて低俗化しただけだったのである。

例えば、出版界の現状を考えてみても分かるように、普通教育の普及の結果は、週刊誌をはじめ、低俗なジャーナリズムや大衆小説、ハウツーものなど、大衆向けの出版物の大洪水であった。印刷技術の発達とマスメディアの進歩は、このような出版物を大量生産し、大量の大衆に提供するとともに、大衆によるそれらの大量消費を可能にしたのである。実際、大衆が介入することによって、文学でも、言論でも、思想でも、概して文化一般が興味本位のものになり、奇抜なものや、際物めいたものや、俗受けするものばかりが流行し、もてはやされるようになった。また、出版側の編集者や企画者の方でも、いつも大衆受けすることだけを考えるようになり、そのうちやがて、高いものと低いもの、本ものと贋ものを見分ける感覚を失っていった。そして、ただ大衆受けし名が通ってさえいればよいと考えるようになった。彼らもまた大衆化し、もはや文化に対する責任をもたなくなってしまったのである。そのため、より高度なものは顧みられなくなり、出る幕がなくなる。今日、本屋に行くと、低級な出版物ばかりが山と積まれ、幅をきかせ、程度の高いものは埃をかぶって本棚の片隅に肩をすぼめて隠れているのは、そのためである。この状況をみると、大衆による文化の引き下げが、どれほど凄まじいものであったかが分かる。現代では、大衆が文化の支持者になってしまったから、当然のことではあるが、文化は大衆に諂って極度に低俗化したのである。

事実、大衆小説が偉大な文学をはねのけて氾濫し、大衆小説家がはびこりだしたのも、このような文化の大衆化を背景にしている。文学にあっても、大衆は、その感情をつぎつぎとくすぐってくれるものを退屈しのぎに読み漁るから、この大衆の氾濫する時代には、大衆文学者が、いかにも偉大な文学者ででもあるかのようにもてはやされる。文学者ばかりでなく、評論家や学者、芸術家など、一般に文化人の世界で、育ちの悪い教養俗物ばかりがはびこり、いかにも現代の賢人のような顔をするようになるのも、このような時代においてである。

少数者の抹殺

大衆が様々の場に侵入してくることによって、価値ある文化が引き下げられてしまうこのような時代にあって、さらにそれ以上に危険なことは、そのことによって少数者が抹殺されてしまうことである。実際、このような世俗化の蔓延する世界では、実権は、事実上多数の凡庸な者、つまり大衆に握られてしまっているから、もはや少数の非凡な者の出てくる幕がない。彼らが生かされる場所がすでに奪われてしまっているのである。少数の非凡な者が多数の凡庸な者を指導するとき、ようやく社会は有機的に作動するが、近代という時代は、この秩序を無視し、自らの資質も考えずに皆が天才のまねをして上に登ろうとした時代であった。だが、その結果は、高貴なものの引き下げと非凡の圧殺にすぎなかった。

近代教育は、一般に、九十人の凡庸を高めようとして逆にその資質を損ない、同時に、九人のエリートと一人の天才を踏みにじってきた。文化の低俗化の進行するところにあっ

て、これら近代教育の子等は、たとえ凡庸でも皆で力を合わせれば何ほどかのものが創造できると思って、絶えず寄り集って談合する。しかし、その結果は、いつもどれほどのことも創造できず、ただ皆が同じであることを確認し合うだけに終る。

しかも、現代の大衆は、自分達をおだて自分達におもねる者に敬意を表するから、ただ単に大衆の偶像にすぎない者が、現代ではまるで天才のような扱いを受ける。かくて、この世は、凡庸の勝利を謳歌する平均人の狂騒に満ちることになったのである。今日の社会は、大衆が大衆に学び、大衆が大衆を導く大衆専制の社会なのである。

大衆の氾濫する現代にあっては、このようにして高貴なものは受け入れられず、文化にしても、政治にしても、社会にしても、どこでも低俗が崇拝され、時代はただ堕落の一途を辿る。かつての民衆は、高貴なものに対して敬虔であり、そのことによって自らも高貴さをもちえたのだが、今日の大衆は、自らの尺度からすべてを計るから、高貴なものを排除してやまないのである。

現代では、大衆は一団となって様々の場所に押し寄せ、そこを支配し、すべて高貴で偉大な者を虐げる。ところが、そうであるにもかかわらず、かつての正統精神を受け継ぐ者のうちには、そのことを理解せず、まだなお正統精神の可能を楽観的に信じている者がいる。彼らは、己が足下に堕落の軍団が押し寄せてきているというのに、なおまだやすしやすしと言う。かくて、高貴な精神は、正統精神からも見離され、彼は、ただ大衆に対して精神の怒りを発するのみとなる。しかし、高貴な精神は、この自らの怒りに焼き尽されるように、この低劣なものとの戦いに敗北する。そして、彼は世界から孤絶し、一個の単独者となって沈黙する。善美なものに自らを従わせ、偉大なものを創造しようとした高貴な精神は、一個の単独者となって滅ぶのである。

欲望の機関としての国家

1　欲望の調整機関と統制機関

経済によって規定される国家

近代国家は、その形態がどのようなものであれ、生産性の増大と国民の生活水準の上昇を目指す国家であり、資本主義と共産主義は、それを実現する方法の両極である。だが、資本主義にしても、共産主義にしても、これはどれも経済概念であり、このような経済概念によって国家形態が大別されるということは、「経済によって国家が規定される」という現代特有の特徴を表現するものだと言わねばならない。実際、現代の国家は、その大部分が経済によって動かされており、今日では、どこでも、経済政策の是非がその国の命運を決するほどである。

確かに、いつの時代でも、民生をいかに安定させ、経済をいかに運営していくかということは、国家の行く末を決定する重大な問題であった。しかし、かつての時代には、経済問題の解決の場合でも、単なる経済問題にのみ限定されてはいなかった。例えば、飢饉や洪水によって食糧が不足し、民心が不安定になったときでも、貴族制や封建制の場合なら、経済政策ばかりでなく、宗教や倫理によっても民心の安定を図り、国家の安寧に努めることが政治だと考えられた。それは、多分、近代以前の国家が、近代国家とは違って、宗教や倫理など、精神的なものによって規定されていたことの表現だとみてよいであろう。

それに対して、近代国家にあっては、経済問題から生じる社会不安などは、景気刺激策など様々の経済政策を策定することによって解決しようとする。それどころか、逆に、精神的な不安も、過剰な福祉政策などでも分かるように、経済によって解決しようとする。近代以前の国家と近代以後の国家では、世界観そのものが違うのである。

我が国の明治政府が、日本を一人前の近代国家として自立させるために始めたのは、産業を興し、生産を高め、国家の富を殖やすこと、つまり殖産興業、富国策であった。近代国家にあっては、経済の消長が即国家の消長とみられるほど、経済は国家成立の要であり、この成功不成功によって近代国家の死命は制せられる。資本主義的方法をとるにしても、共産主義的方法をとるにしても、あるいは、その中間形態をとるにしても、方法の違いこそあれ、近代国家は、経済をいかに成り立たせるかということに向けて、政治形態、社会形態、すべてが組織づけられている。確かに、今日ほど、経済の発展とか生産性の向上が、国家の大目標になったこともいまだかつてなかったことであろう。

十九世紀以後、世界の国々がつぎつぎと近代化の道を歩み出してからというもの、欲望の直接形態である経済が膨張し、それが宗教や文化ばかりでなく、国家をも侵蝕し、かくて国家は経済によって支配されるに至った。かつての時代には、欲望の直接形態としての

経済は宗教や倫理によって規制されており、そのため、今日のように、経済が無限に膨張するというようなことはなかった。

膨張する経済によって宗教も文化も国家も一様化され水平化されるという現象は、近代の避けることのできない運命であった。ここでは、国家も、国民の欲望の無限の氾濫に否応なく対処していかねばならなくなる。しかも、その場合、資本主義国家は、一般に、下から上ってくる国民の諸欲望をいかに調整するかに追われるようになり、他方、共産主義国家は、それをいかに上から統制していくかに終始するようになる。

圧力団体の横行

現代の高度資本主義国家での特徴的な事柄のひとつに、圧力団体の横行という現象がある。今日の資本主義国家群では、国会はもはや国権の最高機関ではなく、むしろ、実権は、様々の業界団体や圧力団体に握られているのではないかと思われるほどである。我が国でも、農協や医師会、労組や財界など、利益団体が自分達の様々の要求を政府にぶっつけ、政府は、それぞれ相反するそれらの要求を調整することを、その主要な役割としているかのような観がある。それどころか、今日の政党政治そのものが、現今では、利益代表の調整の場のようになってしまっている。古典的な政党政治の理念からすると、政党とは国政について意見を同じくする代議員の集まりであって、一部組織の単なる利益代表であってはならないのだが、今日では、そういうことは忘れ去られてしまっている。今日の高度資本主義国の政府は、国民の様々の欲望の調整機関にすぎず、相矛盾する様々の欲求の潤滑油的機能しか果たしていないのである。

本来、国家の理想は、むしろ国民の過度な欲望を規制し、国民一般の精神的向上を目指すということにおかれていなければならない。かつて、国家が、儒教や仏教、キリスト教やイスラム教など、宗教的倫理的なものと結びついていたのはそのためである。国民の向上と国家の安寧も、国民の精神的特性の完成なくしてはありえないと考えられたのである。しかし、今日の国家には、およそそういう高邁な理想はない。それどころか、今日の国家は、様々の圧力組織のいうことを聞いて歩く調整機関にすぎない。そのため、政府には、ただ、それらの諸要求を手際よく処理していくために、妥協と保身と変り身の早さを身上とする官僚や政治家が巣食っているだけである。

一般に、今日の自由民主主義を採用している高度資本主義国家には、国民の指導育成に携わることのできるような指導力をもった政府は存在しない。それどころか、この政府は、あちこちから出されてくる国民の過度な要求事項に絶えず振り回されているだけの統治能力の弱い政府だと言わねばならない。その点では、今日の民主主義国家の政府は、およそ強力な〈国家権力〉などと言えるものではない。むしろ、実質的な権力は、絶えず自分達の要求を勝ち取ろうとする一部圧力組織や官僚、マスコミなどの方に移乗してしまっているのである。

古典的な自由主義の考え方では、たとえ代議制民主制をとった場合でも、代表者は、選

挙民に迎合したり党派の圧力に屈したりせず、ただ、自己の見識や信念など個人の自由な意思にのみ基づいて意思決定を行ない、政治をリードしていくのでなければならないとされていた。しかし、今日の政治家にはそのような考えはなく、彼らは単なる選挙民の利益代表者であり、単なる党派の動員さるべき要員にすぎない。彼らは、大衆の欲望の代弁者にすぎないのである。

過保護国家

福祉国家は、現代の大概の高度資本主義国家なら、その理想としている国家像であるが、しかし、これも、現実には、国民大衆の過剰な欲望の充足に奔走しているだけの〈過保護国家〉にすぎなくなる。

ここでは、国家とは、自分達のありあまるほどの要求を何でも聞き入れてくれ、打出の小槌から金を出してくるかのように、何でもばらまいてくれるものと、国民は考えている。従って、この国の国民は、何でも過剰に与えられて育った甘えっ子のように、すっかり国家に依存しきって生きていくようになる。そのため、少しでも配分が少なかったりすると、今度は、駄々っ子がすぐ泣き出して親に何でもいうことを聞かせてしまうのと同じように、彼らは、国家に対して様々の圧力をかけて、無理に要求を呑ませてしまおうとする。しかも、政府の方は政府の方で、どこまでも子供を甘やかす母親のように、あるいは、駄々っ子に脅されて子供に迎合する無思慮な父親のように、どんな無理な要求でも唯々諾々と言うことを聞いてしまう。それどころか、福祉国家の政府は、国民の人気を勝ち取るために、よく気がつき何でも世話をしてくれるやさしい保母のように、赤子の養育から老人の扶養に至るまで、何から何まで自ら進んで面倒をみてくれようとする。そのため、福祉国家は、その過保護のゆえに、国家に甘えた自立心のない国民を生産してしまう。

この国では、国民は、国家を、まるで空気のように最初から存在するものと思い込んでおり、自分達一人一人が努力してつくっていくものとは考えない。むしろ、国家は、最初から何でも与えてくれ、何もかも保障してくれて当然だと、人々は思っている。かくて、この国には、なるべく働かずに遊んで暮らし、配分にだけは十二分に与ろうとする怠け者が充満し、人心は荒廃する。国民の精神的向上を目指すことが国家の理想であったとすれば、福祉国家は、むしろ堕落した国家だと言わねばならない。

だが、福祉国家たりとも、国民のありあまる欲求に応じて、無限に分け与えつづけるということはできるものではないから、結局のところ、それは、財政破綻を招いて崩壊していかねばならないであろう。古代ローマ帝国が、とめどなくパンとサーカスを要求しつづける民衆の享楽主義と、それに迎合する政治家達の指導性の欠如によって内部崩壊していったように、現代の福祉国家も、いずれはそれと同じ運命を辿るであろう。逆に言えば、父親が死ぬまで駄々っ子は直らないように、福祉国家にあっては、国家がそういう過剰な欲望に対処しきれなくなって滅亡するまでは、国民の無限の要求は続くのである。

自由よりも平等を重んじ、資本主義の社会主義化を図っていくというのが、今世紀の高

度資本主義国家の大勢であったが、福祉国家の理念はほとんどその最終形態である。しかし、本来の資本主義の精神からいっても、それは一種の堕落形態だと言わねばならない。ここでは、誰も自己の責任のもとに危険を犯してみようとはせず、何ごとも国家に頼ってしまうからである。だが、こうなるのも、また、現代国家が、もの分かりのいい父親のように、単なる〈欲望の調整機関〉に成り下がり、国民の指導育成を忘れてしまったことの当然の結果であったと言うべきであろう。

今日の国家は、まるで大衆の欲望の一大集積地のようである。だから、このような国家にあっては、大衆に迎合し、御機嫌を取ったり、諂ったりする者のみが力を得るだけである。ここでは、正義とはいかに多くの大衆の支持を得ているかだと考える〈量の正義〉が幅をきかせる。このようなところからは、単なる大衆の欲望の偶像にすぎないような政治家が祭り上げられるだけである。このような国家が、〈欲望の調整機関〉になってしまうのも当然である。現代の大衆社会では、圧力団体の横行にしても、過剰な福祉政策にしても、国家による欲望の理性的制御が困難になり、欲望は抑制なき暴走を続け、かくて、国家は、いわば〈盲目の意志〉とでもいうべきものによって支配されるに至ったのである。

欲望の統制機関

共産主義と資本主義は、ヨーロッパ近代の生み出した仲の悪い兄弟であるが、しかし、兄弟である以上、近代の物質主義という同じ親の血は引いていた。だから、共産主義国家も、資本主義国家同様、物資の大量生産の機構を目指して、絶えず生産性の向上を叫んでいた。その意味では、共産主義国家も、同じように世界史的な近代化の流れの中にあった。実際、共産主義国家も、旧秩序の破壊を通して、社会的平等を唱え、普通教育を実施し、産業を育成し、軍備を強化し、国民の生活水準の上昇を目指していた。そのかぎり、共産主義国家も、近代国家として、国民大衆の欲望の無限充足を約束して出てきた国家である。とすれば、これも、また、同じような〈欲望の機関〉としてみることができるであろう。

しかし、この場合、共産主義は、資本主義とは違って、このような国家構築を計画経済によって実現しようとした。ここでは、少数の指導者によって、上から様々の国家目標が計画され、人民はそれに基づいて動かされる。そのために、共産主義国家では、その平等主義にもかかわらず、いつも、指導する少数の階級と指導される多数の階級に分かれ、経済は一般に統制経済になってしまった。この国家は、〈欲望の統制機関〉になってしまったのである。

共産主義は、その理念とは逆に、現実には、〈抑圧された人民の解放〉という名分のもとに、少数の革命家達が多数の人民を統制しようとする権力思想であった。そのため、共産主義にあっては、少数の指導者群による強力な支配体制が出来上がり、その国家機構は、自由を許さぬ強力な権力機構になってしまう。だから、そのようなところから、〈人民の指導者〉という名のもとに、権力を一身に集中させた〈独裁者〉が出現するのも、不思議なことではない。かくて、共産主義は、一人の独裁者とそれを取り巻く少数者による全体主

義的独裁政治となったのである。

共産主義は、本来は、分配を平等にし階級や貧富の差を無くす思想だったのだが、現実には、その全体主義的独裁主義のために、階級差も貧富の差も生じる。たとえ仮に、人民大衆の間では平等であったとしても、この場合は、むしろ低い方に平均化されるだけであって、人民は一種の国家の奴隷のようになってしまう。共産主義国家は、このようにして、強力な〈欲望の統制機関〉になったのである。

資本主義をとるにしても、共産主義をとるにしても、国家が現代ほど巨大な組織になったことは、いまだかつてなかったことであろう。どの体制をとっても、現代の国家は巨大な官僚機構を擁した組織国家になる。ここでは、その国家規模が大きくなればなるほど、ただ形式的な法律や規則のみが支配し、組織は硬直化して、身動きがとれなくなってしまう。政治家にしても、官僚にしても、ここでは、皆、巨大組織の単なる歯車のように動きまわっているだけである。確かに、現代の国家は、機械仕掛の巨大な〈欲望の機関〉と化してしまっている。限りなく氾濫する現代の欲望は、国家をそのような巨大な〈欲望の機関〉につくり変えたのである。

2　欲望の自由、欲望の平等

行きすぎた自由

十九世紀以後の〈現代〉を指導した理念は、〈自由〉と〈平等〉のイデオロギーであった。人々は、この自由と平等のイデオロギーを振りかざして、旧来の秩序を破壊するとともに、〈新しい社会〉を形成していった。今日の自由民主主義社会はその典型である。ここでは、国家の主権は人民にあり、誰もが自由であり、平等である。

確かに、この国の国民は、多くの〈自由〉が許されている。思想・信条、言論・出版、集会・結社の自由、つまり表現の自由が許されており、また、貧困や抑圧、隷属からの自由も保障されている。この国では、人々は何でも言うことができ、いかなる束縛からも解放されている。

しかし、いつの世も、ものごとは極端から極端に走る。特に現代は〈適度〉という感覚を忘れ、何ごとにつけ度外れになる時代であるから、自由民主主義のもとでも、この〈自由〉が行きすぎてしまう。つまり、あまりにも自由が叫ばれると、自由の名のもとに、人々は欲望の赴くままに勝手気儘なことを言い、行ない出すのである。ここでは、どんなことでも自由に放任されているから、人々は、様々の欲望を十二分に満たして生きて行こうとする。かくて、この社会は、皆がしたい放題のことをばらばらにしている無統制な社会となる。〈自由〉は単なる〈欲望の自由〉になり、無秩序の代名詞になってしまうのである。

そして、そのような自由の観念が行き渡ると、人々はもはや我慢というものができなくなり、倫理的に間違ったことでも、時には法に触れるようなことでも、もっともな口実をつけて平気で行なうようになる。そればかりか、そのようなほとんど無制限に近い自由の

許されている社会では、国家によって少しでも規制が加えられたりすると、人々は一団となって「弾圧だ」と言って憤激し、一斉に国家を非難したりする。

このような〈欲望の自由〉を主張する国民が主権をもっている今日の民主主義国家は、多種多様の無統制な欲求で充満することになる。そして、民主国家の政府は、あたかも暴君の気まぐれに右往左往している臣下のように、主権者である国民の気まぐれな要求の調整に追われているだけである。現代の民主主義国家が単なる〈欲望の調整機関〉となってしまうのは、大体そのような有様においてである。

実際、この国では、政治家は、ちょうど暴君に諂う臣下のように、多くの権利を主張する国民に諂い、そのいうことを聞く。なにしろ、国民は〈主権〉をもっているのだから、それにおもねることなしには政治家にもなれない。この国で賞讃される者は、いかにも大衆に好意をもっているといった顔つきをして、まるで商品を売り出すように自分自身を売り出し、笑顔でなんでもいうことを聞く政治家である。

本来の統治は、国家全体への見通しをもって、その長期的全体的立場から自己を律することのできる指導者が国民をリードすることによって、はじめて成り立つものである。ところが、民主主義のもとでは、国民を説得して真の統治を行なっていく資格のある指導者は、目先的にしか動かない主権者には受け入れられず、生かされる場所を奪われる。それは、ちょうど、暴君に諫言をする忠臣がえてして受け入れられないのと同じである。受け入れられるのは、ただ、主権者である国民の御機嫌をとって要領よく立ち回ることしか知らない無節操な政治家だけである。しかし、国民の欲望は多種多様だから、ある時はあちらのいうことを聞き、ある時はこちらのいうことを聞いて歩くような政治家では、ただその場かぎりの場当り的な政治が行なわれるだけである。民主主義が、いつも、その日暮しの衆愚政治に陥ってしまうのはそのことによる。

今日の民主主義のもとでは、そのように〈欲望の自由〉が蔓延するから、国民と国民の間でも、互いの欲望がぶつかりあって、互いにいがみあうようになる。ちょうど一本の丸太の橋の上で出会った二匹の山羊のように、互いに自分達の権利を主張して、譲り合うことを忘れてしまう。もしも政府がその調整に失敗すると、ちょうど互いに喧嘩をしてついには両方とも川に落ちてしまう二匹の山羊のように、国家は統治能力を失う。

人間は、もともと、共同体を営むことなくしては生きていくことのできない生きものであり、しかも、この共同体全体の幸福なくしては、個人の幸福もありえない。ところが、民主主義社会では、皆が互いに自由を主張してやまないから、国民の間の精神的紐帯は切れ切れになってしまう。そのようなところでは、一般に、国民は為政者に対して不従順になる。ここには、為政者と国民の間の信頼関係はなく、為政者は、国民の目をいつも気にしておどおどするようになる。それはすでに無政府状態に近い。

自由放任主義教育

現代の民主主義のもとでは、教育にあっても、個性尊重主義が叫ばれ、子供の主体性が

重んじられるために、教育は自由放任主義になってしまう。つまり、子供には無限の可能性があるのだから、いらざる強制はせずに、適当な条件だけ整えて、あとはそのまま自由に放任しておきさえすれば、個性は自然に伸びていくという考えである。ここでは、子供を強制することがまるで罪悪ででもあるかのように嫌われる。そして、悪くすると、子供の自主性を重んずるというもっともらしい理由を隠れ蓑にして、教師達は、自分達の無能や無知を胡魔化してしまおうとするようなことにもなる。

また、今日の民主主義教育にあっては、生徒の方でも、少しでも強制めいたことが行なわれると、これを嫌い、限りない自由を主張して、好き勝手なことをやり出そうとする。しかも、教師の方でも、生徒に権威主義者だと思われ嫌われるのがいやだから、生徒の御機嫌をとって、したい放題のことをさせる。かくて、民主主義教育のもとでは、子供は損なわれ、結局のところ、社会に対する義務感などというものもない野放図な若者が出来てしまう。あまりにも自由を重んじすぎたために、ただ放縦と無統制と無秩序という精神的無政府状態のみが残ったのである。

一般に、民主主義社会では、〈自由〉の名のもとに、およそ社会に対する義務というものは忘れ去られ、ただ権利のみが主張される。そして、国民一般が、秩序も必然性もない放縦な生活を営んでいく。本来、〈自由〉とは、いかなる圧力があろうとも、自分の良心と信念に従って何ものにも屈せず自立していく精神を意味していた。ところが、ほとんど圧力らしきもののない民主主義のもとでは、〈自由〉は、かえって、したい放題のことをするという〈欲望の自由〉に成り変ってしまうのである。

行きすぎた平等

今日の民主主義国家にあっては、また、様々の面での〈平等〉が認められている。ここでは、思想信条の違い、社会的身分や出身の違い、貧富や能力や性別の違いによって差別されるということはなく、誰もが等しく政治に参加する権利をもち、誰もが等しく教育を受ける権利をもっている。

ところが、現代の民主主義のもとでは、〈自由〉の観念がそうであったように、〈平等〉の観念もまた行きすぎてしまう。つまり、あまりにも平等が叫ばれると、平等の名のもとに、人々はいかなる区別も認めなくなる。特に、自分達よりも多くの富や財産をもっている者があれば、それを妬み、自分達にも一律平等に分け前を与えるように要求し、およそ貧富の差というものを認めようとしない。よく働く者にも怠け者にも一律平等の配分が与えられるようになるまで、平等を追求してやまないのである。さらに、また、男女の間でもその役割の違いさえ認められず、両性とも平等でなければ人は満足せず、少しでも不平等があれば「差別だ」と言って腹を立てる。今日の民主主義社会では、様々の面で完全な平等が求められるのである。

本来、平等とは、およそ思想・信条、身分・出身、貧富、能力、性別など、社会的、経済的、先天的な区別があるにもかかわらず、人は、神や法の前では差別されることはない

という意味であった。ところが、今日の民主主義にあっては、この意味が履き違えられ、逆に少しでも区別しようものなら、極度に反撥されるのである。

この一律の平等は、今日の民主主義社会では、特に弱者が好んで主張する。彼らは、自分達の能力や性状を考えようともせず、平等のイデオロギーを振りかざして、不平不満をならしてやまない。だが、実際には、彼らは、このようにして分不相応な分け前を取ろうとするのだから、ここで主張される〈平等〉は、むしろ弱者の装う偽善だと言うべきであろう。それは、弱者が強者に対してもつ嫉妬心から出てきており、平等のイデオロギーは、この嫉妬心の装う正義に他ならない。今日の民主主義社会で主張される平等の観念は、裏に妬み心を秘めた〈欲望の平等〉なのである。「自分達は虐げられてきた」「支配者は自分達を搾取している」というようなもっともらしいイデオロギーを唱えながら、民衆を煽動し、逆に権力を握ろうとするデマゴーグが登場するのも、このような悪しき平等思想のもとにおいてなのである。

だが、現代の民主主義社会では、この平等のイデオロギーには誰も反対することができない。そのため、ここでは、能力のある者、人の上に立つ資格のある者、高貴な者や天才など、他よりも秀でた優秀者が、その絶対平等主義のために圧殺されてしまう。民主主義社会は、自称〈弱者〉が、その平等主義を振りかざして、逆に〈強者〉になり、真の強者を虐げるという秩序の逆転した世界なのである。民主主義のもとで求められるこの悪しき平等は、有能なものにも無能なものにも一律の平等を求める考えなのだから、これはむしろ不平等、あるいは不公正だと言わねばならない。

平均化された社会

このように、限りない〈欲望の平等〉を主張する国民が主権をもっている今日の民主主義国家では、為政者の方でも、あたかも一般国民と同じであるかのように振舞わねばならない。少しでも一般国民より上位に立とうものなら、妬ましい目で見られるから、ただひたすら低姿勢に徹して、国民に媚びるのである。

だが、そのような為政者のあり方は、為政者として当然もたねばならない国民以上の責任をむしろ放棄し、それから逃れようとすることに等しい。人間には、いつも全体をみてそれへの責任から自己を律しようとする少数者と、全体のことなど考えずにただひたすら自己の利益のためにのみ動く多数者と、二種類存在する。前者が指導者として統治を行ない、後者が指導されるのが望ましい。ところが、民主主義国家のもとでは、主権は多数者にあり、しかも、多数者は常に善であり、絶対である。為政者は、むしろ、そういう多数者の愧儡にすぎない。そのため、その政治は、誰一人として責任らしい責任を取ろうとせず、全体のことの忘れ去られた盲目な政治になってしまう。民主主義は、目先的な民衆のいわば専制独裁政治なのだから、このようなところからは、全体に対する責任をもった真の統治者は出てくることができない。民主主義国家は、このようにして、様々の区別が希薄化され、低い方に平均化されたのっぺらぼうな国家になるのである。

このような平等主義のもとでは、教育にあっても、教師と生徒は平等だということになり、そのため教師は逆に生徒に媚び諂う。そして、教師は、そのことによって、教師としての威厳を自ら失ってしまうばかりか、教え導く責任さえ放棄してしまうことにもなる。生徒の方は生徒の方で、教師と平等だというので、教師をもはや教師として尊敬するということをしなくなる。そのため、少しでも優劣を決めたり競争させたりすることは、差別につながるといわれて極度に嫌われる。かくて、このような平等教育のもとでは、教師も生徒も皆含めて、凡庸同志の慣れ合いのようになってしまうのである。

一般に、この社会では、親は子供と平等だということになり、子供の機嫌をとって甘やかし、年輩者も若者と平等ということになり、何ごとにつけ若者に遠慮する。そのようにして、親や年輩者は自ら権威をなくしてしまう。

〈欲望の平等〉のもとでは、事情は大体以上のような有様である。

独裁者の登場

このように、〈欲望の自由〉と〈欲望の平等〉のはびこる現代の民主主義のもとでは、人々は、〈自由〉の名のもとで勝手気儘なことを行ない、〈平等〉の名のもとでより多くの配分を得ようと狂奔する。自由の観念も、平等の観念も、本来の意味を離れて、極端な方向に行きすぎてしまうのである。〈国家〉というものは、究極的には目に見えるものではなく、国民の責任分担と義務の遂行によって、わずかにそれらしき共同体として成立するものであってみれば、このような現代の民主主義国家の有様は、むしろ、国家が共同体として崩壊しつつあることを意味すると言わねばならない。

特に、〈欲望の自由〉のはびこる民主主義国家においては、国家の防衛が困難になる。ここでは、国民は、相変らず思い思いのことをしており、戦う自由も戦わない自由もあるから、およそ統一をもたない。その上、防衛に関しても、いちいち議会に諮り、地方の了解を取りつける必要がある。その点では、むしろ、独裁者のもとに完璧なほどの指揮命令系統の行き渡っている全体主義国家の方が、国家の防衛には適しているし、他国の侵略においてもより勝っていると言わねばならない。それは、ちょうど、古代ギリシアにおいて、民主制をとっていたアテナイよりも、絶対専制をとっていたスパルタの方が軍事的には勝っていたのに似ている。

さらに、様々の欲望の充満する今日の民主主義国家にあっては、民衆の欲求は尽きることがないから、それが少しでも満たされないと、民衆の不満はますます募ってくる。その上、民主主義国家の政府は決断力に乏しいから、民衆はやがて苛立ってきて、逆に強力な指導者を求めるようになる。そうすると、そのようなところから、民衆のあらゆる不満を吸収して、民衆にありとあらゆることを約束し民衆の人気をさらっていくデマゴーグが登場し、それが民衆の絶対者に祭り上げられるようになる。そして、民衆の過大な欲求がこのデマゴーグ一身に仮託され、偶像化される。かくて、そのようにして、彼は、全く民主的な手続でもって、だらしない政府に代ってあらゆる権力を握り、民衆の名のもとで一個

の独裁者になってしまうのである。しかし、いかなる独裁者たりとも民衆のすべての欲求を満たすことはできないから、彼は、一旦権力を握ると、一転して、今までの約束はすべてきれいに忘れてしまい、今度は逆に民衆を弾圧しだす。〈自由〉は、自由を破壊する者をも、〈自由〉の名のもとに容認してしまうのである。

このように、今日の民主主義国家は、その頽落した自由のゆえに、外からも内からも全体主義に侵入され、〈解放〉されやすい体質をもっており、全体主義の拡大侵蝕にとって最もよい温床になってしまう。民主主義は、まさにその原理によって自ら没落する可能性をいつでももっているのである。そして、気のついたときには大切な〈自由〉を失ってしまう。

民主主義においては、個人個人の自由や平等があまりにも許されすぎているから、結局、人々は全体を見失ってしまう。その間隙を縫うように全体主義が侵入してきて、今度は個人の自由を過度に踏みにじってしまうのも不思議なことではない。何ごとにつけ、ものごとは、行きすぎると逆の方向に転化してしまうものである。

現代国家の将来

現代国家は、自由主義国家にしても、全体主義国家にしても、欲望の肥大化した巨大な怪物のようである。ヨーロッパの十九世紀以来、近代化の過程の中で生れた自由民主主義や国家主義や共産主義などは、非ヨーロッパにおいても、それぞれの伝統に合わせて変容されながら、〈近代国家〉として様々の国家形態を生み出してきたが、どの国家形態も、それ以前の国家形態からは比べものにならないほどの規模と組織をもつに至った。しかし、それらは、どれも、欲望の直接形態たる経済をいかに合理的かつ大規模に動かすかという観点から出来上がっていた。だからこそ、それらは、どのような異なったあり方をとるにしても、〈欲望の機関〉には変わりはないのである。自由主義国家は、〈自由〉と〈平等〉の原理そのものによって、欲望の充満する巨大な怪物国家に成長したし、全体主義国家は、国家主義をとるにしても、共産主義をとるにしても、専制独裁の巨大な権力機構をもつ怪物国家に成長した。

現代の怪物国家にあっては、国家が共同体として成立するための全体と個の均衡が崩れ去る。自由主義国家では、過度に個が重んじられるために全体が忘れ去られ、国家は、個々のエゴイズムの一大集積地のような有様を呈する。それに対して、全体主義国家の方は、逆に全体の方が過度に重んじられるために、個の方が抹殺されてしまい、そのため、この国家は、恐怖の支配する途方もない権力機構になってしまう。近代という時代は、節度ある均衡の失われた時代だったのである。

いつの時代でも、国家とは、国民のつくる一種の芸術作品であって、国民の性状を如実に表わすものである。国民が健全な節度を保ち向上心をもっているときには、節度ある健全な国家が出来るし、国民が節度を失ってしまっているときには、無節度な怪物国家が出来てしまう。現代は、人間の欲望が精神の規制を失って無限に氾濫し、巨大な〈欲望の体

制〉を築き上げた時代であったが、現代の怪物国家は、この欲望の巨大な体制の政治的表現だと言うことができるであろう。

現代世界にあっては、国家と国家の関係も、〈欲望の機関〉と〈欲望の機関〉の厳しいぶつかり合いになる。今日の国際社会での様々の戦争や摩擦も、その背景には、いつも熾烈な経済的闘争のあることは疑うことができない。前世紀以来展開されてきた植民地の争奪戦や、そこから生じた第一次・第二次大戦をはじめとする二十世紀の様々の国家間の闘争をみれば分かるように、ここ二百年の世界史を動かしてきた原動力は、諸国家のあくなき国益の追求であった。資本主義体制をとるにしても、共産主義体制をとるにしても、体制の如何にかかわらず、諸国家がナショナリズムと結びついたのはそのためである。確かに、各々の国は、それぞれの大義名分を振りかざして相争うが、現実はとどまることを知らぬ国家エゴの追求であったことに変りはない。

例えば、第二次大戦以後展開されてきた〈冷たい戦争〉における資本主義に対する共産主義の挑戦なども、そのイデオロギーの衣を剥いでみれば、第一次・第二次大戦がそうであったのと同じように、〈持てる国〉に対する〈持たざる国〉の国家エゴの挑戦だったともみることができる。現代世界では、ちょうど鼠同志が共食いをするように、国家と国家が、軍事的、平和的様々の手段を用いて、熾烈な闘争を行なっている。これも、また、この現代世界が、地球的規模において巨大な〈欲望の機関〉と化していくためのひとつの過程だったとみることもできよう。

世界は、資本主義にしても、共産主義にしても、あるいは、自由主義にしても、全体主義にしても、いかなる国家体制も、巨怪な世界的一様化に向かって、この地球上に巨大な〈欲望の体制〉を築きつつある。しかも、それは、諸々のものが平均化された得体の知れない混合の世界であって、やがて、それは、もはや資本主義とも共産主義とも、自由主義とも全体主義ともつかぬ、今までの概念では捉えきれぬ奇怪なコンクリート文明となることであろう。

実際、その兆候は、今日の二十世紀後半の現象においてすでにみられることでもある。例えば、高度資本主義、あるいは自由主義国家群は、その欲望の途方もない肥大化によって、すでに相当部分が社会主義化している。共産主義国家、あるいは全体主義国家群も、なお同じく限りなき欲望追求の世界に変りはなく、そのために、むしろ資本主義的市場原理を導入して、その低い生産性を上げようと努力しているのが現状である。だから、共産主義国家の国民も、そういうしかたでその欲望が刺激されていけば、やがて、資本主義国同様、その欲望を過度に肥大化させていって堕落し、結局のところ、この国家もそのタガが緩んで、その統制力を失っていくということも十分予想される。

このようにして、共産主義も含めて、様々の途上国は、先進資本主義国がすでに先取りしている平均化と混合の堕落状態に向けて突き進んでいく。そして、あの古代ローマ帝国の末期がそうであったように、これらの国でも、享楽主義的気分や無政府的気分がはびこり、大衆の欲望は肥大化の一途を辿って、国家の統治能力は失われていくであろう。

膨張する体制

1　膨張の諸相

欲望の無限増大

人間の欲望は尽きることがない。人間の欲望には、ある種の無限性むしろ無際限性が宿っていて、ひとつのものが満たされるとまた次のもの、それが満たされるとまた次のものと、欲望はどこまでも自分自身を満たしていこうとする。それは、欲望自身に備わっている意志であって、自分自身でもどうすることもできない。

現代の体制、この〈欲望の体制〉が無限に膨張していこうとするのも、それが、そのような尽きざる欲望に根差しているからであろう。何の制限もなければ、尽きざる欲望は無限に増大していこうとする。そういうとめどない人間の欲望の構造を、現代の〈膨張する体制〉は映し出している。

かつてまだ世界が有機性を保持していたころには、欲望は宗教や倫理によって程よく規制されていたために、無限に膨張するというようなことはなかった。ところが、現代の世界では、そのような精神の規制が失われたために、限りない欲望があらゆる外的世界を駆逐し、限りなく増大し、膨張していく。それは、経済をはじめ、国家や社会、宗教や文化など、あらゆる分野に氾濫し、ちょうど癌細胞が正常な細胞を破壊していくように、ひとつの秩序ある世界を破壊していく。そのため、現代では、本来精神の支配領域であったところのものが巨大な組織になり、しかも、それらが機械的に結合されてひとつの途方もない体制を築き上げるに至ったのである。

現代の世界、この〈膨張する体制〉は、一種の怪物、それも飢えた怪物に似ている。それは、自分のまわりのありとあらゆるものを食べ尽して、自ら肥大化していく。それが人間であろうが自然であろうがかまうことなく、どんなものでも自分の栄養にして、ますます成長していく。この欲望の怪物は、その肥大化に際限がなく、どこまでもとどまるところを知らず増長していく。もとはまだ卵の状態にすぎなかった怪物が、殻の破れるに従って、とたんに急成長を遂げたのである。それは、まわりの秩序を破壊し、それを自分の中に呑み込んで消化し、自分の細胞に変化させていった。そのようにして大きくなった欲望の怪物は、今日ではすでに世界全体をわがものとして支配するに至り、さらにそれにも飽きたらず、なお一層増長していこうとしているかのようである。

膨張する経済

経済の膨張は、〈膨張する体制〉の直接的表現である。産業革命以来、世界の経済は、物資の大量生産と大量消費を可能にする機構を目指して、飽くことなく膨張に膨張を重ねて

きた。十八世紀の終りごろ、ヨーロッパの片隅で、突如として、これまでとは全く違った産業の大変革が起き、生産力が急激に増大した。そして、それは、それまでの均衡のとれた経済構造を破壊して、その経済規模を一方的に拡大し、その容量を急速に増大させていった。

しかも、その勢いは、〈近代化〉という名において、堰を切った洪水のようにヨーロッパ中に波及し、さらにヨーロッパ以外の諸国にまで拡大して、その有機的世界を破壊していった。近代ヨーロッパというダムの堰が切られて、非ヨーロッパというまわりの森林や田畑にまで濁流が押し寄せてきたとも言える。あるいは、ヨーロッパという胃袋の中に近代産業という癌細胞が発生し、急速に自己増殖するとともに、非ヨーロッパという他の内臓にも転移して、その正常な細胞を破壊していったと言ってもよい。今日の経済は、自らの容量を絶えず増大させながら、そのことによって、また、自らの支配圏を絶えず拡大させてきたのである。そして、わずか二百年程の間に全世界を呑み込んで、これを支配し、一様化してしまった。

高度成長経済は、この産業革命以来の経済規模の膨張のほとんど最終的な飛躍だったようにも思われる。ちょうど、マラソン選手がゴール近くになって一気に速度を早めるように、終り近くにきて、その膨張のエネルギーを急激に爆発させたかのようである。そして、今日、この高度成長経済に遅れをとった国々は、ちょうど先頭集団に追いつこうとする第二集団のように、急速な経済成長を遂げることを目標に血道を上げている。今日進展しつつある高度情報化社会も、その延長上にあるとみてよいであろう。膨張する経済は、このような形で自らの支配圏を拡大していく。

高度成長経済は、工業を育成することによって農業生産を上げ、農業生産を上げることによってさらに工業を成長させ、また工業内部においても、その部分部分が相互に刺激し合うことによって、全体として自己増殖的に急速に成長していく。膨張する経済は、また、そのようなしかたで自らの容量を増大させていくのである。

膨張する経済は、国家、社会、宗教、文化、様々のものを呑み込み、それを支配下に収めながら、ますます膨張していく。ここでは、もはや、かつてのような均衡のとれた秩序ある経済は不可能である。近代の経済はもともとそれを否定するところから出発したのだから、このようなところで、かつてのような節度ある経済の持ち方を説いてみても無益であろう。

膨張する経済は、欲望の無限に氾濫する現代の体制の中核である。それは外の自然を資源化し、駆逐しながら膨張していく。なるほど、つねに叫ばれつづけている資源・エネルギーの危機は、この膨張する経済が限度を超えてあまりにも増大し、あまりにも自然を駆逐しすぎたことへの咎めではある。しかし、それにもかかわらず、膨張する経済は、多分、地球上のあらゆるところに資源を求めて膨張しつづけるであろう。

経済は欲望の直接形態であり、膨張する経済は欲望の無限に氾濫する現代の体制の直接的表現である。膨張する経済にはつきもののインフレーションは、この欲望がどれくらい

増大してきたかということを表わす指標である。今日の人々は、まるで胃拡張になった犬のように、どんなに多くの物量を与えても、いつまでも満足するということがない。インフレはこの尽きざる欲望の指数である。

確かに、デフレとか恐慌という経済の収縮現象はある。しかし、これも、生産せんとする欲望が消費せんとする欲望を上回ることから起きることでもあり、しかも、歴史の示すところでは、それは、次により一層経済が膨張していくためのいわば活力補給のようなものであった。

インフレーションも、デフレーションも、どれも経済規模の膨張に伴う軋みにすぎず、経済そのものが膨張していくことに変わりはない。ここ二百年間の世界経済の膨張過程は、なお、この現代の〈膨張する体制〉の直接的な表現なのである。

さらに、膨張するのは経済だけにとどまらず、経済の膨張とともに、官僚組織をはじめ政治組織が膨張し、社会の様々の組織が膨張する。これらも、また、それぞれの場において〈膨張する体制〉を映し出している。

膨張する都市と人口、そして共産主義

都市の膨張は、〈膨張する体制〉を写す鏡である。都市という鏡が、〈膨張する体制〉という大きな世界を写し取っている。都市は、かつてまだ一定の秩序のもとに有機的な区画を形成していたころから一変して、今日では、まわりの田畑を蚕食しながらどんどんと大きくなっている。そのような膨張に膨張を重ねていく現代都市の有様は、このまま大きくなっていったら一体どうなるのだろうと不安に思われるほどである。自らの高さを天空にまで伸ばすとともに、自らの広さを広大な原野にまで及ぼしながら、現代都市は自らの容量を増大させてきた。しかも、そのようにして出来上がった大都市は、膨張の力を、さらに津波のように他の都市に及ぼし、他の都市をまた膨張させていく。これは、精神の秩序が破壊され欲望のみが限りなく肥大化していくという現代文明の一般的性格を映し出している。実際、現代人は、この大都会の中で、限りない欲望追求の生活を飽くことなく営んでいる。まるで限りない欲望に押し拡げられるように、現代都市というソドムの街は、この地上で罰せられることもなく膨張していくかのようである。現代都市は、廃墟と化す道に差しかかるまでは、休みなく膨張しつづけるであろう。

人口の膨張は、この〈膨張する体制〉の原動力である。今日の人口は、まるでどこまでも繁殖していく細菌のように、自然の秩序を破って膨張してきた。この人口の膨張の力に押し拡げられるように、現代の体制そのものも巨大化してきたのである。現代の体制は、自らの膨張のためには、人口の膨張を必要としてきたとも言える。

近代化とともに、人口は、かつての有機的な世界の枠組ではとうてい収容しきれないくらいに膨張してきた。実際、この人口の洪水は、秩序ある枠組を打ち毀して溢れ出、より一層大きな枠組を要求してきた。大衆の氾濫と欲望の肥大化は起きるべくして起きたことなのであろう。大衆は秩序を無視して氾濫してきたから、その欲望の肥大化は、一個の巨

大な力となってあらゆるところへ影響を及ぼす。現代の体制は、そのような力に押し上げられて膨張してきたのである。

二十世紀の世界に顕著にみられた共産主義の膨張も、ナチズムとともに、膨張の体制の悪魔的な徴表であった。十九世紀のヨーロッパは、産業革命以来、資本主義と共産主義という相対立する二つの社会経済思想を生み出したが、どれも、それらは、以前の有機的な社会の秩序を破壊しながら、どこまでも自己の領分を拡大し、自ら膨張し拡散していこうとする共通の運命をもっていた。そのために、これらの社会経済思想は、ヨーロッパ世界だけにはとどまらず、必然的にヨーロッパ以外の世界にも拡大膨張していったのである。

十九世紀から二十世紀初めは、資本主義が特に目立ってこの世界史的膨張の波に乗ったが、二十世紀後半は、むしろ共産主義の方が主にこの役割を演じた。それは、まるで癌細胞のように、二十世紀後半の世界で自己増殖を繰り返してきた。いわば、十九世紀ヨーロッパの体内に、共産主義思想という癌細胞が、以前のヨーロッパ世界の崩壊とともに発生し、資本主義の矛盾という最適の環境の中で培養され、ついに、それは、二十世紀初めになって、ロシアという非ヨーロッパで顕在化、続いて東欧や中国、北朝鮮やベトナムへと転移し、ラオス、カンボジア、そしてアフリカや中東まで侵蝕して、その正常な細胞を破壊することに成功を収めた。また、癌細胞が思わぬところに転移したりすることもあるように、突如としてキューバのようなところに発生することもある。

この共産主義の膨張という現象も、また、あの十九世紀以来のヨーロッパ近代文明の世界史的膨張の一環としてあったと考えてよいであろう。そのように考えるなら、共産革命が、マルクスの予言に反して、資本主義の最も発達したヨーロッパ諸国に起きずに、ロシアをはじめ、資本主義の未発達な非ヨーロッパに好んで起きたという現象も、無理なく理解することができる。

2　膨張の限界

運命としての膨張

何ごとにつけ膨張すること、これは、かつての時代と今日の時代を区別する徴表であり、現代という欲望の氾濫の時代の最も顕著な特徴である。現代人はこれを〈進歩〉と呼んできたのだが、現代のこの巨大な〈欲望の体制〉は、その必然性に従って限りなく増大し、膨張していく。膨張は、この体制にとっては一種の運命であって、膨張することなくして、この世界は生きていくことができない。膨張していること、それが、この世界をわずかに生きたもののようにしているのであって、もしも膨張が止まってしまったなら、それは死ぬ。世界のうちに欲望が膨張していくというよりも、むしろ、現代というこの体制そのものが膨張なのであり、現代世界のあらゆるものが、膨張そのものを自らの〈世界〉としているのである。

現代の体制、この膨張の怪物は、今日ではすでに全地球上を限なく覆ってしまっており、

何人(なんぴと)も、この怪物の支配から逃れることはできない。たとえ、この膨張する現代文明を疑問視し、これが間違っていると叫んでみても、その叫んでいる者自身がこの怪物の中に住み込むことを余儀なくされているのだから、その叫びは無力であろう。それは、個人個人ではどうすることもできないひとつの運命なのである。

それどころか、現代の人間は、その大多数が、この膨張する怪物に奉仕する奴隷のように、むしろ自ら進んでこの運命に従っている。現代人は、この怪物の手となり足となって、この怪物をさらに大きくしていくことに貢献している。しかも、ここでは、これに貢献しているかぎりにおいてのみ、生存が許されるのであって、それの役に立たなくなった者は、一種の廃棄物のように打ち捨てられていく。

現代の体制のこの無際限な膨張、これが何故に起きたのかは不明である。なるほど、欲望の無限氾濫がそうさせているとは言えるかもしれないが、何がその欲望をして無限に氾濫させたのかはなお不明である。現代のこの怪物自身にも分かってはいない。これは、ただわけもなく無目的に膨張していく。その有様は、まるで見えざる悪魔の手によって動かされているようにさえみえる。

膨張の限界

近代は、人間が自然から与えられた限度を超えようとすることから出発した。近代の技術文明は、人間が人間の限度を超えるための手段であった。実際、これによって時間と空間が征服され、自然が征服され、人間にとっての様々の限界が征服された。そして、ちょうど、これに比例して、現代の体制は、自らの限度を超えて急激に膨張してきたのである。

しかしながら、このようにして途方もないものになってしまった〈膨張の体制〉も、無限に膨張していくことができるというわけではない。そこには、それ自身の限界がある。高層ビルをどこまでも高く建てていこうとしても、最後には、自分自身の重みで崩れていかねばならないところにくるように、この無限に膨張する〈欲望の体制〉も、自分自身の大きさに耐えられなくなって、自分自身で滅んでいかねばならないという運命から逃れることはできない。この〈膨張する体制〉は、人間自身から出てきたにもかかわらず、人間ではどうすることもできないほど、人間を超えたものとなってしまっているから、人間自身にはこの限界を認識することはできないかもしれない。しかし、それでもなお、否、それだからこそ、〈膨張する体制〉がその膨張の限界に達する時はある。それは、人間が自らの限度を超えて増長していったことに対する罰なのかもしれない。

核兵器は、この限界線上に立つ現代文明の皮肉な象徴である。近代以来、武器という武器が、膨張する体制を映すようにして、途方もない速度で途方もない発達を遂げてきた。ところが、その頂点で発明された核兵器は、皮肉なことに、もはやそれを使うことができないというところにきてしまっている。それは、武器でありながら、あまりにも巨大な破壊力をもつに至ったために、かえって武器本来の働きを否定されてしまった。それは、軍

事機器としての限界にきてしまったのである。軍事機器も現代人の欲望の一表現であってみれば、核兵器のそのような有様は、やはり現代文明の〈膨張の限界〉を暗示しているとみてよいであろう。

ずっと遠い昔、中世代のころ、地上に増長していた巨大な爬虫類達は、まわりの植物をたくさん食べてどんどん大きくなっていき、ついに自分自身で自分の重みに耐えられなくなってしまったために足を運べなくなり、かくて彼らは滅んだという。あたかも、このいくらか笑い話めいた話にも似て、現代の〈膨張する体制〉も、それ自身の限界にくる時がある。今日叫ばれている資源・エネルギーの危機という現象も、現代文明が〈膨張の限界〉近くにきていることの少なくとも予兆ではあるように思われる。ものごとには、いつも限界というものがある。

現代文明は、また、ちょうど一個の風船をふくらますように、その規模を膨張させてきた。しかし、どんな風船でも、いつかはそれ以上ふくらますことのできない限界にきて破裂してしまうように、現代のこの〈膨張する体制〉も、いずれはそのような限界にきて、破滅への道を歩む時は来るであろう。

かつて、古代ローマは、長い労苦を重ねてつぎつぎとその版図を拡大しながら、地中海世界を征覇していった。しかし、やがて、あまりにも版図が大きくなりすぎたために、統治力が稀薄化、そのため衰退の一途を辿っていかねばならなかった。ちょうどそれと同じように、現代文明もまた、その過度な量的拡大のゆえに、かえって衰退していかねばならない時は来るであろう。もともと空無なところから出てきたのだから、また、それがもとの空無の世界に帰ったとしても、不思議なことはない。もしも、それをしも不安というなら、きっと長い不安の時代が続くであろう。

しかし、それにもかかわらず、現代のこの巨大な体制は、自らの限界を知ることなく、どこまでも膨張していこうとしている。実際、それゆえに、地球上の世界はもうすでに息苦しいくらいに狭くなってしまっている。そのため、今日では、それは地球の外にまで膨張していこうとしているほどである。宇宙開発という名によって行われているこのとめどない膨張は、月や火星までが人間の欲望に拉致され、この〈膨張する体制〉の中に組み込まれようとしていることを表わしている。

〈膨張する体制〉は、自らの限界に至って自ら滅亡するまでは、とどまるところを知らず膨張する。しかも、その限界がどこにあるかは誰にも分かっていない。膨張の体制は、すでに、人間を遥かに超えたものに成長してしまっているから、人は誰しも、ただ、それに盲目に従っているだけである。〈膨張する体制〉は、明確な目的をもたずに盲目に膨張していく。それは、すでに、人間を超えた得体の知れない〈盲目の意志〉とでもいうべきものによって動かされているようにさえみえる。それは、個人個人ではどうすることもできない巨大な運命なのである。

量の支配

1　量の科学

科学と技術の結合

ヨーロッパの十九世紀は〈科学の世紀〉ともいわれるように、自然科学がめざましい発展を遂げた時代であり、それは二十世紀にも引き継がれて、今日に至っている。自然科学そのものは、すでにヨーロッパの十五・十六世紀、ルネサンスのころ成立し、その後発展していったのだが。しかし、この発展と十九世紀以後の飛躍的な発展との間には、根本的に違うものがある。その違いのうちのひとつに、十九世紀になって、科学が技術の発展と深く結びついたということが挙げられるであろう。現に、十九世紀以来、蒸気機関の発達は熱力学の進歩を促したし、電磁気学の完成は電気や無線通信の技術を発展させたし、化学の進歩は合成製品の技術を生み出したし、量子力学や相対性理論なくして原子力の技術は発達しなかったであろう。

自然科学は、本来、自然のうちに、自然の基本構造や自然法則、いわば〈自然のイデー〉を探究することを目的としており、それは、人間にとって有用なものをつくり出すために自然を利用しようとする〈技術〉とは違ったものである。だが、十九・二十世紀の自然科学の飛躍的な発展の背景には、少なくとも、「科学は、我々の生活にためになるものを生み出してくれる基礎知識の探究である」という社会一般の通念があった。しかも、そのような信仰が自然科学の進歩の大きな原動力になっていたことは確かである。いわゆる〈科学技術〉の成立が自然科学の発達をもたらし、以来、科学と技術は、車の両輪のように互いに助け合いながら発展していったのである。技術の発達が科学の進歩を促し、科学の進歩が技術の発達を促進した。

しかも、この科学と技術の結婚という現代文明にとって重要な役割を果たした現象の背後には、科学も技術も、近代においては、「質的なものを量化して考える」という共通した性格をもっていたということがあるのも見逃がすことができない。自然科学は、もともと、距離とか時間とか重さとか速さとか力とか、様々の質的なものを、計算しうる数量に置き換えて、その量と量の相互関係を調べ、そこに、最終的には、普遍的に成立する関数関係、つまり数学的法則を見出そうとするところから出発した。他方、産業革命以来、物資の大量生産を目指す近代技術は、それまでの職人的技術とは違って、自然科学同様、自然を計量し予量しうるものとして捉え、これをどのようにすればより速く、より多く、より安く加工し供給しうるかを計算し、計画してきた。このように絶えず量を求め、絶えず計画し、膨張していこうとする近代技術が、質的なものを量に還元する近代の自然科学を利用しようと企てたのは不思議なことではない。近代自然科学は、質的なものを量に還元すること

によって自然を測定し、その法則を予め見出しておいてくれたからである。

産業革命以来、時代は、すでに質的なものよりも量的なものを重んじ、ひたすら〈量〉を求める時代に突入していた。近代技術の発達のうちで、例えば、生産、運輸、通信のどのひとつをとってみても、この〈量〉指向と無関係なものはない。自然科学も、この量を追求する近代技術に利用されながら、同時に、その技術的成果に押し上げられるようにして発展してきたのである。十九世紀以来、自然科学が、堰を切った流れのようにその領域を急速に拡げていったのは、現代が〈量の支配する時代〉に突入したことのひとつの表現だったとみることもできよう。

社会科学と人文科学

もっとも、ヨーロッパの十九世紀が〈科学の世紀〉といわれるのは、単に、自然科学が飛躍的に発展したということだけを根拠としているのではない。十九世紀以来、自然科学の方法が他の精神科学や社会科学の分野にまで影響を及ぼし、その結果、あらゆる学問という学問が〈科学〉を名乗るようになったということも、その重要な根拠であろう。

例えば、行動主義心理学の成立はそのひとつの成果である。それは、〈性格〉でも〈知能〉でも〈学習〉でも、およそ人間の精神作用にかかわる質的なものを数量に置き換えて、自然科学と同じように、その量と量の相関関係を調べ、最終的には人間心理の法則を見出そうとする。質的なものを量化することによって、心理学は科学になりうると考えられたのである。だからこそ、現代の心理学では、統計的方法が重んじられ、その方法が確立されているのである。最も質的と思われる人間の精神作用を量によって計ることによって、科学が精神の領域にまで入り込んできたのである。このようにして、もともと哲学が受け持っていた人間精神の探究を、科学が奪っていった。

今日では、心理学ばかりでなく、経済学でも、社会学でも、その他様々の学問分野のうちに、この質的なものを量化するという〈科学の方法〉が取り入れられ、こうして科学全盛の時代が到来した。学問の分野に現われたこのような現象も、現代が〈量の支配する時代〉であることの一表現だとみることができる。

2　量の政治

大衆民主主義

近代民主主義の原理は、本来、市民一人一人が、個人として、自分自身の責任のもとに、その義務を果たすとともに、権利を行使するというところにあった。ところが、近代国家は、その擁する国民の数が極めて大量であったために、代議制民主制をとらざるをえなかった。国民の主権を代行する者を選挙によって選ぶのである。ところが、これが普通選挙の段階になると、代表者になりたいものは国民大衆の票をいかにたくさん取るかということに血眼になり、結局のところ、大衆への迎合に明け暮れることになっていく。かくて、

このような大衆民主主義のもとでは、政治は、気まぐれな大衆の目先的な欲望に支配されていくようになる。政策の決定なども、その是非によらずに、いかに多数の大衆の支持を得ているかによって決められる。政治が単なる量によって支配されてしまうのである。これが、民主主義の原理を徹底化した結果である。すべてを量によって計り、量によって考えるということが支配的になるのは、科学の分野においてだけでなく、政治の分野においても顕著にみられるのである。

もしも、国民一人一人の向上を目指し、共同体全体の徳を実現するということが正義であり、これが政治の理想だとすれば、単なる量によってのみ支配される近代民主主義の政治は、そのような本来の任務を果たすのに適しているとは言えない。大衆の票がいかに多いかという量によって決定される政治は、たとえ民意を反映するのに適していたとしても、必ずしも、正義を実現するのにふさわしいとは限らない。

ところが、民主主義のもとでは、大衆の多数意見によって決定されるものが、すなわち正義であると考えられるようになってしまう。例えば、民主主義の大きな原理のひとつである多数決原理のもとでは、どうしても、多数が正しく、量の多い方が正義だと考えられる。最大多数の最大幸福という功利主義の原理もこれに類するが、これが政治の原理とされてしまうと、質としての正義は後退し、政治は量の支配以外の何ものでもなくなる。

さらに、今日、大衆民主主義のもとでみられるような、例えば圧力団体に左右されるような政治になると、これは、すでに量そのものの政治だと言わねばならない。ここでは、結局、より多くの利益集団をかかえた団体の意思が政治を動かしていく。政府や政党は、そのような組織の意志に従って政治を行なうようになり、政府や政党はまるで組織の使用人のようなことになってしまう。このような組織によって動かされていく政治では、単なる個人個人の意見は握り潰されてしまうから、皆が、なおのことひとつの大きな団体をつくって、無理に意見を通していこうとする。国家全体の行くべき方向を見通しているのは、往々にして極く少数の優れた人達である場合が多いことを考えれば、様々の圧力組織によって動かされる量の政治は、正義からは程遠いものだと言わねばならない。

物量戦

戦争も、現代では量によって支配される。かつての伝統的な戦争では、形式とか名誉とか精神的なものが重んじられたが、十九世紀以後の兵器の発達とともに、特に第一次大戦を境にして、その性質が決定的に変わり、戦争は物量戦になってしまった。戦争においても、精神的なものから物質的なものへ、質的なものから量的なものへの移行がみられるのである。現代の戦争では、どちらがより多く物量を持っているかが勝敗を決める最も大きな要因となり、個人の名誉とか戦さの形式などは顧みられない。戦争は、ただひたすらもてる物量を投入し、互いにそれを潰し合う物量の消耗戦になる。ここでは、人間なども一種の物量とみなされ、戦闘員は機械と同じ扱いを受け、消耗品扱いを受ける。もっと悲惨なのは、近代戦争では非戦闘員が巻き込まれ、これも一種の戦闘員の扱いを受け、殺戮の

対象とされるということである。現代の物量戦は、およそ秩序というものをもたなくなる。

3　量の社会

組織

もともと、現代社会そのものが〈量の社会〉であって、ここでは、アトム化した人間を糾合した巨大な集団、つまり〈組織〉といわれるものが横行する。現代社会は、企業や労働組合、生産者団体や消費者団体、政党や宗教団体など、様々の組織によって成立しており、これらが社会を動かしている。現代社会では、個々人は、もはやそれだけでは社会を動かす力とはなりえず、何らかの組織に属し、ひとつの塊、量になるのでなければ、何ごともできない。現代のような組織社会では、個人は、単に集団の動員されるべき一員として意味をもつにすぎずない。

多くの大衆が動員される大衆運動は、現代社会が〈量の社会〉であることの最も象徴的な現象であろう。ここでは、大衆をいかに多く動員することができるかによって、その組織の力が計られる。ここでも、威力を示すのは〈数〉であり、〈量〉であり、一人一人の個人の個性など問われない。

なるほど、いつの時代でも、人間は本質的に共同社会を営んで生きる生きものであって、単なる個人だけで生きていくことのできるものではない。ただ、かつての場合には、人は、有機的秩序をもった地縁共同体の中に住んでいたのに対して、今日の社会では、人は、ひとつの組織、つまり利益集団の中に組み込まれなければ生きていけなくなっている。近代は個人の個性と主体性を重んじる個人主義から出発したのだが、その結果残ったものは、逆に個人の個性も主体性も無視した組織、それもアトム化した個人の巨大な集積としての組織だけである。しかも、これが、それ自身の独自の意志によって社会を動かしていく。

マスコミと出版

マス・コミュニケーションの発達は、現代社会が量によって支配されているということの顕著な現われである。ここでは、独立した個々人よりも、むしろ均一化した個人の塊、つまり大量の大衆がその底流を形づくっているから、いかに大量の情報をいかに大量の大衆に伝達するかが重要になる。新聞やラジオ、テレビなどが、個々人ではなく、大量の大衆を相手にしてその意識や行動を左右し、ひいては現代社会全体を支配し、強大な権力を誇示するに至るのも、そのことによる。今日では、マスコミの力には誰も立ち向うことができず、否応なしに、個人は、マスコミのつくりだす流れに流されていく。

現代では、マスコミ界ばかりでなく、出版文化の世界でも、大量の情報をいかに大量の大衆に伝達するかという意識が支配的となる。ここでは、本の良し悪しは、その内容によらず、いかに大量の部数が売れたかによって判断される。本の価値が、質ではなく量によって計られるのである。それどころか、今日では、多くの本が、その内容はともかく、い

かに多く売るかを狙って書かれ、企画されることが多い。従って、当然のことながら、それらは質的に低下する。事実、現代の出版界は、低俗な出版物の大洪水のごとき観がある。

かつて、書籍というものは、高い価値のあるもののみが写本というしかたで受け継がれ、そういう形で一国一文化圏の精神的高さは保たれてきた。ところが、印刷術が発明されてからというもの、徐々に大量出版がなされるようになり、それにつれて文化の水準は加速度的に低落していった。ベストセラーなどというものが登場してきたのは、低俗なものの方がかえって大量に売れるという〈量の時代〉に現代が突入したことの象徴であろう。ここでは、逆に、価値あるもの、高貴なものの方がないがしろにされ、その場を奪われ、無視されていく。

4　量の経済と統計

大量生産と大量消費

経済においても、現代では、いかに多くの物を生産し、それをいかに多くの人達にすばやく供給するかということに血道が上げられる。現代経済にとって、大量生産は至上命令であって、生産の大量化のためには、どんなことも犠牲にされる。かつてまだ経済がこれほど過度に膨張せず、程よい均衡を保っていた時代には、物の生産にしても、その大量化は必ずしも目標とはされず、例えば職人芸などにみられるように、少量のものでも、長い時間をかけて立派なものを作るということが心懸けられた。ところが、今日の大量生産方式のもとでは、むしろ画一化されたおびただしい量の規格品が機械仕掛で短時間に生産されてくる。そして、産業革命以来何度も革新されてきたこの大量生産方式は、大量輸送と大量消費の手段をも生み出し、かくて、経済は〈量の支配する経済〉となった。精神の規制を失って無限に氾濫していった現代の欲望は恐るべき量の物資を要求し、大量生産と大量消費の途方もない経済方式を生み出したのである。

近代経済学が、数学的方法を取り入れて、人間を単なる量として眺め、人間の様々の価値指向もすべて数値化し、あらゆるものを計量することによって経済理論を組み立てたり、経済政策を立案したりするようになったのは、今日の経済規模が大量化し、量的にしか処理できなくなったためでもある。ここでは、人間一人一人も、単なる労働力の一単位、あるいは消費の一単位としてしかみられない。しかも、このことは、資本主義、社会主義を問わない。どの経済体制でも、人間は計量され、計算され、そして計画されたものとして取り扱われる。

統計

およそ、現代ほど、政治・社会・経済一般において、統計というものの重んじられる時代もない。今日、新聞やテレビなどでも、盛んに統計資料が登場してきて、それが人々の意識を支配している。これは、現代という時代が量の支配する時代であるということのひ

とつの表現であろう。この統計処理においては、人間の個性など質的な面は無視され、すべて均一な一単位として、量的な側面のみからみられる。今日では、様々の方面に統計的手法が浸透し、諸々の現象が量と量の関係として計測され、そのため、かえって事柄の本質が忘却されることにさえなるのである。

なるほど、このような統計的手法をはじめ、コンピュータを使った様々の大量情報処理の手段によって、今日の科学はそれ自身巨大になるとともに、それが提供する知識量も厖大なものになった。しかし、今日では、そのためにかえって、もともと知識というものが目指していた世界の統一的把握ということが困難になってしまった点は否定できない。今日、人はただ厖大な知識量に振り回されているだけで、確固とした世界観をもっているわけではない。

確かに、自然科学は、質的なものを量化するということによってめざましい成功を収めた。そして、この科学的方法が他の学問にも応用されることによって、社会科学や人文科学も著しい発展を遂げてきたようにみえる。しかし、今日のように、質的なものを量化して事柄を考察しようという考えがあまりにも支配的になると、今度は逆に、量的なものによってその質をも判断することができると考える逆現象が現われてくる。

例えば、新聞などが、内閣の支持不支持について世論調査を行なう場合、人は、往々にして、支持率が高ければよい内閣であり、低ければ悪い内閣だと、その質まで判断しがちである。そのため、内閣は新聞の発表する支持率に一喜一憂し、手取早い人気取りだけのために、その場凌ぎの政策を実行したりする。世論調査というものは、一般に賛成が多いからといってよいとは限らないのだが、今日では多ければよいと考える傾向にある。また、それを引き出すために、世論調査が行なわれる場合もある。テレビ番組から国家の政策に至るまで、今日では、その本質によらずに、むしろ統計資料によってのみ、その良し悪しや是非まで判断しようとしているかのようである。いかに量が増大したかあるいは減少したかによって、その質も問われるというこの逆現象は、多分現代における量の支配の極だとも言えるであろう。

現代は、限りなき欲望が精神の規制を失って無限に氾濫した時代であった。そして、このとめどなき欲望はただ量のみを求め、現代を量の支配する時代としていったのである。しかし、量のみがその限度を超えて途方もなく無限に増大していくなら、かつてのローマ帝国がそうであったように、その無節度な膨張のためにかえって内的空白化をもたらし、やがては衰亡していくというようなこともないわけではない。

現代文明の諸相

1　近代化

経済の膨張

十九世紀以来世界史を大きく動かしてきた〈近代化〉の流れは、現代の物質文明、他ならぬ巨大な〈欲望の体制〉を地球的規模において築き上げようとしてきた現代人のあくなき営みであった。

近代化の最大の徴表が、何よりもまず経済の膨張となって現われるのはそのためである。産業革命以来、物資の大量生産と大量消費を可能にする機構を目指して、世界経済は、それまでの規制を破って、かつてない急激な速度で膨張してきた。そして、それは、軽工業から重工業、さらに重化学工業の発展といういくつかの段階を経て、今日の情報化革命へと続いている。産業主義によって推進されてきたこのたった二百年余りの近代化の営みによって、生産性は急膨張を遂げた。これほどまでに生産性が急膨張したことは、いまだかつてなかったことであろう。

しかも、この急膨張は、政治、社会、文化一般をも呑み込んで、これを大きく変貌させた。確かに、どこでも、この近代化を始めてからというもの、社会構造は急激に変動し、人々の生活のしかたやものの見方・考え方、つまり文化一般も一変した。それは、確かに大きな革命だったのである。なるほど、近代的な経済の発展は、ヨーロッパでも十九世紀以前からすでにみられるが、しかし、それが社会構造や文化一般にまで根本的に影響を及ぼすようになったのは産業革命以後であり、われわれが共有している現代はここから始まる。十九世紀を境にして、現代文明は、初めヨーロッパに発生し、後、非ヨーロッパに裾野を広げながら、まるで積木を積み重ねていくように、営々としてつくりあげられてきたのである。

欲望の無限氾濫によって成立する現代文明の成立に、欲望の直接形態である経済は大きな役割を果たしてきた。実際、我が国の明治政府の富国策にもみられるように、どの国でも、近代化政策は、経済規模を大きくし、一国の生産性を増大させることに集中している。政治、社会、文化一般における近代化政策も、このための手段であった。

例えば、教育改革もそのひとつであり、これも、近代国家では、産業の発展のための一手段として実施される。近代産業はもともと規模が大きい上に、高度な技術と知識を必要とするから、これを興すには、国民皆が少なくとも読み書きと計算ができなければならない。近代国家では、国民皆教育、つまり普通教育が何よりも先に実施されるのはそのためである。教育が産業社会の中に組み込まれ、いわば〈欲望の体制〉の養成機関となるのは、資本主義、社会主義を問わず、近代一般の特徴である。

資本主義と共産主義

資本主義と共産主義は、どれも生産性の飛躍的向上を目指しているかぎり、どちらも同じ近代化の過程の中にあり、両者は、むしろ近代化の二つの異なった方法だったと言うべきであろう。資本主義の方は、自由競争による利潤追求によってこれを実現しようとし、他方、共産主義の方は、計画経済によってこれを実現しようとする違いはあるにしても、どれも、物質的に恵まれた〈豊かな社会〉を目指している点では共通している。

二十世紀後半、資本主義も共産主義も共に修正主義になっていったのも、両者が近代化の一方法であったことを物語っている。近代化の目指すものは何よりも経済の拡大であり、生産性の向上であるから、共産主義諸国では、それにあまり適当でない共同生産方式は修正され、むしろ、資本主義的な利潤方式や市場主義が導入されるようになる。他方、近代化の目標は、得られた富の平等な分配による生活水準の上昇にもおかれているから、資本主義諸国にあっても、国家による社会福祉の充実や労働環境の改善政策など社会主義政策が採られ、修正されていった。資本主義国も共産主義国も、同じように工業化を実現し、同じような巨大な官僚制を擁し、社会全体が同じように機械化して、同じようなコンクリート文明を築いていったのはそのためである。

共産革命が、その古典的理論に反して、資本主義のより発達した先進国で起きずに、ロシア革命以来後進国で好んで起きたのも、共産主義が近代化の一方法であったと考えればよく理解できる。後進国では、徹底的に遅れた旧体制を急激に破壊して、急いで近代化しなければならない。その急激な社会変革のためには、一挙に社会秩序を破壊し強力に上から指導していく共産革命方式が都合がよかったという面もあったであろう。さらに、遅れて近代化を進めていくときには、いつも先んじた国との闘争を伴うが、共産主義は、この闘争のイデオロギーを階級闘争理論で用意しておいてくれたという利点もあった。自分達〈持たざる国〉は、持てる先進国に搾取されていると言うことができたからである。

自由・平等・伝統

他方、政治においては、〈近代化〉は〈人民主権〉という形で現われ、そのイデオロギーは自由・平等におかれる。実際、自由・平等の理想を掲げたフランス革命以来、ヨーロッパでつくられていった自由民主主義は、その原理を人民主権においていた。近代国家をつくるということは、今日の結果からも分かるように、国家全体をよく管理されたひとつの工場のようにしていくことである。そのためには、すぐれた調整力をもった政府のもとに、国民皆が等しく生産に励み、経済を発展させていくのでなければならない。自由・平等のもとに旧秩序を廃し、国民一人一人に主権が与えられるのは、そのための政治的手段である。一部の上層部だけが権力を独占していたのでは、生産意欲も能率も上がらず、近代国家にふさわしい物資の大量生産を実現できない。実現するためには、国民一人一人に主権を与えることによって国民の意志統一を図り、それでもって、近代的な中央集権国家をつ

くっていくのでなければならなかったのである。

他方、社会における〈近代化〉は、その平均化という形でも現われるが、これも、結局は、物資の大量生産と大量消費の経済機構をつくっていくための手段に他ならなかった。近代的経済機構をつくるには、身分制を廃して社会を平均化し、皆が同じ教育を受け、どこでも進出していくことができ、どんな職業にでも就けるようにする必要があった。何人も、身分、門閥、性別、出身などによって差別されず、すべての国民が平等であるという平等のイデオロギーは、この平均化のイデオロギーであった。そのようにして、それまでの秩序ある有機的社会は、近代化のために変革されて、機械的に組織された社会になっていったのである。

その点では、同じ人民主権を揚げ平等主義を唱えた共産主義国家が、それに反して、巨大な官僚機構に支配された一党独裁国家になってしまったことは、この近代化の流れには反したことだったと言わねばならない。ここでは、人民主権や平等は詐称されてしまったのである。共産主義の崩壊の原因のひとつに、このことも大きな要因としてあったと言えよう。

経済、政治、社会、文化にわたって、このような形で現われた〈近代化〉は、当然のことながら、伝統的社会や文化的伝統との様々の軋轢を生み出し、それを破壊していった。近代化の流れは抗し難い大きな力であって、近代化の過程の中でみられる伝統的立場からの反抗がいつも挫折していくのは、そのことを物語っている。なるほど、一方では、近代化が成功するには文化的伝統が生かされねばならないという面もある。しかし、それも、つまるところは、伝統が近代化に合うために変容されたものにすぎず、いわば伝統の残滓にすぎない。

なるほど、このように近代化が進行していく中にあっても、なお伝統的精神をもって臨もうとする者もいる。しかし、彼は、この近代化による秩序崩壊に面して、それとの相剋のうちで苦悩せざるをえなくなる。近代化は、そのような多くの精神の悲劇を残しながら、それでもなお、ほとんど運命的に進んでいくのである。

ヨーロッパ化としての近代化

〈近代化〉は、十九世紀以後の激動する世界史をその底流において動かしていた原動力であった。事実、この近代化の波は初めヨーロッパに起き、それはやがて、まるで津波のように急速な勢いで非ヨーロッパに拡散し、こうして、非ヨーロッパをもつぎつぎと近代化の波に巻き込んでいった。そういう形で、十九世紀以後の世界史は、ヨーロッパ由来の近代文明によって全面的に覆われるようになったのである。

従って、非ヨーロッパにあっては、〈近代化〉はいつも〈ヨーロッパ化〉として現われた。つまり、ヨーロッパの近代文明を自分自身の伝統的土壌の上にいかにして受け入れるかという努力として現われた。

資本主義も共産主義も、近代化の一方法として、ともに、この世界史の大きな潮流の中にあったと言える。つまり、ヨーロッパが非ヨーロッパに拡散し、非ヨーロッパがヨーロッパ化していくという流れの中にあった。事実、それらは、今日、非ヨーロッパの様々の国に受容され、それぞれの国で独特の形態を形づくりながら、独自のしかたで近代化を押し進めていっている。

確かに、そのときヨーロッパの近代文明を受け入れる地盤となった非ヨーロッパの文化的伝統は、近代に合うように独自のしかたで変容されながら、非ヨーロッパの近代化にとって大きな役割を演じてきた。しかし、最終的にそれが成功し、現にみられるような巨大な物質文明を手に入れたときには、その伝統的支柱はすっかり形骸化されてしまう運命にあった。ここに非ヨーロッパの二乗された悲劇がある。しかし、それにもかかわらず、この〈非ヨーロッパのヨーロッパ化〉としての〈近代化〉は、地球上をコンクリート文明によって埋め尽すまでは運命的に拡大していく。それはなお、現代の物質文明、他ならぬ巨大な〈欲望の体制〉を地球的規模において築き上げようとしている現代の世界史的営みなのである。

2　組織化

組織化された世界

現代の世界、この巨大な〈欲望の体制〉は、あらゆるものが組織化された世界である。有機的連関を失った現代の世界は、散乱したものを寄せ集めて、これを機械的に連結し、ひとつの巨大な〈欲望の組織〉をつくりあげた。経済はこの〈欲望の組織〉の組織者であり、技術はその手段であった。そして、現代では、国家や社会、文化や教育すべてが、この組織の中に組み込まれ、その一部をなすようになったのである。そのような組織化された世界こそ、現代人が住みつき、生きる場としているものである。ここでは、社会は、断片化した人間を組織した集合体にすぎない。国家をはじめ、企業や労働組合、地方公共団体や政党、学校や宗教団体など、現代社会に存在する様々の組織は、かつての共同体の代りに、断片化した人間を組織化した現代的社会組織である。

現代の巨大な産業機構は、この〈欲望の組織〉を支える基礎的組織である。ここでは、諸産業が、ひとつの機械的な組織の中に組み込まれている。産業革命以来、高度技術文明は、〈工業化〉という形で産業を組織化した。例えば、農業なども、現代では食糧生産の機構にすぎず、それは、すぐに別の産業、例えば工業と機械的に連結され、それを動かす動力源になっている。産業の近代化とは、このように、農業や漁業、商業や工業が、ひとつの巨大な産業機構の中に組み入れられ、その一部分をなすことであった。かくて、今日では、諸産業は精巧な時計の歯車のように結合され、そのために、どれかひとつの歯車でも動かなくなったら、すべてが稼動しなくなるほどである。

現代の超近代的な工場は、この現代の巨大な産業機構の縮図である。ここでは、大仕掛

な輸送機関によって原料が運ばれてくると、それはすぐに、すべてにわたって精巧に機械化されたシステムによって加工され、大量の画一化された製品として吐き出されてくる。現代では、人は誰でも、このような巨大な産業組織に依存している。もはや、特定の誰かがこれを動かしているのではない。資本主義、社会主義を問わず、このような巨大な産業のシステムの中では、人間は、単にこのシステムのひとつの分子にすぎない。

産業組織ばかりでなく、現代にあっては、国家もまた巨大な組織国家になる。そして、その行動は、資本主義国家も、社会主義国家も、一種の機械装置の稼動にすぎなくなる。資本主義国家は、下からの組織化によって、国民の欲望の調整機関になり、社会主義国家は、上からの組織化によって、国民の欲望の統制機関になってしまう。どちらにも共通して存在する巨大な官僚組織は、その象徴である。ここでは、為政者は機械仕掛の国家の単なる歯車にすぎない。

機械仕掛けの怪物

機械的に組織されたこの〈欲望の体制〉という現代の機構は、確かに、巨大な機械仕掛けの怪物ようである。様々の産業システムは、この機械仕掛の怪物の内臓のように密接に組み合わせられており、国家は、この生きものの大脳のように、それらを制御する。巨大な工場は、この機械仕掛の生きものの胃袋のように、外から大量の原料を呑み込み、大量の製品をつくり出し、各機関に送り出す。そして、田畑を切り裂いて伸びる高速道路は、この怪物の動脈のように、大量の物資や人間を輸送する。自動車や列車は、さながら、この怪物の血液のようである。また、教育機関は、この自動機械の養成機関として、この機械に役立つ歯車をつくりあげて各機関に配置する。

新聞やテレビ、電信や電話、これらは、まるでこの怪物の神経器官のように、現代の組織の隅々にその手足を伸ばし、大量の情報を立ちどころに行き渡らせる。確かに、これほど大量の情報網が縦横無尽に張り巡らされ、そのため、人間がこの巨大な体制の中に組み込まれてしまったことも、いまだかつてなかったことであろう。

しかも、新聞やテレビは、世論操作によって、絶えず画一的な情報を繰り返し、この体制の中に住み込んでいる人間の理性的判断力を麻痺させる。そのようにして、人間を、この体制に都合のよい機械人間に仕立て上げるのである。この体制の中で生きるには、全体のことなど見渡すことができず、新聞やテレビの言うことを、ただオウム返しに言うだけの近視眼的な人間が必要なのである。報道機関を国家が独占する全体主義国家はこれを最もよく実現したが、今日では、自由主義国家においても、肥大化したマスコミはすでに全体主義的になってしまっている。マスコミは、これをオピニオンリーダーと自称するが、そういうしかたで、それ自身この巨大組織に奉仕するひとつの機関になっているのである。

このようにして、〈欲望の体制〉は、断片化したものを機械的に組織化し、ひとつの巨大な機構をつくりあげた。それは、実際には砂上の楼閣にすぎないのだが、しかし、確かに、それはまるで歴史的終末に登場してきた怪物のようである。

3　平均化

均質化と一様化

現代の体制、この巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、様々のものが平均化する。例えば、現代社会では、〈平等〉の名のもとに、かつてあった階層的秩序がなくなり、社会は均一化し、平均化する。ここでは、人々は、巨大な産業経済の機構を構成する一成員として同質化するのである。巨大な産業技術に支えられる現代の体制をつくりあげるには、社会的にも人間を均質化し、動きやすくする必要があったからであろう。

そのため、ここでは、人間一般が平均化する。子供と大人、青年と老年、男と女、教師と学生、政治家と大衆、それぞれがそれらしくあることをやめて均一化する。人間が混合し、一様化してしまうのである。確かに、ここでは、子供はいつも大人びており、逆に大人はいつまでも子供っぽい。また、青年が老年のようにふけてみえ、老年が絶えず青年のまねをしようとする。ここでは、一般に年齢の区別が希薄になり、人々は相寄って平均化していく。

区別が希薄になるのは年齢ばかりではなく、現代では、職業上の区別も希薄になる。人は、それぞれの職業にあって、それらしくあることをやめて、皆がサラリーマンのような顔かたちになってしまう。かつてあったそれぞれの職業を象徴する明瞭な徴表が、顔においても、形においても、失われていくのである。

さらに、男と女の間でも、どれほど明確な区別が失われることであろう。男児と女児、夫と妻、父と母、一般に男性と女性が相似てきて、次第にそれらしくあることが失われる。ここでは、男も女も得体の知れない混合の世界の中に投げ出されて、平均化されるのである。近代になって登場してきた男女平等論や、今日の男女雇用平等論や男女共同参画論も、結局は、この現代の巨大な機構を維持膨張させるための男女の混合を推進するイデオロギーにすぎなかったようである。

現代では、教育にあっても、人間の能力が平等主義のもとに平均化される。多数の凡庸者に平均的に知識を授け、子供達を現代の巨大な体制の予備軍に仕立て上げることが、現代の教育の主眼とするところだったようである。

そればかりか、現代では、文化一般が低い方に平均化される。現代では、文化が、大衆によって支配されているために、高級な文化と低級な文化との秩序が失われ、何もかもが同列に扱われるようになってしまう。現代では、文化も、大量の大衆のために大量に生産され、そのために、画一化してしまう。中央と地方の文化も画一化し、世界的規模においても、各国の文化がそれぞれの特異性を失って画一化する。現代は世界がひとつになる時代であるとよくいわれるが、それは、ただ、実際には、このような文化の世界的な平均化をもたらすにすぎないのであろう。

無差別化

一般に、現代の世界は無差別化の世界である。たとえば、過去、現在、未来の時間の区別さえも、ここでは希薄になってしまう。現代では、未来は、予測とか予見というしかたで絶えず現在によって先取され、そのため、未来はいつも一種の〈現在〉にされてしまう。過去も絶えず現在によって略奪され、一種の〈現在〉にされてしまう。歴史的時間が〈現在〉という一色で塗り潰されてしまうのである。

そればかりか、現代では、時間感覚一般が無差別なものとなり、明確な輪廓を失う。昨日と今日に区別がなく、去年と今年にも区別がなく、季節の区別も、時代の明瞭な像も、定かでないようである。それらは、現代の体制、他ならぬ〈欲望の体制〉という怪物によって拉致され、混合されてしまったのである。

現代では、また、人間の生と死の間でさえ、明確な区別が希薄になる。死は、単に生という機械の停止状態としてしか理解されず、その意味では、死は、機械的生の一種の延長上に眺められている。ここでは、生の世界と死の世界が、ちょうど巨大な工場に貯められた原料と廃棄物のように、平均化され一様化されてしまうのである。

かつての世界では、生と死の間には飛び越えることのできない深淵があり、両者には明確な対照が存在した。ところが、現代では、そのような生と死の明確な対照がなく、人々は、簡単に生から死へと機械的に飛び移っていく。現代人は、意味ある死をなくしてしまったのである。それは、ちょうど、現代では、闇が煌々とした夜の灯りによって克服され、そのため、現代人が闇を忘れてしまったのに似ている。あるいは、現代では、沈黙の世界が騒音一色に塗り潰されて破壊されてしまい、そのため、人々が静寂な世界を忘れてしまったのに似ている。現代における生と死は、ひとつの欠如態のうちに同質化されてしまっているのである。

現代の体制、この巨大な〈欲望の体制〉は、欲望の無限氾濫によって何もかもが呑み込まれてしまう世界である。高貴なものも、低劣なものも、偉大なものも、凡庸なものも、皆、無差別に空無化してしまう秩序なき世界、それが現代の世界である。世界がコンクリート文明によって塗り潰され、世界は得体の知れない混合の世界へと突入してく。今日の時代は、空間的にも、時間的にも、一様化の時代である。現代は、もはや〈冬の時代〉でさえなく、むしろ〈季節なき時代〉なのかも知れない。

4　有用性

何かのための存在

現代の体制、この巨大な〈欲望の体制〉のもとでは、〈有用性〉が価値規準となる。例えば、〈欲望の体制〉の支柱である産業経済と技術の世界は有用性そのものの支配する世界であって、ここでは、人々は諸事物をただ「何のためになるか」によって計量する。現代の世界では、いかなる事物でも、この有用性の規準によって計量され、計画されるのである。

そればかりか、現代の世界では、諸事物だけでなく、人間もまた、〈人的資源〉として、有用性の見地から計量される。有用性の世界では、人間も、何ものかのための存在として一様化され、水平化されるのである。ここでは、人間も、事物も、ともに〈欲望の体制〉という主人に仕える奴隷のようである。

さらに、現代の世界では、有用性という価値規準は、経済や技術の世界だけでなく、他の様々の場所に浸透して、これを支配する。そのため、現代人の行為の原理はこの有用性におかれ、それに基づかないものは無用として退けられる。現に、現代人は、何かにつけ「何のためになるか」ということを聞き、それを求める。現代では、万人が、まるで巨大な工場でただひたすら効率のみを追求している技術者のようである。功利主義や実用主義の思想は、この有用性絶対主義の近代世界の考え方を基礎づけようとしたものだと言えよう。

有用性の観念が最も支配的な経済・技術の世界でさえも、かつての時代には、単にそれだけにはとどまらなかった。なるほど、いつの時代も、事物の生産と工作は人間の欲望充足のために行われた。しかし、かつては、そのつくられたものには、いつも過剰なほどの余剰のものが付加されていた。ところが、現代では、ただ有用性と効率、あるいは機能性のみが追求される。価値の規準が切り下がったのである。

自己目的性の喪失

有用性絶対主義の現代にあっては、それ自身が目的であり、それ自身のためにそれ自身として求められる価値はないがしろにされる。例えば、学問や芸術は、もとはそれ自身として求められる価値であったが、これも、現代では、何かの用になるものとして予め利用される可能性がないかぎり、注目されることはない。確かに、かつての時代にも、それらは、多くの人々に無用のものと考えられた。しかし、人々は、またその無用の用も知っていたから、それらに敬意を表わしもしたのである。そうでなければ、あのような偉大な哲学も科学も芸術も生れはしなかったであろう。ところが、現代では、これら真善美の価値は、この経済技術によって支配された現代の体制によって利用されうるかぎりにおいて、認められるにすぎない。

ここでは、ただ行為するためだけの無目的な行為、あるいは自己目的的な価値が理解されない。例えば、幼児の遊びは、純粋に自己目的的な行為である。子供は遊ぶために遊ぶのであって、それは自己自身の中で完結しており、別のところに目的があるのではない。幼児の遊びに、根源的なものからくる無心さ、あるいは脱自性といったものが感じられるのはそのためである。本来の遊びは、有用性の体系である日常性からいつも離脱したところにある。

ところが、有用性の支配する現代の世界にあっては、遊びそのものも手段化される。現代の遊びは、いつも何かのための行為となり、純粋に無目的な行為ではなくなる。例えば、遊覧旅行とかレクリエーションなど、レジャーといわれる現代の遊びは、一般に、労働に

よるストレスの解消というような目的からなされるために、いつも、それは単なる〈気晴し〉にしかならない。しかも、現代では、これが、さらに巨大なレジャー産業によって企画され、用意され、組織化されてさえいるのである。現代にあっては、本来自己目的的な行為であったはずの遊びも、〈欲望の体制〉という有用性の体系の中に組み込まれ、別の目的のために利用されるのである。

可能態としての存在

〈欲望の体制〉のもとでは、諸事物はそのあるがままの姿においてみられるのではなく、すべてが〈何かのための存在〉とみられる。現代の世界では、山も川も、すでに〈何かのための存在〉つまり〈資源〉として一様化されている。かくて、山はもはや山自体ではなく、川はもはや川自体ではありえなくなった。そこでは、事物は、絶えずこの現代の体制の中に没個性的に組み込まれてしまっているのである。現代において事物が存在しうるとすれば、それは、ただ、有用性の世界の中で〈有用なもの〉として存在するにすぎない。

確かに、かつての時代にも、人々は、山からは木を取り出し、川からは水を取り出し、それを利用した。そのかぎり、諸事物は〈有用なもの〉として用立てられた。しかし、それは、有用性の視点からのみ取り出されたのではない。事態はむしろ逆であって、人々は〈自然からの恵み〉としてそれを受け取ったのである。そこには、それぞれが有機的連関性を保ちながら自存する〈存在の輪〉とでもいうべきものがあった。

それに対して、あらゆるものが有用性の観点から眺められる現代にあっては、存在そのものが〈可能性〉の地平からのみ捉えられ、その〈現実性〉は忘却される。現代では、すべてが得体の知れない〈可能態〉の中に投げ込まれてしまっているのである。ここでは、諸々の存在がその存在性を剥奪されてしまっている。有用性の体系の中で、これほど存在性が頽落したことはなかったであろう。

しかし、この有用性という価値規準によって支配されている〈欲望の体制〉そのものは、もはや何の目的ももたない。諸存在は、この〈欲望の体制〉のために組織され、そのため、人々もまた、この有用性の観念によって支配されるが、しかし、その体制の全体それ自体はもはや何の有用性ももたないのである。

5　均衡の喪失

精神文明と物質文明

かつてまだ精神の生きていた有機的世界では、精神と物質、平等と不平等、全体と個など、相対立するものが均衡を保っていた。ところが、欲望の無限に氾濫する今日の世界では、この相対立するものの均衡がなく、何ごともどちらか一方の極端に走っていってしまう。

例えば、かつての世界では、宗教や倫理が欲望の膨張を規制し、両者の均衡が保たれて

いたのだが、これに反して、現代というこの欲望の氾濫の世界では、宗教や倫理の力が弱まり、そのため節度ある経済が崩壊して、経済は極度に膨張する。かつての時代には、精神と物質の均衡があったのだが、現代では、この精神と物質の均衡が失われるのである。その結果、現代では、極端な物質主義か、あるいは、それに対する反動としての極端な精神主義が登場することになる。現代の物質文明の膨張は、そのような極端な物質主義の限りない追求によってもたらされた。しかし、これは、当然のことながら、既成の精神文化との均衡を打ち破り、これを押し潰してしまった。現代において、硬直化した極端な精神主義が屈折した形で病的に噴出したりするのは、そのためでもある。

なるほど人はよく次のように言う。「われわれは物質文明を追求してきたが、精神文明の方がそれに追いつけなかった。だから、これからは、この物質文明に見合うだけの精神文明を回復することが必要だ。そのようにして精神と物質のバランスをとり、この物質文明を精神文明によっていかによりよく使っていくかを考えねばならない」と。だが、この考えは間違いである。現代の物質文明は、もともと精神を犠牲にし、これを駆逐して成長してきたからである。しかも、精神は、もともと質的なものとして、この膨張する物質文明とともに膨張し、これに量的に追いついていけるような性質のものではないからである。物質文明をそのままにして、これに見合うだけの精神文明を回復するということは、最初から不可能なのである。

「精神文明を回復しなければならない」と言うことは、少なくとも言うことに限っては容易である。しかし、それは、実際には、粉々になってしまった壺をもとに戻すことよりも困難である。この欲望の無限増大する物質文明の世界は、精神と物質の均衡が破壊されることによって成立してきたのだから、このような世界の中にありながら、しかも精神と物質の均衡を回復するということは、よほど楽観的で無思慮な者でないかぎり、言うことはできない。現代では、精神文明が復興する前に、そう叫ぶ宗教団体などが巨大な集金マシーンとして膨張する方が早いであろう。

共同体の崩壊

かつてまだ精神の生きていた時代には、また、平等と不平等の間にも均衡があった。確かに、かつての時代には、身分の不平等や富の不平等など様々の不平等が存在した。しかし、同時に、ここには、身分、貧富、出身、性別その他様々の相違にもかかわらず、人間は神の前や仏性を有することにおいては一切平等であるとする宗教が生きており、この前では、たとえ帝王たりとも身勝手は許されなかった。社会的不平等を精神的平等が救い、均衡を保っていたのである。

ところが、欲望が氾濫する現代の世界では、現実の社会的不平等を超えて精神的平等を唱える宗教に対する信頼が希薄になったから、平等は現実の社会そのものに求められる。かくて、現代では、身分においても、貧富においても、性別においても、その他様々な面において人間は平等でなければならないとする平等主義が蔓延する。そのために、逆に万

人に一律平均の平等が強制され、かえって不公正が生じるといった有様である。ここでは、平等と不平等の均衡が失われてしまっているのである。

かつての世界では、また、全体と個の均衡も保たれていた。しかも、かつての時代には、それが、社会の有機的システムとして根づいていた。かつて生きていた地縁共同体の構造をみれば、様々の面において、この全体と個の均衡をいかにして社会のシステムとして図っていくか工夫されていたことが分かる。

例えば、かつて地縁共同体の生きていた世界において説かれていた倫理は、共同体を共同体として、全体と個の均衡のとれた有機的社会として成り立たせるための精神的工夫であった。つまり、そのような倫理によって全体を成り立たせるとともに、そのことによって個人生活もまた可能にしようとしたのである。しかも、そのことが、地縁共同体にあっては、共同体の相互扶助のシステムとして現実に生かされていた。個人的なものと社会的なものとの均衡が保たれていたのである。

しかも、この場合、地縁共同体にあっては、倫理的面にしても、政治的面にしても、これらを共同体の精神ともいうべき宗教が統括することによって、全体の秩序が保たれていた。このような形で、かつての社会の単位は、有機的社会として、つまり共同体として維持されていたのである。

ところが、現代の世界、この〈欲望の体制〉のもとでは、このような共同体が崩壊してしまう。そして、社会は、単にばらばらになった個人を組織化しただけの機械的社会になってしまうから、全体と個の均衡も崩れ去る。かくて、現代の世界は、政治社会的には、個の方が極端に重んぜられる自由主義か、逆に全体の方が極端に重んぜられる全体主義か、いずれか一方の極に偏っていく。

そのうち、自由主義社会は、個人の自由があまりにも主張されすぎるために、それは、個人のエゴイズムが過度に膨張する無秩序な社会となる。そして、このエゴイズムの膨張のために、ここでは、全体が程よく重んじられていたかつての共同体の倫理は崩壊、社会は社会としてのまとまりをなくす。

他方、全体主義社会では、国家や社会など全体のイデオロギーがあまりにも主張されすぎるために、この社会は、一人の独裁者や少数の支配者が個人の自由や私的権利までも踏みにじる恐怖政治の支配する社会になってしまう。そのため、ここでも、かつての共同体の倫理は崩壊し、社会は強力な権力機構によって支配されるようになる。万事が自由主義とは逆になるのである。

しかし、自由主義にしても、全体主義にしても、全体と個の均衡が崩れ去ることには変りがない。自由主義のもとでは、「全体あって個あり」ということが忘れ去られ、逆に全体主義のもとでは、「個あって全体あり」ということがおろそかにされる。

現代という時代は、限度を忘れ、節度を失った時代である。そのため、現代は、何ごとにつけ極端に走り、相対立するものの均衡が失われていく。欲望が無節度に膨張していく現代という時代は、また、均衡の喪失の時代でもある。

単なる生の充足

考えてみるなら、およそ今日ほど〈生〉の賞讃される時代もないであろう。確かに、近代は、精神をより優れたものにして生きることよりも、〈単なる生〉を限りなく充足して生きることの方が価値ありとする思潮に支配されていた。現代人が、ただひたすら豊かさを追求することに狂走しているのも、そのことによる。なるほど、いつの時代でも人々はそうであった。しかし、そういう現世の幸福への無限の要求がむしろ善であり、ひとつの行動原理として保証されていると考えられるようになったことは、それほど古くからのことではない。

かつてまだ精神の生きていた時代にあっては、この世の生はむしろ無常であり、苦であると考えられていた。人々は、この世の生ははかなく、いつも罪や悪や災禍に満ちたものと考えていた。だから、この無常にして苦なる現世において富や名誉や美を求めて生きることは空しいことであり、それより、この世の辛く苦しい生を運命と諦めることによって、現世を超えて絶対の解脱と平安の得られる永遠なる世界、つまり来世を求めることの方が大切だとされた。人々は、単にこの世の栄華と幸福を追い求めるのではなしに、それ以上の〈よりよき生〉を求めようとしていたのである。

ところが、欲望の無限に氾濫する現代にあっては、この現世を超える永遠なるものが失われてしまっている。従って、現世はもはや無常でも苦でもなく、むしろ、この世の生は楽しきもの、否、楽しくなければならないものと考えられるようになった。従ってまた、富や名誉や美が空しいものであり、かえって苦をもたらすものであるというような感覚も失われ、逆に、富や名誉や美を限りなく追求して生きることが幸福だとされるようになったのである。幸福が逆転してしまったのである。

かくて、〈生きるは楽し〉というこの享楽主義的な人生観からは、もはや、解脱や救いを求める心など起きてはこない。人々は、現在の〈単なる生〉を超えてよりよく生きようという意志を失い、その分心貧しくなってしまったのである。今日では、人は皆、より高き生を求めようとすることよりも、むしろ、現実の生を十二分に満足させて生きることの方を理想にしている。超越的世界を失った現代人にとっては、〈単なる生〉のみが唯一の価値になってしまったのである。

現代人は、永遠なるものを失ったために、ただ単に〈生きる〉ということだけを信仰して生きているかのようである。永遠の代りに〈単なる生〉を礼拝して生きているのである。そして、この点においては、生活の便宜を図る技術から、単なる生物学的生命の延引を図る医学の発達に至るまで、〈単なる生〉を享受するためのあらゆる努力が払われている。

生は単に生のためにのみあるのではなく、生を超えるもののためにあってはじめて意味があり、真に充実したものともなるのだが、現代では、むしろ生は生のためにあると考え

られる。ただ延命だけが価値あるものと考えられ、それ以上の価値が忘却される。今日よく生き甲斐の喪失といわれるように、生の価値が逆に問われ、生そのものが疑問視されているのは、かえって、現代が生のみを追求し、生を超えるものを追求しなくなったことによる。その意味では、現代人の生は、生そのものとしてもむしろ頽落した生、貧しき生だと言うべきであろう。現代の〈生の謳歌〉の思想は、裏を返せば、現代における生の弛緩、生命の衰弱を表現している。

生命への畏怖の忘却

現に、現代にあっては、生はむしろ衰弱し、その本来の生き生きとした生命力は失われてしまっている。例えば、現代の生命科学は、すべての生命現象をことごとくメカニカルなものとして説明する。否、新しい生命をバイオ技術によって合成してみせることも将来は可能かもしれないという。だが、この命あるものを機械的に説明し合成しようとする現代の科学によって、どれほど生命の神秘性が剥奪されてしまったことであろう。そして、人々は、生命に対するこのような考え方によって生命への畏怖の念を、どれほど失ってしまったことであろう。

さらに、この欲望の巨大な機構のもとでは、人口政策という名において、生命もこの機構に都合のよいように制御される。この機構を動かしていくのに、人口が足りないと計算されると増産されるし、多すぎると計算されると減産される。そこでは、もはや生命の尊厳というものは忘れられている。

かくて、この機械仕掛の世界の中で単なる歯車のように絶えず生命を擦り減らして生きること、それが、むしろ現代人の生となってしまった。現代にあっては、充実した生は困難であり、真に生きられる生命はすでに希薄化してしまっている。

このような生命の衰弱は、また、現代人が死を忘れたためでもある。生は、本来、死との明確な対照の上ではじめて充実したものとなりうる。ところが、現代の人間は、死を生との明確な対照の上で捉えることができなくなった。そのために、死は足下にあるにもかかわらず、現代人の視界からは定かには見えていない。だが、人間が死を忘れたとき、生もまた貧しきものとなる。現代では、死が喪失されると同時に、本当の生もまた喪失されるのである。

なるほど、現代では、脳死からの臓器移植とか、人工生命維持装置の発達とか、過剰医療とか、高齢化とか、様々の問題群から、再び生と死の意味が問われるようになってきた。その意味では、死は必ずしも忘れられているわけではない。しかし、これは、医療技術の発達によって、単なる生命を維持し延長することや生命の交換の是非を問うことから出てきたことであり、なお〈単なる生〉の充足の延長上にあることに変わりはない。ここでもやはり、本来の生と死は失われているのだと言わねばならない。生が貧しくなるとき、死もまた貧しくなるのである。

7　時間の喪失

スピード追求の世界

現代の世界、この〈欲望の体制〉のもとでは、地上には、まるで大昔の爬虫類にも似たおびただしい数の自動車が目も欺くような速度で走り回り、奇怪な大蛇のような列車が猛烈な速さで地を這う。天上には、飛行機という現代の怪鳥が、大空を突き刺すように、雲の彼方に消えていく。

そればかりか、現代では、電信や電話、ラジオやテレビなど、これら〈欲望の体制〉の伝令とでもいうべきものが、地球上を網の目のように覆って、まるで魔法使いのように、遠くの世界の様々の出来事を、ほとんど一瞬のうちに私達の目前にまざまざと伝えてくれる。また、オートメーションの工場、この〈欲望の体制〉の生産装置は、あたかも物を作るのにいかなる時間も必要としなかったとでもいうかのように、原料からすぐさま大量の製品を吐き出してくる。さらにまた、コンピュータという〈欲望の体制〉の精巧な頭脳は、かつての天才さえもなしえなかったような速度で、またたくまに厖大な計算をなし遂げ、多くの情報を処理し、厖大な情報をほとんど同時に末端にまで行き渡らせる。

これら〈欲望の体制〉の生み出したおびただしい機械装置は、どれも猛烈なスピードを追い求め、無限の速度を追求してやむところを知らない。限りなく氾濫する現代の欲望は、ほとんど運命的に無限の速度を必要としたのである。しかも、現代では、このスピード追求それ自身が至上命令になっており、それ自身がひとつの客観的な目的になってしまっている。もはや、それに対して疑問を差しはさむことは許されない。現代は、何故なのかも分からずに、また明確な目的ももたずに、ただひたすらスピードを追求しているのである。しかも、このような現代文明の追求しているスピードは、すでにその限度を超えて、人間の自然性を遙かに超えてしまっている。もしも何か或る目的をもってスピードを追求したのなら、人間の自然な動きを遙かに超えるようなところまで進むことはなかったであろう。現代では、もはや人間がスピードを支配しているのではなく、逆にスピードが人間を支配しているのである。

スピード追求の世界では、人はいつも多忙である。その場その場で、自分のもとにつぎつぎと押し寄せてくる様々のものに機敏に適応していかねばならなくなる。人間は自ら機械の一部になって、自分自身を機械のスピードに合わせていかなければならないのである。そのために、今日、人々は、文字通り忙殺される。現代の体制のもとでは、人間は、本来の〈時間〉というものを失うのである。

持続の喪失

〈時間〉とは、ものごとの〈持続〉それ自身であり、必ずしも時計で計ることのできるものではない。ところが、スピードがほとんど運命となってしまっている現代の世界では、そのような〈持続としての時間〉が失われる。

現代の交通機関や通信機関は速度を無限に追求することによって、空間を征服するとともに、外的時間をますます短縮し、これを根こそぎ無化した。そして、それでもって、人間の精神にとって必要な内的時間、つまり〈持続〉をも奪ってしまった。実際、様々のものが猛スピードで通り過ぎていき、おびただしい量の情報が瞬時のうちに届けられる現代にあっては、かつてのように、ひとつことを持続するということが不可能になる。様々のものがことせわしく押し寄せ、ことせわしく過ぎ去っていく現代人の生活では、集中と熟慮が失われ、精神の持続は瞬間毎に阻止されてしまう。それどころか、ここでは逆に、人々は、瞬間瞬間毎に持続のない外界に自己自身を合わせていかねばならない。そして、そのためには、瞬間瞬間毎に、自分自身の内的持続、つまり内的時間を寸断していかねばならない。現代では、持続の寸断による適合がむしろ強制されているのである。

なるほど、現代にあっても、精神が寸断されているとか、絶えざる適合が強制されているというような拒否感を感じることなく、現代のスピードの世界ですこぶる健全に生きている人もいるし、むしろその方が多数である。しかし、それは、ちょうど同じ速度で同じ方向に走っている二つの急行列車が互いに止っているように見えるのと同じく、単に現代のスピード世界に適合しているというだけにすぎない。内的持続を失った者のみが、外的な非持続の世界に適合しうる。

内にあっても外にあっても〈持続としての時間〉が失われる現代にあって、ひとつの仕事が深まり、成長し、時熟するということが困難になるのはそのことによる。現代人の精神は切れ切れに寸断されてしまっているから、すでに、現代人の一生は、単に寸断され切れ切れになった瞬間瞬間の合計にすぎないかのようである。確かに、今日の人々の平均寿命は延びはした。しかし、現代人が生命を燃焼させて生きることのできる充実した時間は、その分かえって希薄化してしまっている。このような現代にあってなお精神の持続を保ちつづけようとする精神にとっては、この持続のない機械仕掛の現代世界は耐えられないほど異質な異国である。そのために、このような精神は、現代世界の異邦人のように、この世界からは排除されてしまう。

現代という時代は、精神が散乱し、欲望が無限に氾濫した時代であった。欲望は、いつも、ひとつの対象からまた新しい対象へと絶えず移行し、とどまるところを知らない。だから、このような現代の世界では、あらゆるものが現われたかと思えばすぐに消え失せ、めまぐるしく変化していく。すべては水泡のように絶えず生滅を繰り返すだけであって、そこにはなんら永続性というものがない。すべてが刹那的であって、何ものも持続するものがない。

失われた連続性

このように、〈持続〉つまり内的時間の失われたところでは、同時に、ひとりの人格の中での〈歴史〉もまた失われる。様々のものがめまぐるしく変化する現代のスピード世界に合わせていくためには、人は、つぎつぎと押し寄せてくる外界の情報をすぐさま受け取る

と同時に、すぐさま忘却していかねばならない。そうでなければ、次の新しい情報を受け入れることができず、次の新しい別の状況に対応していくことができなくなるからである。つまり、現代では、ひとつの人格の中ですでに内面的精神が寸断されてしまっているから、現代人の精神のうちで、過去のものを保存しつづけるということが困難になる。現代の世界では、ひとりの人間のうちでも、過去は絶えず脱ぎ捨てられ、意味なく忘却されていく。ひとりの人格の中で〈歴史〉が失われていくというのは、このような意味においてである。

なるほど、現代人たりとも、今なお過去の自己を保存しつづけているとは言えるかもしれない。しかし、現代にあっては、人間はすでに断片化してしまっているから、この保存された過去の自己と現在の自己の間の一貫した持続、つまり連続性がなくなってしまっている。

現代人の中で思想上の転向というものがいとも簡単になされるのは、そのためでもあろう。過去と現在の間に一貫した連続性をもたなくなったから、何の反省も何のうしろめたさもなく、昔信じていた思想とは全く正反対のことを言い出すこともできるのである。しかも、彼らの中では、現在の自己が過去の自己に対して責任をもっているという自覚が失われてしまっているから、彼らに、はもはや転向における苦悩はない。過去の自己と現在の自己とに繋がりのあるところでは、その間の矛盾に苦悩するということも可能であるが、現代人にあってはすでにそういう繋がりがないから、何の苦しみもなしに変身してしまえる。過去はもはや運命ではなくなっているのである。

現代人は絶えず過去との連続性を断ち切り、過去からいつも身軽になっている。今日の人々にとっては、今年の夏の自己と去年の夏の自己とには何の連関もなく、去年の夏は、遙か遠い昔の他人の夏のように、何の実在感もないものになってしまっている。超音速の飛行機の爆音は、「われわれは時間を征服せり」と高らかに宣言しているかのようである。

8　不可知性

得体のしれない機構

現代の世界、この巨大な〈欲望の体制〉は、そのうちに住んでいるわれわれによっては、その全体像が明確には分からない。この世界は、その内部においては徹底的に計算され尽した機構なのだが、その全体それ自身になると、途方もなく量りがたいものになる。全体像そのものは、もはや計算できるものではなく、はっきりとは把握できるものでもない。この世界の地平はいつも茫漠としていて、あたかも無の彼方に消えていくかのようである。もしも、その境界が明確に知られているのなら、この世界がこれほど無限に膨張していくというようなことはなかったであろう。そこには、われわれには知りえない何ものかが働いているように思われる。

かつてまだ精神の生きていた時代には、仏教世界なら仏教世界の、キリスト教世界ならキリスト教世界の、イスラム世界ならイスラム世界の明確な世界像があった。世界は、〈精

神〉によって明瞭な輪廓が描かれていたのである。ところが、現代世界の輪廓は、どこまでもふくれあがっていく風船のように、もはや不動のものではなく、その行き着く先は量り知れなくなっている。現代の世界、それは、ひとつの得体の知れない不可知な機構なのである。

現代の巨大な産業機構は、この現代の不可知な機構の写像である。実際、それは、どこからともなく大量の物資が生産されてきて、また同時にどこへともなく消費されていく得体の知れない機構である。しかも、ここでは、誰もが生産者であると同時に消費者でもあり、誰が生産者で誰が消費者なのかも定かでない。この巨大な産業機構は、あまりにも巨大になりすぎたから、その中にいる一人一人の人間には、もはやその全体を見渡すことができなくなっている。人は、この巨大な産業機構の中で、全体像をつかむことができないまま、わけも分からず動いているだけである。

だが、この全体像が分からないということは、現代人にとっては都合のよいことでもある。人々は、全体の行き着く先も知らずに、また知ろうともせずに、目先の利益のみを追求していくことができるからである。人々は、何の抵抗感も懐くことなく、いとも簡単にこの巨大な機構に操られ、利用されていくことができる。この巨大な産業機構の実体は一体何なのか、結局誰にも分からない。それは、個人にはかまうことなく、それ自体として自動的に動いていくひとつの巨大機構なのである。

そればかりか、ひとつの企業がすでにそうなのであって、それは、それ自体として得体の知れない一種の人格をもって動いていく生きもののようである。〈法人〉といわれるものがそれであって、個人は、経営者にしても、従業員にしても、この〈法人格〉に支配される歯車にすぎないかのようである。ここにも、個人個人には把握しきれない不可知なものが動いている。だから、それは、個人が滅んでも、独自に生き延びていく。法人格という非人格的なものだけが、個人を超えて生き延びていくのである。まして、このようなものによって構成される今日の巨大な産業機構が、正体の分からない巨大な怪物のようになるのも当然である。それは、すでに人間を超えた不可知な実体なのである。

神なき文明

現代の体制は、それ自身、人間を超えた実態の分からない何者かによって動かされているようにみえる。なるほど、かつての時代でも、神とか自然とか、人間を超えるものが人間を支配していた。しかし、それらは、常に明確な輪廓をもっており、人々はいつもそれらをはっきりと認識していた。ところが、現代では、この人間を超えるものが一体何であるかが分からない。そこには一種の神秘性さえあるが、その神秘性は、単に、かつての神や自然の代りをする何ものかの秘密性にすぎない。その実体は何なのか依然として分からない。現代の体制は、あたかもひとつの巨大なブラック・ボックスのように、巧妙に自分自身の実体を隠しながら、人間を動かしていく。

現代は、科学技術文明に支配された時代であるといわれる。そして、この科学技術はあ

らゆる秘密をあばき、すべてを合理的に計量・計画し、いかなる神秘性ももたないものであった。ところが、現代の巨大化した科学技術文明そのものは、全体としてみると、一種の悪魔的神秘性をもったものになってしまっている。科学者や技術者も、ただ目先的な追求に埋没しているだけで、その巨大な全体については、誰も分かってはいない。現代の体制、この〈欲望の体制〉は、われわれには実体を知ることのできない体制なのである。

現代では、この得体の知れない巨大な技術文明、この〈神なき文明〉が、いわば神の代りをしている。だからこそ、かつて神が神秘であったように、現代文明全体も、一種の神秘性、擬似の神秘性をもつに至ったのである。現代人は、精神を捨て去った代償として、このような正体の分からない巨大な生きものを手に入れた。そして、あろうことか、それによって人間は支配されるようになったのである。ここでは神々は永遠に沈黙している。

9　大地への帰還

無限進行

現代の文明、この巨大な〈欲望の体制〉は、一体どこへ行こうとしているのであろうか。多分、それは、現代文明自身にも知らされていないことなのであろう。もともと、それは自らの目的をもっていなかったからである。というより、むしろ、それは、目的を喪失したところから出発していたと言うべきであろう。

現代文明は、もはや自己自身を制御することができない。それは、すでにそれ自身でひとつの無限進行の組織なのであって、内部のいかなる力にも関係なく、あたかも無限進行それ自身が自らの運命ででもあるかのように、ただひたすら突き進んで行く。

この巨大な体制の無限進行の途上にある者は、そのことに気づくことはない。人々は、この無限進行のただ中で、ただひたすら自己の目先の欲望のみを追求しているだけでよいからである。もしも、この無限進行が何の目的ももたない暗闇への突入であることを人々が知ったとするなら、人々は、この欲望の無限追求に疑問をもち、少なくとも一旦は立ち止まってしまうであろう。〈欲望の体制〉は、だから、この進行を人々に〈進歩〉だと思い込ませ、それ自身の全体像を隠しておく。現代の人々が、現代文明の中にあって、およそ〈進歩〉だと思い込んでいる事柄は、本当は、この〈欲望の体制〉の狡智なのかもしれない。

しかし、おそらく、これは〈欲望の体制〉の狡智でさえないであろう。なぜなら、欲望の巨大な体制は、それ自身もはや自己の行手が何であるかを認識していないからである。欲望の巨大な体制に奸計を巡らすだけの才智はない。むしろ、巨大な〈欲望の体制〉全体が、それ以上の何ものかに支配されているのである。それ以上の何ものか、いわば〈盲目の意志〉とでもいうべき何ものかによって、それは支配されているかのようである。

現代の文明、この欲望の巨大な体制は盲目である。それは無目的にただひたすら膨張していく。なるほど、現代人の中にも、この現代文明の行方が、なにかしら暗い霧に包まれ

ていることを、いくばくかの不安をもって予感している者もあるではあろう。しかし、この現代人の不安は、この膨張する巨大な体制にとっては、不都合であるどころか、かえって好都合である。現代人は、この不安をいつまでも凝視し、それにどこまでも耐えていくだけの確固たる精神を持ち合わせてはいないからである。現代人は、だから、この不安から逃れようとして、逆にまた新しい不安へと駆り立てられていく。不安が不安を呼び、それがかえって膨張を加速する。現代人の不安は、もはや精神がその故郷から離反したときにもつ〈精神の不安〉なのではなく、欲望が休らうことのできる休息地をもたないという〈欲望の不安〉にすぎない。人は、あるいは、このいつも不安な欲望の無限追求に疲れて、しばらく休息しようとするかもしれない。しかし、このつかの間の休息も、現代の体制にとっては次の新しい膨張のための活力補給にすぎない。かくて、現代の巨大な体制は果てしなく膨張していく。それは、自己の内なるものも外なるものも、何ものをも膨張のためのエネルギー源に供する。そこでは、現代人の不安も休息も膨張の単なる材料にすぎない。

この巨大な〈欲望の体制〉の中でただ妄動するだけの現代の中にあって、この現代文明の行き着く先がひとつの欠如であって、現代文明の生み出したものが空無であることを明確に自覚している極く少数の例外者が、それでもなお存在しはするであろう。しかし、これは、〈欲望の体制〉にとってはそれほど問題ではない。〈欲望の体制〉は、まるで自分の体のうちにある不必要な排泄物のように、それをいとも簡単に排除してしまう。

あるいは、人は、現代の文明を拒否して、人間がそこから労苦して立ち上がった精神の原初へ復帰せよと叫ぶかもしれない。しかし、現代の体制は、もともと精神の原初から離脱し、それを破壊してきたのだから、現代においては、原初への復帰は不可能である。現代は、故郷からあまりにも遠ざかりすぎてしまった。もはや故郷に帰ることはできない。

現代の体制のもとでは、人間が本来もっていた内省の力と全体を通観する力とが、この人間を超える巨大な体制によって奪われてしまっている。無限進行することが運命づけられている現代の体制にとっては、人間のそのような力は無限進行の力に対して逆の方向に向いており、いわばこの無限進行にとってはブレーキになってしまうからである。だから、この体制は、人間にその都度目先だけの目標を与えて、それに向かって突き進むように仕向ける。こうして、人々は、嬉々としてこの体制の無限進行に奉仕するエネルギー源になる。彼らは、ただこの進行に奉仕しているときにのみ安心感をもち、逆に、少しでもこの体制の進行の路線からはずれそうにでもなったなら、かえって不安になる。

かつての世界は、今日のように、世界全体がその根源から離脱し、無限に膨張するようなことはなかった。かつての世界では、自然と生物、生物と人間、人間と自然、そして人間と人間の間に切り離し難い結び目があって、世界はひとつの円環をなしていた。諸事物が有機的に連関し合って、ひとつの大きな輪になっていたのである。

ところが、現代の世界では、この結び目は断ち切られ、世界の大きな円環は破壊されてしまった。そのかわり、無限に膨張する欲望が、ばらばらになった諸事物を機械的に結びつけ、巨大な〈欲望の体制〉をつくりあげるに至ったのである。そして、この欲望の巨大

な体制は、自然も動物も人間も、あらゆるものを自己のうちに呑み込み、無限進行の手段に供した。かくて、この世界は、もはや円環的にではなく、直線的に、得体の知れないどこかへと突き進んで行くようになった。

文明という名の急行列車

現代の体制、この巨大な〈欲望の体制〉は、いわばブレーキのない急行列車に似ている。それはただ前進するのみであって、とどまることも逆戻りすることもできない。しかも、この列車には運転手がいない。この列車自身が、自動的にかつ加速度的に前進するひとつの自動機械なのである。

現代人は皆、このような急行列車に乗っている。誰しもそこから降りることはできない。だから、人々はこの急行列車に振り落とされまいとして、それに絶えずしがみつこうとしている。否、それどころか、ほとんどの現代人は、この列車の中でさらに速く前進しようとして、我先に前へ前へと走ろうとしているようにさえみえる。

なるほど、この急行列車の中にも、この列車の行き着く場所が一体何であるかと問う者もいるではあろう。そして、それが、とりもなおさず没落という終着駅に他ならないと自覚している者もいるではあろう。しかし、そういう少数の例外者も、この列車を止めることはできない。それどころか、彼らは、この列車のほとんどの乗客によって押し退けられてしまう。彼らの「止まるべきだ」という叫び声は、多数の乗客の大声によって掻き消されて、誰の耳にも達しない。

彼らはそのことを知って、それでも自分達だけは暴走すまいとして、逆に後へと走り出すかもしれない。しかし、列車はどこまでも前進しているから、たとえ逆戻りしようとしても、それは無駄なことである。彼らはやがてこの列車の最後部に行き着いて、それの不可能なことを悟るであろう。そして、ただ前へ進むことを嫌って、この最後部の座席に、あたかも切符を持たずに乗り込んだ乗客のように、うしろめたい気持で立ち尽すことしかできないであろう。

この急行列車の暴走は、それ自身運命的なことなのであって、誰も食い止めることはできない。否、食い止めることができないどころか、ほとんどの人々は、この列車中で互いに競争したり、騒ぎ立てたりして、相変らずこの急行列車の旅を謳歌しているのである。

この急行列車から見える外部の世界は、すでにその実在性を喪失してしまっている。窓から見える風景は、もはや大地にしっかり根を下ろしたものではなく、山も川も、草も木も、すべてがただ瞬間瞬間に視界の中に入ってきて、またすぐに消え去っていってしまう。それらはすぐさま忘却され、人々の記憶の時計の中には刻み込まれはしない。列車が停車したとき風景もまた静かに休らうように、精神が不動であるときのみ、外界のものも不動でありうる。だが、この列車の中にいる人々の精神は、不動のものを受け入れることができるほど、もはや落ち着いてはいない。むしろ、停止することを恐れているかのように絶えず慌しく動いていくのでなければ、かえって不安なのである。この限りなく逃走する列

車は、その逃走を可能にするために、内的外的を問わず、実在性を破壊してしまった。一体、この現代という急行列車はどこへ行こうとしているのであろうか。

現代文明は大地から離反してきた。だが大地から離反してきた現代文明も、かつての文明がそうであったように、いずれは同じ大地へと帰還していくであろう。この現代文明も、今までの東西の諸文明を呑み込みながら、自らを解体して大地のもとに帰りゆくときが来る。そのとき、はじめて、現代文明の列車はその暴走の長い旅程を終える。

しかも、このとき、大地はなお永遠に静かである。歴史は、この大地の永遠の沈黙の中から生れ、同時にそこへと帰る。歴史の生と死は、大地の永遠の沈黙の中ではひとつである。この大地の沈黙の静けさは、未来の以後であり、かつ過去の以前であり、同時に現在の足下である。今日のあの高貴な精神の沈黙は、この大地の永遠の沈黙を映し出している。大地の永遠の沈黙のもとでは、人の労苦してなすところのものはすべて空である。

だが、大地はなお永遠である。いかに愚かなことがこの地上で演ぜられようとも、大地はなお永遠である。